東京大学 地震研究所 要覧 2001 - 2002



Earthquake Research Institute University of Tokyo

目次 Contents

1	. 所長挨拶 1 Director Prof. Teruo Yamashita's Greeting
2	. 沿革
3	. 組織
4	. 職員 6 Staffs
5	. ハイライト研究11 Recent Research Highlights
6	. 共同研究
7	. 近年の地震と火山活動研究
8	. 研究部門,センター,図書室,技術開発室の紹介60 Research Activities of Divisions, Research Centers, Library and Laboratory for Technical Support and Development
9	. 教育活動と学生の活動104 Educational Activities
10	. 広報活動と出版物
11	. 共同利用と文部省科学研究費研究一覧
12	. 附属研究施設配置図 / 予算 / 定員114 Locations of Observatory Facilities/Budget/Number of Regular Staffs
13	. 本所平面図 / Floor Plan of ERI

表紙説明 1999年台湾集集地震(Mw7.6)の強震動シミュ レーション Numerical simulaton of strong ground motion for the 1999 Chi-Chi, Taiwan earthquake.



Director Prof. Teruo YAMASHITA's Greeting

地震研究所は,地震及び火山噴火に関する諸現象 の解明とこれらに起因する災害の軽減のための研究 を推進してまいりました.本研究所は,創立以来75 年にも及ぶ長い歴史がありますが,その間,近代地 震学の確立などに主導的な役割を果たしてきました. 最近では,研究の新たな展開を目指し,所内での議 論を通じて新たな研究プロジェクトを策定しました. これらの研究プロジェクトは,1昨年に行われた外 部評価において革新的との評価を頂いております. 今後は,これらの研究を強力に推進し,新しい地震 像・火山像の創成に地震研究所が主導的役割を果た すべく努力を行っていきたいと思っております.

地震・火山現象の根源的な理解のためには,全地 球的な視点も必要となりますが,このような研究は 多くの研究者の緊密な共同作業により有効に推進さ れるものです.地震研究所は全国共同利用研究所と して,国内国外を問わず多くの地震・火山に関する 研究者に交流の場を提供し,共同研究の推進をはか っています.また,本所は,大学での地震予知研究 や火山噴火予知研究の中核的機関として,全国の関 連研究者と共同して予知研究を推し進めています. 今後とも,共同研究の一層の推進を図る所存であり, 引き続き,関係のみなさまからの研究計画の提案や 参加をお願いする次第です.

地震研究所の教官は,大学院教育にも大きくかか わっています.本所では,多くの先端的な野外観測 や室内実験が行われており,教育の途上で,このよ うな研究活動に参加することにより,大学院生諸君 は地球の「息吹」を身を持って実感できるものと思 います.研究科とも協力しながら,本研究所は今後 とも特色のある大学院教育を推進していきたいと思 っています.



A global view about the Earth is required for the fundamental understanding of phenomena related to earthquakes and volcanic eruptions. Such studies could be efficiently carried out in close cooperation with many researchers. As a "Shared Institute of Japanese Universities", ERI is making an effort to promote close collaboration among researchers. ERI is also recognized as a core institute for the research of earthquake prediction and volcanic eruption prediction, and we are promoting the prediction research cooperatively with related researchers over the nation. We will continue to contribute to the development of earth sciences in collaboration with researchers throughout the nation.

Faculty members of ERI are actively involved in the education of graduate students at the University of Tokyo. ERI is characterized by advanced field and laboratory researches. Graduate students at ERI could feel a "breath" of the Earth, joining such research programs. We will continue to promote education characterized by the above features in collaboration with graduate schools of the University of Tokyo.





東京大学地震研究所全景 General View of the Earthquake Research Institute



地震研究所創立10周年を機に,寺田寅彦によって撰せられた銅板の碑文 Monumental Inscription Composed by Prof. Torahiko TERADA (1878-1935)

地震研究所は,大正14年11月13日に創立された. それまで30余年にわたり日本の地震学発展に貢献し た文部省震災予防調査会の研究業務は,このとき本 所に引きつがれた.昭和3年6月には,東京帝国大学 (当時)の構内に,本庁舎が完成し,本所は,同大 学附属の研究所として,その基礎を定めたのである.

第2次世界大戦の苦難の時期を経て昭和24年5月31 日には,国立学校設置法が制定され,本所は東京大 学附属の研究所となった.戦後の復興と共に,国内 外の研究の進展にもめざましいものがあった.本所 でも研究規模の増大に伴い,創立当時の庁舎は次第 に手狭になり,研究活動に支障をきたすにいたった ため,農学部構内に昭和45年3月に現在の庁舎が建 設された.

現庁舎完成以後,本所は地震学・火山学の基礎研 究を行うとともに,わが国における地震予知・火山 噴火予知計画推進の一翼を担ってきた.昭和54年度 には地震予知観測センターが地震予知観測情報セン ターへと改組され,地震予知研究に必要な観測研究 の他に,全国の大学の地震予知計画に係わる観測デ ータの集積,整理,提供等による研究も行われるよ うになった.

近年,全国の大学が合同で実施する集中観測や海 底観測,全国微小地震観測網のデータ流通とそれに 基づく各種プロジェクト研究,海底ケーブル利用に よる地震津波電磁気観測や,広帯域地震計による海 外観測網の整備(POSEIDON計画)など,地震研 究所が全国の大学機関と共同して運営しなければと うてい実現しないような大きな研究計画が立案開始 されるようになり,これを担うに足る体制が地震研 究所に要求されるようになった.このような状況を 背景として平成6年6月,地震研究所は改組されて, 東京大学附置の全国共同利用研究所となった.地震 研究所は4部門,6センター・施設の組織となり,客 員教授制が採用され,全国から研究協力者を集めた 各種の共同研究が行われるなど,より「開かれた研 究所」として新たな出発をすることになった.

平成9年4月,これまでのPOSEIDON計画の地震 観測ネットワークを発展的に継承し,地球電磁気学 や測地・地殻変動などの分野の総合的地球規模観測 ネットワークを構築して,国内外の研究者と共同し て観測研究する目的で,新たに海半球観測研究セン ターが発足した. Earthquake Research Institute was established on November 13th, 1925, as a part of Tokyo Imperial University. The decade and a half since the establishment of ERI was a period that witnessed the rise of modern seismology in Japan. After World War II, the institute was re-established as one of the research institutes of the University of Tokyo. Following the nation wide cooperative Earthquake Prediction Program started in 1965 and Volcanic Eruption Prediction Program in 1974, ERI played a core role in bearing the heaviest responsibility for their implementation, as well as serving as the central institute for fundamental geophysical researches in Japan.

In the last few decades, various cooperative studies, such as seismic observations in several inland areas, seismic and geophysical observations in the ocean, application of Global Positioning System (GPS), seismic observations by a network covering the whole of the western Pacific under the Poseidon Plan, and experiments on volcanic structure and magma supply system, have been planned and conducted as joint researches of universities and institutes in Japan. To further promote these projects, ERI was re-organized in 1994 as a shared institute of the University.

The re-organization of ERI formed four divisions and centers, provided positions for visiting professors, and formulated a system of cooperative studies.

In April 1997, Ocean Hemisphere Research Center was established to develop and operate a global multidisciplinary network in the Pacific hemisphere consisting of seismic, geoelectromagnetic, and geodetic observations.





Notice: Div.=Division, Res.C.=Research Center, C.=Center

4. 職員 Staffs

平成13年4月1日現在 April 1, 2001

所 長 山 下 輝 夫 Director Prof. Teruo YAMASHITA

事務	部				庶	務	掛				义	書	掛				用	度	掛			
Administ	ratio	n D	ivis	ion	掛長((併)	渡	邉	ΤĒ	昭	掛	長	長	田	重	信		(併)	西	尾		勉
事務長	高	橋	忠	世	事務	휨官	±	屋	雅	史	事利	务官	島	村	ひろ	3子	上世	E任	西	田	芳	見
Chief Tad	ayo T	AKA	AHA	SHI							ī	司	米	倉	和	枝	事利	휨	浦	Ш	誠さ	上郎
事務長補佐	安	畄	邦	信	人	事	掛				1	5	後	藤	俊	彦	E	5	滝	井	洋	—
総務主任	渡	邉	ΤĒ	昭	掛	長	伊	藤		晃												
会計主任	西	尾		勉	事務	휨官	野	\Box	知	行	経	理	掛				管	理	掛			
											掛	長	佐	納	悠	司	掛	長	柳	澤	茂	孝
					研究	記協さ	り掛				事利	务官	黒	崎	めく	ぐみ	事務	휨官	樽	谷	茂	徳
					掛	長	小	林	利	和	5	司	高	木	博	史	技	官	春	日	智	明
					事務	阁官	宍	倉	さこ	つき												

研究部

地球	惊流動砌	地理	地球ダイナ				
Divi	sion of	Div	Division of				
Med	chanics	Dyı	Dynamics				
教	授	島	崎	邦	彦	教	授
Chief	f Dr. Ku	nihik	o SHI	MAZ	AKI	Chi	ef Dr. 7
助教	授	Щ	科	健一	-郎	Ī	司
	1	堀		宗	朗	Ī	司
助	手	Ξ	浦	弥	生	助教	敎授
	1	遠	田	晋	次	助	手
	1	小厦	ĒΠ	康	子	Ī	司
]	小	或	健	_	ត្រ	司
技術	官	渡	辺	トキ	-T		

技術開発室

Laboratory for Technical

Support and Development

助	手	大	竹	雄	次
技術	衍官	小	Щ		茂
Ī	5	内	田	ΤĒ	Ż

地球ダイナミクス部門 Division of Global Dynamics

教	授	瀬	野	徹	Ξ						
Chief Dr. Tetsuzo SENO											
6	3	藤	井	敏	嗣						
1	3	兼	畄	—	郎						
助教	牧授	中	井	俊	—						
助	手	吉	田		満						
1	3	安	田		敦						
[7	司	折	橋	裕	_						

地球計測部門

同

助教授

同

助手

同

技術官

Division of Monitoring and Computational Geoscience 教授大久保修平 Chief Dr. Shuhei OKUBO 同東原紘道

山下輝夫

新谷昌人

古屋正人

加藤育子

隆

文 科

宮 武

孫

地震火山災害部門 Division of Disaster Mitigation Science

	教	授	壁	澤	寿	海
	Chief	f Dr. Tos	himi ŀ	KABE	YASA	WA
	助教	牧授	Т	藤	—	嘉
	Ē	5	都	司	嘉	宣
	Ē	5	纐	纈	—	起
同			古	村	孝	志
	助	手	飯	田	昌	弘
		5	境		有	紀
	技術	衍官	Ι	藤	和	子
	Ē	5	坂	上		実

附属研究施設 地震予知研究推進センター Earthquake Prediction **Research Center** センター 加藤照之 長教授 Chief Dr. Teruyuki KATO 平田 教授 直 助教授 佐 藤 比呂志 同 吉 田真吾 飯尾能久 同 嶋 同 上 誠 助 小竹美子 手 ーノ瀬洋一郎 同 藏下英司 同 同 宮 崎 真 一 石川良宣 技術官 荻 野 スミ子 同 同 望 月裕峰 同 坂 守 地震地殻変動観測センター Earthquake Observation Center センター 長 教授 金沢敏彦 Chief Dr. Toshihiko Kanazawa 教授 武 尾 実 同 笠原順 Ξ 同 岩 崎 畕 哉 同 佐 野 修 大久保 修 平 同(併) 佃 助教授 爲 成 部 同 \mathbb{P} 卓 同 原雅 篠 尚 同(併) Т 藤 — 嘉 助手 萩 原 弘 子

同

同

同

同

技術官

同

同

同

同

中尾

酒 井

井 出

山田知朗

松本滋夫

酒 井

平田安廣

荻 野

芹

茂

哲

要

泉

澤正人

慎一

和歌山地震観測所 Wakayama Seismological Observatory 助手 瀬戸憲彦 技術官 田 上 貴代子 広島地震観測所 Hiroshima Seismological 同 Observatory 井 技術官 上義弘 同 Ξ 浦 禮 子 三 浦 勝 美 同 ンター 信越地震観測所 Shin'etsu Seismological Observatory 技術官 小林 勝 羽 同 田敏夫 同 同 橋 本信一 富士川地殻変動観測所 同 Fujigawa Geophysical 同 Observatory 同 技術官 渡邊 茂 同 同

地震予知情報センター Earthquake Information Center センター 阿部勝征 長教授 Chief Dr. Katsuyuki ABE 菊地正幸 教授 助教授 譍 野 澄 助手 山 中 佳 子 鶴 畄 弘 技術官 野 口 和 子 火山噴火予知研究推進セ Volcano Research Center センター 長 教授 渡辺秀文 Chief Dr. Hidefumi Watanabe 教授 井 田喜 眀 中田 節也 助教授 鍵 Щ 恒臣 原 萩 道 助手 徳 金 子 隆之 Ш 及 純 大 湊 隆雄 技術官 竹 田 豊太郎 長 田 昇 井 本良子 浅間火山観測所 Asama Volcano Observatory 技術官 小山悦郎 小諸火山化学研究施設 Komoro Observatory of Volcano-Chemistry 技術官 辻 浩 伊豆大島火山観測所 Izu-Oshima Volcano Observatory 助手 坂 下 至 功 技術官 下 村 高 史 霧島火山観測所 Kirishima Volcano Observatory

センター 歌田久司 教授 慞 Chief Dr. Hisashi UTADA 教 授 深 尾良夫 同 Ш 勝 均 同(併) 金 沢 敏 彦 助教授 山 野 誠 同 森 田 裕 _ 原 肇 同 塩 助手 降 飯 高 同 綿 辰 吾 田 同 清 水 久 芳 同 希 竹 内 嶋信代 松 技術官 八ヶ岳地球電磁気観測所 Yatsugatake Geo-Electromagnetic Observatory

海半球観測研究センター

Ocean Hemisphere

Research Center

Observatory 所長併) 歌 田 久 司 江の島津波観測所 Enoshima Tsunami Observatory 所長併) 都 司 嘉 宣

助手小山盛雄

技術官

増 谷 文 雄

教授・助教授メンバー Professors and Associate Professors

地球ダイナミクス部門

Division of Global Dynamics

平成13年3月1日現在 April. 1. 2001

地球流動破壊部門 **Division of Earth Mechanics**



教授 島崎邦彦 プレートと地震, 地震の繰り返し SHIMAZAKI. Kunihiko. Prof. Seismic Cycle and Plate Motion Earthquake Recurrence



助教授 山科健一郎 地震・火山物理学, 予測地震・火山学 YAMASHINA, Ken'ichiro. Assoc. Prof. Physics of Earthquake and Volcanic Eruption, Prediction Oriented Seismology and Volcanology

助教授 堀 宗朗 地震と断層の力学, 地殼工学 HORI, Muneo, Assoc. Prof. Mechanics of Earthquake and Fault, Crustal Engineering

教授 藤井敏嗣 マグマ学, 実験岩石学 FUJII, Toshitsugu, Prof. Magmatology, Experimental Petrology

教授 兼岡一郎 同位体地球惑星科学, 地球進化学

KANEOKA, Ichiro, Prof. Isotope Geo and Planetary Sciences, Study on the Evolution of the Earth



教授 瀬野徹三

SENO. Tetsuzo.

Plate Tectonics.

Multisphere

Environment

Prof.

プレートテクトニクス,

地球多圈相互作用

Interaction Tectonic

Effects on Earth's



NAKAI, Shun'ichi, Assoc. Prof. Isotope Geochemistry

地球計測部門

Division of Monitoring and Computational Geoscience



教授 東原紘道 耐震・制震構造, 地殻工学 HIGASHIHARA, Hiromichi, Prof. Intelligent Seismic Load Reduction, Devices of Structures, Remote Sensing of Shallow Crusts



教授 大久保修平 地球ダイナミクス, 測地学 OKUBO, Shuhei, YAMASHITA, Teruo, Prof. Geodynamics,

Geophysical Geodesy Earthquake Source



助教授 宮武 隆 助教授 孫 文科 計算地震学 測地学 地震発生過程論 地球ダイナミクス MIYATAKE, Takeshi, SUN, Wenke, Assoc. Prof. Computational Seismology, Physics of Earthquake Source



地震火山災害部門 **Division of Disaster Mitigation Science**

理論地震学,

震源力学

Theoretical

Seismology,

Mechanics

Prof.



教授 壁谷澤寿海 耐震工学 鉄筋コンクリート構 造 KABEYASAWA, Toshimi, Prof. Earthquake Engineering on Structures, Reinforced Concrete Structures



地震工学 史料地震学 TSUJI, Yoshinobu, KUDO, Kazuyoshi, Assoc. Prof. Assoc. Prof. Strong Motion Tsunamis and Storm Seismology, Surges, Historical Engineering Earthquakes Seismology



Process

助教授 纐纈一起 応用地震学, 地震波動論 KOKETSU, Kazuki, Assoc. Prof. Applied Seismology, Seismic Wave Theory



強震動シミュレーション FURUMURA, Takashi, Assoc. Prof. Applied Seismology, Numerical Simulation of Strong Ground Motion

地震予知研究推進センター Earthquake Prediction Research Center

観測地震学,

地殼構造論

Observational

Seismology,

Engineering

Seismology

Prof.

HIRATA, Naoshi,



固体地球物理学,

KATO, Teruyuki,

Geophysics, Crustal

地殼変動論

Prof.

Dynamics







助教授 吉田真吾 実験地震学, 地震発生過程の物理 YOSHIDA, Shingo, Assoc. Prof Experimental Seismology, Physics of Earthquake Generation Process

制御震源地震学

Crustal Structure

Prof.

IWASAKI, Takaya,



 構測地震学 , 地震発生過程の物理 IIO, Yoshihisa, Assoc. Prof. Observational Seismology, Physics of Earthquake Generation Process



助教授 上嶋 誠 固体地球物理学, 理 地球電磁気学 UYESHIMA, Makoto, Assoc. Prof. Solid Earth Geophysics, Geoelectromagnetism

地震地殻変動観測センター Earthquake Observation Center



教授 金沢敏彦 地震予知, 海底地震学 KANAZAWA, Toshihiko, Prof. Marine Seismology



地震発生過程論, 火山地震学 TAKEO, Minoru, Prof. Physics of Earthquake Source Process, Volcano-Seismology



教授 立原順二 海洋地震学, 地震予知 KASAHARA, Junzo, Prof.

Marine Seismology, Seismological Investigation in Ocean and Engineering Development for Ocean Bottom Seismic Measurements, Seismotectonics in Oceanic Region



教授 佐野 修 観測地殻物理, 地殻物性 SANO, Osamu, Prof. Observational Crustal Physics, Physical Properties of Crustal Materials



助教授 佃 爲成 地震予知, 地震学 TSUKUDA, Tameshige, Assoc. Prof. Earthquake Prediction, Seismology

助教授 卜部 卓 地震学, 地震計測 URABE, Taku, Assoc. Prof. Seismology, Seismometry



助教授 篠原雅尚 海洋地震学 SHINOHARA, Masanao, Assoc. Prof. Marine Seismology

地震予知情報センター Earthquake Information Center







澄

教授 菊地正幸 地震発生機構論 リアルタイム地震学 KIKUCHI, Masayuki, Prof. Earthquake Source Process, Realtime Seismology

教授 阿部勝征 地震活動, 情報地震学 津波発生機構 ABE, Katsuyuki, Earthquake Seismology, Tsunami Seismology

地震情報システム TAKANO, Kiyoshi, Assoc. Prof. Network Seismology, Seismic Information System

火山噴火予知研究推進センター Volcano Research Center

Prof.



教授 渡辺秀文 火山物理学, 地球内部物理学 WATANABE, Hidefumi, Prof. Prof. Volcanology, Solid-Earth Geophysics Interior



教授 井田喜明 火山物理学, 地球内部物理学 IDA, Yoshiaki, Prof. Petrology of Volcano Geophysics, Volcanoes Physics of the Earth's

教授 中田節也 火山岩岩石学 NAKADA, Setsuya,



助教授 鍵山恒臣 火山物理学 KAGIYAMA. Tsuneomi, Assoc. Prof. Volcano Geophysics

海半球観測研究センター Ocean Hemisphere Research Center



教授 深尾良夫 地球内部構造論, 地震発生過程論 FUKAO, Yoshio, Prof. Physics of the Earth's Interior, Physics of Earthquake Source Process



教授 歌田久司 個体地球物理学, 地球電磁気学 UTADA, Hisashi, Prof. Solid Earth Geophysics, Geoelectro-Magnetism



教授 川勝 均 地球熱学, テクトニクス グローバル地震学, 火山地震学 KAWAKATSU, YAMANO, Makoto, Hitoshi, Assoc. Prof. Prof. Global Seismology, Volcano Seismology



助教授 森田裕一 地球内部構造, 地震火山計測学 MORITA, Yuichi, Assoc. Prof. Geothemics, Tectonics Seismology Seismometry



助教授 塩原 肇 海底地震学, SHIOBARA, Hajime, Assoc. Prof. Marine Seismology, Tectonics

5. ハイライト研究 Recent Research Highlights

5-1. 地震予知

5-1-1. プレート内部の地殻活動・構造不均質に関す る研究

内陸に発生する大地震の発生機構を解明する為に は、プレート間相互作用による応力が島弧地殻にど のように蓄積して地殻を変形させ、さらにその地殻 変形によって、どのようにして応力が特定の断層に 集中して破壊に至るのかを解明しなければならない、 地震研究所では、この一連のプロセスの中の最初の 段階、即ち"島弧地殻の変形過程"の解明のための 研究を推進している.

島弧地殻変形過程プロジェクトは種々の研究分野 にまたがる学際的なものであり,以下の項目につい て精力的な研究を行っている.

- (1)島弧の地殻構造及びその不均質性,地殻の物性 等を,主として地震学的手法を用いた探査・観 測から明らかにする.
- (2)対象領域の地震学的構造に関する知見と地質 学・岩石学的知見と総合させ,地殻の形成や改 編の様式,地殻内断層系の形状やその物理的特 性を明らかにする.
- (3)(1)及び(2)と平行して対象領域において高 密度地震観測を実施し,精度のよい震源分布を 求め,断層系や地質的構造線等の地殻内不均質 構造と地殻活動の対応関係を明らかにする.

1997-1998年には,東北日本弧の地殻構造とその 変形過程を解明する目的で,大規模な観測・実験が 行われた(図1).この探査では,屈折法,浅層反射 法,深部反射法,高密度臨時自然地震観測が密接な 連携のもとに実施された.屈折法地震探査は,日本 探査対象領域の大規模構造を明らかにする目的で, 海溝から東北日本弧を経て日本海に至る全長500km にわたる測線で行われた.深部反射法探査は,東北



図1.実験図.星印はショット点.黒線が人工地震探査測線.

Fig.1. Map of 1997-1998 experiments. Stars and solid lines indicate shot points and profile lines of seismic survey, respectively.

5-1. Researches for Earthquake Prediction

5-1-1. Research on the deformation process and heterogeneous structure of the island arc crust

The physical mechanism of the occurrence of intraearthquakes is controlled by a series of processes including stress accumulation by plate motion, stress concentration at fault zones, rupture nucleation and dynamic rupture propagation. ERI has been conducting a project of proposed "the deformation process of the island arc crust" in the earthquake prediction program.

The research of this project consists of the following three items covering broad fields in geology and geophysics.

- Determine heterogeneous structure of island arc crust and its physical properties with seismic expeditions
- (2) Elucidate processes of crustal evolution and development of major fault systems by synthesizing seismic crustal structure and other geological/ petrological implications
- (3) Examine detailed seismic activity in relation to major heterogeneous structure and fault system

In 1997-1998, an extensive seismic expedition was undertaken in Northern Honshu Arc (Fig.1). This expedition was composed of well organized experiments involving a seismic refraction/wide-angle reflection survey, a seismic reflection survey and a microearthquake observation by a dense seismic network. The profile line of the refraction/wide-angle reflection experiment was set about 500 km in length from the Japan Trench to the Sea of Japan to investigate large-scale structural variations in this island arc system. The seismic reflection line was undertaken in the backbone range in Northern Honshu to map the deep crustal inhomogeneities involving major

faults and crustal reflectors. The microearthquake observation was aimed at delineating precise seismic activities and their relation with the structural inhomogeneity.

The crustal section of Northern Honshu Arc from the refraction/wide-angle reflection experiment shows clear structural variations in EW direction (Fig. 2). The structure west of the backbone range has remarkable deformations by the Miocene back arc spreading. The upper crustal velocity is 5.8-5.9 km/s, clearly lower than in the eastern part of the profile (the Kitakami Mts.). The Moho is located at 27 km in the western edge of the profile, and 32-35km beneath the backbone range. This indicates the crustal thinning associated with the backarc 日本弧脊梁部の断層帯の精 密なイメージング及び地殻 深部までの反射帯構造の解 明を目指すものである.更 に,地殻最浅部での形状, 表層地質構造との対応関係 を調べる目的で,浅層反射 法地震探査も実施された. また,高密度自然地震探査 は,地殻の構造不均質と地 震活動の関係を明らかにし, 地殻の力学的特性,地殻内 の応力状態の解明を目的と している.





Fig.2. Crustal model from the seismic refraction experiment. Yellow circles indicate hypocenters determined from the dense seismic network.

屈折法で得られた東北日

本弧の地殻構造断面を図2に示した.東北日本弧の 構造は,東西方向に著しい変化を示す.即ち,脊梁 山地の西側は中新世の日本海生成時の伸張場により, 地殻浅部が著しく変形を受けている.またモホ面は, 日本海側で27km,脊梁山地下で32-35kmとなり, 日本海生成に伴う地殻薄化を示している.さらに, 上部地殻の速度は5.8-5.9km/sで,測線東部(北上山 地)のそれに比べて明らかに遅い.一方,北上山地 の構造は単純であり,また,地殻深部には多くの反 射体が存在している(反射的下部地殻).

脊梁山地で実施された反射法地震探査では,同地 域に発達している主要断層の形状が明らかになった (図3).即ち,脊梁山地の西側の千屋断層,東側の 上平断層に対応する反射面が明瞭である.これらの 断層は,深さとともにその傾きが緩やかになり,地 殻内反射面が発達している深さ12kmで,ほぼ水平 となる.このような形状は,地殻内のレオロジーを spreading. The structure in the Kitakami Mts. is rather simple, characterized by a number of reflectors within its middle/lower crust.

The seismic reflection experiment clearly imaged the geometry of major faults of Senya and Uwandaira developing under the backbone ranges. These faults show listric geometry, and become almost flat at a depth of 12 km beneath which a number of reflectors are situated. Probably, this reflects the difference in rheological properties within the crust.

5-1-2. Comparison between the rupture processes of the 1968 Tokachi-oki earthquake and the 1994 Sanriku-Haruka-oki earthquake

Using teleseismic data and strong motion data, we derived large slip areas (asperities) for the two large earthquakes: the 1968 Tokachi-oki earthquake and the



5-1-2. 地震発生の繰り返しの規則性と複雑性の解明 三陸はるか沖地震と十勝沖地震の震源過程 の比較

震源域が重なる2つの地震:1968年5月16日十勝 沖地震(M7.9)と1994年12月28日三陸はるか沖地 震(M7.5))について、遠地と近地の地震波解析に よりアスペリティ分布を調べた。その結果,十勝沖 地震では2つのアスペリティで断層すべりが起こっ たが,そのうちの1つが1994年三陸はるか沖地震で も大きくすべったこと,また,この領域のサイスミ ックカップリング率はほぼ100%であることがわか った(図4).

5-1-3. 横ずれ断層の変位量の測定

活断層から発生した過去の地震規模を知るために は,一度に活動した断層の長さとともに,地震時の ずれの量を検出する必要がある.ところが,従来の トレンチ掘削手法では地震発生時期の検出が優先さ れ,掘削規模を大きくせざるを得ず,変位量に関す る情報が破棄されていた.そこで,本研究では地層 抜取装置と考古学的掘削を組み合わせる手法を開発 した.これにより,小規模掘削にもかかわらず多く の地質情報を得ることができ,地層に記録された過 去の地震のずれの量を3次元的に検出することがで きる.この適用性を検討するために,この手法を丹 那断層で試行した(図5).調査では複数の断層が 多数の掘削平面・断面に露出した.断層の多くは, 丹那断層全体のトレンドに対して反時計回りに10。 ~40 の走向を示していた.断層を横切る複数のチ ャネル堆積物のずれから,1930年北伊豆地震とそれ に先行する地震一回分の横ずれ量をそれぞれ同じ 40 ± 10cmと見積もることができた.これにより, 丹那断層による最近2回の地震規模はほぼ同等であ った可能性が示唆される.

5-1-4.破壊に伴う電磁気シグナル発生のメカニズム の解明

地震前あるいは地震と同時に電磁場変動が観測されたという報告がかなりあるが,地震に関連した電 磁電磁気信号の発生メカニズムは充分には理解され ていない.破壊核成長過程のどの段階にどのような 電磁気信号がどのようなメカニズムにより発生する かを定量的にモデリングできれば,力学的データだ けからはわからない破壊核の成長に関する情報を電 磁気的データから得られるようになるだろう.また どのような観測を行えば検出できるかを示せるだろ う.地震研究所では,理化学研究所と共同で,電磁 気信号発生メカニズムを解明するための室内実験を 行っている.地殻中に大量に含まれている石英の圧



図4. 三陸はるか沖地震と十勝沖地震の震源過程の比較. Fig.4. Comparison between the rupture processes of the 1968 Tokachi-oki earthquake and the 1994 Sanriku-Harukaoki earthquake.

1994 Sanriku-Haruka-oki earthquake. It is shown that one of asperities of the Tokachi event coincides with that of the Sanriku event, and the seismic coupling there is nearly 100% (Fig.4).

5-1-3. Measurement on Coseismic Slip for Paleoearthquakes due to Strike-Slip Faulting

The key parameters to estimate the size of paleoearthquakes are rupture length and amount of displacement. However, typical Japanese-style trenching which consists of a deep trench with gently sloping walls is not suitable for reconstructing lateral offsets associated with earthquakes in the past. Thus, we have designed a new technique that combines three-dimensional trenching and soil sampling by Geoslicer. The new technique can restore 3D geological structure effectively without widespread destruction of the surface. We have applied this technique to the Tanna fault that ruptured during the M7.3 Kita-Izu earthquake of 1930(Fig.5). We then found that rightstepping en echelon faults, striking 10° to 40° CCW from the overall trend of the Tanna faults. From the evidence for offset buried channels, we could almost the same amounts of offsets 40 ± 10 cm caused by the most recent 1930 Kita-Izu earthquake and penultimate event in the sediments. Thus, we would estimate magnitude of the penultimate event by the Tanna fault is the same as the Kita-Izu shock.

5-1-4. Research on the generation mechanism of electric signals accompanied by fractures

An attempt to clarify the interaction between the

電効果,あるいは地殻内流体の移動による界面動電 効果(流動電位)が電磁気信号発生に寄与すると考 えられているが,ここでは地殻内流体に焦点をあて た研究を紹介する.岩石中の間隙水圧が高くなると 破壊核成長が促進され,また,破壊核の成長は震源 域の流動特性や間隙圧の変化を引き起こすので,地 殻内流体と破壊との相互作用を明らかにすることが 地震の準備過程を考えるうえで非常に重要である 破壊現象を流体移動および電磁気現象と関連づけて 実験的に調べるために,岩石試料部を周囲から電気 的に絶縁させた状態で,岩石中の間隙水圧をサーボ コントロールできる特別仕様の岩石破壊装置を開発 した.その実験装置を使い,岩石試料に流れ込む水 の流量,体積歪変化,岩石試料に発生する電流など を測定しながら,岩石を破壊させた実験結果を図6 に示す.応力が破壊強度に近づくと電流が流れ始め ているが,この電流はダイラタンシー,およびそれ により引き起こされた間隙水の流動と非常によい相 関を示しているのがわかる.このような実験により, 破壊前にダイラタンシーが急速に成長し,間隙水の 流動が起こって界面動電効果により電流が発生する ことが実証された.電磁気観測データから地殻中の 流体移動を定量的に推定できるようにするために, 岩石の流動電流係数などのパラメータが実際の震源 域の条件下でどのような値をとるのか実験により明 らかにしつつある.



図6.岩石破壊実験で得られた記録例.破壊前にダイラタ ンシーが急速に成長し,間隙水の流動が起こって界 面動電効果により電流が発生したことがわかる.

Fig.6. An example of experimental results. The electric current flowed before the main fracture, showing good correlation with the dilatancy rate and the water flow rate.



- 図5. 丹那断層での地層抜き取りサンプル(A)と3Dト レンチ掘削調査(B). 赤線は断層を示す.地層の抜き取りや大小多数の平 面・断面の観察から,三次元的に断層周辺の地質構 造を復元した.ミ型に雁行した断層形態や地震時の 横ずれ変位量が検出された.
- Fig.5. A sample extracted by Geoslicer (A), and three dimensional archaeological trench excavation (B) across the Tanna fault. A red line indicates a fault. As a result of the survey, we found evidence for the paleoearthquakes involving with right-stepping en echelon faults and lateral offsets of some layers.

mechanical failure of rock and other phenomena such as movement of fluids and generation electromagnetic fields would be one of the purpose of investigation of seismogenic process. Such an interaction may have a significant contribution not only to the fracture process but also to its preparatory process. At ERI, laboratory experiments have been performed to study the generation mechanism of electric signals in collaboration with RIKEN, with the focus on the effects of pore water movement during rupture nucleation process. We have developed a new apparatus specially designed for this kind of experiment. This apparatus has a number of advantages such as servocontrolling ability of the pore pressure, electrical insulation of rock sample from surroundings. Figure 6 shows an example of experimental results conducted by this apparatus. We can recognize that electric current starts to flow prior to the fracture. This electric current can be interpreted as caused by an electrokinetic effect due to the flow of pore water induced by pressure gradient associated with accelerating growth of dilatancy before fracture.

5-2.火山噴火予知

これまで火山噴火予知の研究では,噴火の前兆現 象をとらえることに多くの努力を払ってきた.その 結果,普段から観測を続けている火山では,多くの 場合噴火の前に異常を捉えることができるようにな ってきた.しかし,確実な噴火予知にはまだ程遠い のが現状である.その理由は,マグマそのものや火 山噴火のメカニズムがまだ完全には理解できていな いことにある.火山活動の仕組みについての理解を 深め,活動予測をもっと確実なものとするために, いくつかの新しい試みを行っている.

5-2-1.火山の構造とマグマ供給システムの研究

これまでに,霧島,雲仙,磐梯,阿蘇火山などを 対象に火山体構造探査が実施された.これらの調査 でマグマや熱水に対応すると思われる異常領域が捉 えられ,地震や火山性微動,熱消磁などの噴火の前 兆現象の発生との関係が注目されるようになってき た(6-8 火山体構造探査参照).また,地震波がマ グマ溜りやその近傍を通る際に波形が乱されること を利用して地下構造を調べる方法を開発し,伊豆大 島火山のカルデラの地下約5 kmおよび8~10 km 付近にマグマ溜りと解釈される領域を捉えることが できた(8-8 火山噴火予知研究推進センター参照).

5-2-2.火口近傍観測とカルデラボーリング

構造調査で捉えられる異常領域が噴火の前兆の発 生とどのように関係しているかを知るには,異常現 象を精確に観測することが不可欠である.より精確 なデータを安全に得るため,アルゴス衛星システム を利用して,火口周辺での噴気温度や地磁気の高密 度観測を開始している.三宅島火山では,2000年8 月29日の火砕流発生直後に南西山腹にプロトン磁力 計を設置した(図1).停電や火山ガスにより多くの



図1.三宅島火山でのアルゴス衛星システムを用いた全 磁力観測

Fig.1. ARGOS geomagnetic observation system at Miyakejima volcano.

5-2. Researches to Predict Volcano Eruptions

Intense, modern monitoring of volcanoes has brought advances in volcanology, allowing some precursors to be identified prior to eruptions. However, precise prediction of eruption still cannot be achieved scientifically. The following researches are being carried out to understand volcanic processes and magma supply systems under volcanoes.

5-2-1. Joint Experiment on Volcano Structure and Magma Supply System

Since 1994, joint experiments have been conducted in several volcanoes in Japan to reveal the structure and magma supply system by a group of scientists from national universities under the National Research Project for Prediction of Volcanic Eruptions. Anomalous zones were found beneath some volcanoes by electromagnetic surveys and seismic exploration experiments (see, 6-8 Joint experiment on volcano structure). At Izu-Oshima volcano, we could detect magma bodies at depths of 5 and 8-10km beneath the caldera with a new technique of seismic waveform tomography (see, 8-8 Volcano Research Center).

5-2-2. Observations with ARGOS System and Drilling Project in a Caldera

We have developed the telemetry system using ARGOS satellite to obtain safely precise data of geomagnetic field and fumarolic temperature variations from the area closest to active craters. We deployed the ARGOS geomagnetic observation system at the southwestern slope of Miyakejima volcano just after the eruption on August 29, 2000, to detect geomagnetic total force variations caused by temperature change beneath the summit crater (Fig.1) (see, 7-3 Miyakejima eruption). To detect small changes associated with the ascent of magma and volcanic gas, a 1km-deep hole was drilled within the summit caldera of Izu-Oshima volcano. Since 1999, we have started a 3Darray observation by installing seismometers, a hydrophone and an electrical conductivitytemperature meter in it (Fig.2). Borehole geophysical measurements and analysis of rock samples collected during drilling yielded a new insight into the structure and origin of the caldera and the eruption history of the volcano.



図2.伊豆大島火山カルデラ内総合観測井.

Fig.2. Scientific drilling within the caldera of Izu-Oshima volcano.

観測が中断する中,このシステムは順調に全磁力デ ータを送りつづけている(7-3 三宅島噴火参照).

伊豆大島火山のカルデラ内に掘削した深さ1 km のボーリング孔内に地震計,水中マイクロフォン, 水質計,温度計などを多点設置し,地表の観測点と あわせて3次元的な観測を1999年以来行っている (図2).これは世界でも初めての試みである.これ によって,噴火前後に火口直下で発生する地震や微 動の震源を精密に決定すると同時に,火道を上昇し てきたマグマや火山ガスがもたらすさまざまな現象 を解明することができる.また,掘削孔を用いた検 層や採取した岩石資料の地質岩石学的な分析によっ て,カルデラの構造と成因,噴火活動史とマグマ供 給のしくみについて新たな知見が得られた.

5-2-3. 噴火の中長期予測の研究

数十年おきに噴火する火山で,噴火と噴火の間に 地下で起こっている現象が解析されつつある.伊豆 大島火山では,1986年噴火以降も山頂カルデラおよ び北山腹を横断する測線の長さがすべてほぼ一定の 速度で伸びている(図3).これは地下でマグマの蓄 積が進んでいるために起こると解釈される.また, 2000年6月26日以来活動を開始した三宅島火山でも, 噴火前にマグマの蓄積に伴う山体膨張が起こってい ることがGPS観測によって捉えられた(7-3 三宅島 噴火参照).

噴火の古記録が残っている火山でも,これまでの 噴火と異なり,それを上回る規模で起こることがあ る.このような場合や,噴火の古記録が存在しない 火山においては,火山成長史を地質学的に解析する ことによって,噴火予測に役立てることができる. 火山毎に長期にわたる一定の溶岩噴出率があること を利用して,雲仙普賢岳では,5年近く続いた噴火 活動の溶岩の供給停止が判定された(図4).また, 火山の発達段階や噴火様式の違いで,噴出する溶岩 の組成に差が見い出されることもある.そのため, 本格的噴火に先立って放出されたマグマ物質の特徴 から,引き続く噴火の様式を予測する研究も行って いる.

5-2-3. Researches on Mid- to Long-term Predictions

In Izu-Oshima, which recently erupted every several tens of years, a continuous inflation of the volcanic body, indicating the steady storing of magma at a depth of 6 to 9km, has been detected by repeated EDM and GPS observations (Fig.3). We also detected a continuous inflation of Miyakejima volcano before the beginning of its activity on June 26, 2000 (see, 7-3 Miyakejima eruption). Even without any historic eruption records, a geological analysis of the volcano can sufficiently help us with long-term predictions of eruptions (Fig.4). As the modes of eruption may reflect magma compositions, analyzing products erupted in the earlier stage is also important to know the mode of successive eruptions.



- 図3.伊豆大島火山のカルデラおよび北山腹を横断する 測線の距離の変化.
- Fig.3. Distance changes of base lines across the caldera and northern slope after the 1986 eruption of Izu-Oshima volcano.



図4. 雲仙普賢岳における積算噴出量と噴出年令を示す 階段図.

Fig.4. Cumulative volume-time diagram for eruption products at Fugen-dake in Unzen volcano.

5-3.海半球ネットワーク計画

本計画は,西太平洋を中心とする太平洋半球(海 半球)に地震・地球電磁気・測地からなる地球物理 観測網を展開し,従来最大の観測空白域であった海 洋底から直接地球の中を覗き込もうとするものであ る.計画は平成8年度より科研費新プログラム「創 成的基礎研究」5ヵ年計画としてスタートした.こ の計画を全国共同で推進するにあたって拠点的役割 を果たすのが,平成9年度に発足した地震研究所海 半球観測研究センターである(部門・センター紹介 の「海半球観測研究センター」項参照).本来、こ の計画は平成12年度をもって終了する筈であったが, これまでの実績が評価され,海底観測点の設置が完 了する平成13年まで1年間の延長が認められた.以 下,これまでの成果の概要を報告する.

5-3-1. 観測網建設

海半球ネットワークは,地震観測網・地球電磁気 観測網・測地観測網からなる.現在までに陸域観測 点は当初予定通りないし当初予定を越えて建設が進 んでいる。海底観測点に関しては来年度中に予定し た観測点の建設が完了する予定である。センター紹 介の項に現在までにそれぞれどれだけ観測点が整備 されたかを表にまとめるとともに図示した.

5-3-2. 観測システム開発

OHP計画では観測網建設に必要なシステム開発 が重要な課題となっている.以下,開発したシス テムを列挙すると,a)海洋島標準地震観測シス テム,b)陸上広帯域地震機動観測システム,c)



図1.自己浮上型長期広帯域海底地震計(BBOBS)の外観. Fig.1. Self pop-up type long-term broadband ocean bottom seismometer (BBOBS).

5-3 . Ocean Hemisphere network Project (OHP)

The purpose of this project is to establish geophysical observation networks centered on the western Pacific for seismology, geo-electromagnetism, and geodesy, and to look directly into the Earth through the ocean bottoms where the density of geophysical observations had been sparse. OHP started as a five-year project in 1996. The Ocean Hemisphere Research Center, which was inaugurated as one of research centers in the Earthquake Research Institute in 1997, acts as the center to promote OHP as collaborative nationwide research activities. Originally, this project was scheduled to end in the year of FY 2000, but the program committe has approved to extend this project up to FY2001. We report what progress the project shows for 4 and half years.

5-3-1. Network Construction

The OHP network consists of seismic, electromagnetic, and geodetic networks. Up to the present, land stations have been established on schedule or even with the number exceeding the original plan. Ocean bottom stations will be completed in the next fiscal year.

5-3-2. Observational system development

The various types of system development required for constructing the observational networks are important



- 図2.BBOBS (星印)および海底孔内観測点(丸)の配置図.陸 上観測点は三角で示されている.
- Fig.2. Location map of BBOBSs (stars) and borehole stations (circles). Triangles indicate land stations.

海洋島標準地磁気観測システム,d)海底孔内地球 物理観測システム,e)機動的海底地震観測システ ム,f)海洋底電磁気観測所,g)海底地殻変動観 測システム,h)海底地殻熱流量観測システム,な どである.d)については後述の海底孔内計測実験 で紹介する.以下,その他について抜粋して開発状 況等を述べる.

海洋島標準観測システムについては,既に開発は 終了していたが,Y2K問題の対応や装置の改良のた めのヴァージョンアップを行った.

海外観測に適した高可搬性,高操作性,低消費電 力の特性を持つ陸上広帯域地震機動観測システムを 開発した.このシステム4台を1998年10月に中国に 設置した(後述,5-3-7).これは本計画におけるは じめての海外での臨時観測で,現在も継続されてい る.

海洋島標準地磁気観測システムを開発し,太平洋 地域の7ヵ所の観測点に設置して長期連続観測を行 なっている.これは,高感度かつ長期的に安定な地 磁気観測を行なうことを目的に開発したものである. 1998年から装置の長期的な安定性を確認するために, 1台の装置を用いて3年間の試験観測を実施した. その結果,地磁気3成分のドリフトは年間5nT以下 であり,当初の目標を充分達成していることがわかった.

海域で広帯域地震観測を多点展開するため,機動 的海底地震観測システムとして自己浮上型の長期広 帯域海底地震計(BBOBS)を開発し(図1),1999 年より図2に示す地点で観測を開始した.図3に示 すような記録が取れており,2001年には新規2箇所 での長期観測を開始する予定である.

海底堆積物中の間隙水の流動とその時間変動を捉 えること,及び水深の浅い海域で地殻熱流量を測定



図3. 北西太平洋(NWPAC1)と三陸沖(SRK1)に設置した BBOBSで得られた,1999年9月20日17:47:19(UTC)に 台湾で発生した集集地震(Ms7.6)の記録.SRK1は日本 標準時刻.

Fig.3. Seismic records of the earthquake occurred in Taiwan (1999/9/20 17:47:19, Ms7.6), obtained by two BBOBSs. issues. In the following we report the current status of system development, (a) standard seismic observational system for oceanic islands, (b) mobile broadband seismic observation system, (c) standard electromagnetic observation system for oceanic islands, (d) ocean bottom borehole geophysical observation system, (e) mobile ocean bottom seismic observation system, (f) ocean bottom electromagnetic observatory, (g) ocean bottom crustal movement observation system, and (h) ocean bottom heat flow monitoring system. The system, (d), is explained in the next section.

The standard seismic observation system for ocean islands was already completed four years ago, and were improved for solving the Y2K problems in this year.

We developed the mobile broadband seismic observation system. It has characteristics of high mobility, easy operation, and low power consumption, and is suitable for observation in foreign countries. We installed four systems in China on Oct. 1998 (the details are described in 5-3-7). It is our first project of the temporally installed seismic observation in a foreign country. This project is still continued, now.

We developed the standard electromagnetic observation system for oceanic islands and have been carrying out long-term continuous observations at seven sites in the Pacific area. System design aimed a high sensitivity and long-term stability. In order to examine its stability, long-term test was performed for three years since 1998 by using one of the instruments. Result indicated that baseline drift in each component does not exceed 5 nT/year, which is better than our expectation.

For the ocean bottom broadband seismic observation by several locations, a self pop-up type broadband ocean bottom seismometer (BBOBS) has been developed and deployed in 1999 (Fig. 1, 2 and 3). We have a plan to start new observations at 2 new locations during 2001.

Instruments for long-term monitoring of temperature profiles and pore-pressure gradients in seafloor sediments have been developed for purposes of detecting possible temporal variations of pore fluid flow and heat flow measurements in shallow sea areas. With the temperature monitoring instrument, we could obtain one-month record of good quality and are conducting measurements for a longer period. The pore-pressure instrument has been almost completed and will be deployed for a long-term monitoring test in 2001.

5-3-3. Ocean bottom geophysical observation

It is becoming clearer that emplacement of seismometers inside a borehole can provide low noise environments in the ocean. In addition, the strainmeter することを目的として,堆積物中の温度分布と間隙 水圧勾配を長期計測する装置の開発を進めてきた. 温度計測装置に関しては,既に試験観測で1か月間 の良質なデータが得られており,現在,半年~1年 の長期観測を行っている.間隙水圧については,海 底での計測・設置・回収の技術をほぼ確立できたた め,2001年には長期計測試験を実施する予定である.

5-3-3.海底孔内計測実験

近年,海洋底における広帯域長期地震観測におい て,海底掘削孔にセンサーを設置することが,もっ ともよい観測環境を与えることがわかってきた.ま た,歪や傾斜を計測するためには,岩盤にセンサー をしっかりと固定する必要があり,掘削孔への設置 が望まれる.これらの観点から,海半球ネットワー ク計画では,観測網の海底リファレンス観測点とし て,掘削孔内観測点を設置することを計画し,シス テムの開発,陸上におけるボーリング孔への設置実 験などの準備を進めてきた.これらの経緯を経て, 国際深海掘削計画(ODP)により,1999年度に三 陸沖に海底孔内地球物理観測点(JT-1,JT-2),2000 年度には北西太平洋海盆において海底孔内広帯域地 震観測点(WP-2)の設置に成功し,その後無人潜 水艇による観測システムの起動を行った.

三陸沖JT-1の観測システム概要を図1に示す.センサー群は孔底に設置され,セメントにより固定される.信号はケーブルによって海底に導かれ,海底



- 図5.JT-1における雑微動のスペクトル(Zが上下動,H1 とH2が水平動).HNMとLNMは,それぞれ陸上観 測点での雑微動が高い観測点と低い観測点におけ る代表的なノイズスペクトル.JT-1での雑微動は, 数秒の帯域ではHNMに近いが,数十秒よりも長い 帯域ではLNMに近く,良好な観測点であることを 示している.
- Fig.5. Seismic noise spectra from the borehole seismometers at JT-1. Z and H1,H2 denote the noise spectra estimated from the vertical component and the horizontal components respectively. HNM and LHN indicate typical noise spectra from the land observatories. The noise spectra at JT-1 show that JT-1 can provide good quality data.



図4.JT-1における孔内地球物理観測システム全体の配 置図.他の観測点のシステムもほぼ同様である.

Fig.4. Schematic of equipments used in the borehole installation at JT-1. Other stations have fundamentally the same configuration.

and tiltmeter, because of their principles of operation, need to be grouted inside boreholes ideally to behave completely the same as the surrounding rocks. Ocean Hemisphere Project (OHP) planned to install four ocean floor borehole geophysical observatories in three areas of the western Pacific. The main objective of installation of borehole stations is to obtain high quality data for a highresolution image beneath the western Pacific. Two borehole geophysical observatories (JT-1 and JT-2) on the landward slope of the Japan Trench were successfully installed in July and August 1999 during ODP Leg 186. In August 2000, the installation of a seismic observatory (WP-2) in the northwestern Pacific Basin was completed by ODP Leg 191. The observatories were activated by a ROV.

Fig. 4 shows the arrangement of the sensor and the seafloor packages for JT-1. Sensors were placed near the bottom of the hole and were grouted by cement. The signals from the sensors are sent to the sea floor packages by the cables. The seafloor packages consist of the recorder and the Sea Water Batteries. For JT-1 and JT-2, the sensors consist of a strainmeter, a tiltmeter, and two broadband seismometers. Two same seismometers are used at WP-2. The maintenance of the observatories is

にはシステムを動作させる電池とデータを記録する レコーダが置かれる.センサーは,JT-1,JT-2では 歪計,傾斜計,広帯域地震計2種であり,WP-2で は広帯域地震計2台である.観測点の保守を無人潜 水艇により行えるよう,海底におかれた各ユニット は水中脱着コネクタにより回収・再設置が可能であ る.現在までのところ,JT-1,JT-2およびWP-2共 に試験的な観測を行い,短時間ではあるが,孔内で の地震記録が得られている.図2にJT-1における雑 音スペクトルを示す.これらの結果から,海底孔内 は,地震観測を行うに十分な程度にノイズが小さい ことがわかった.2001年3~4月には,西フィリピ ン海盆に海底孔内広帯域地震観測点(WP-1)を設 置する予定であり,海半球計画による孔内観測網が 完成する.

5-3-4. 西太平洋域GPS観測

1995年頃からスタートした,西太平洋からアジア にかけての地域におけるGPS連続観測網の建設によ り,これまでに10点以上の新観測点を建設すると共 に,他機関・プロジェクトによる観測点とあわせ, 同地域に大きな観測網を建設することができた.連 続観測網はこの地域のテクトニックな変位速度場を 概括的に明らかにしたうえに,特にプレート境界域 のテクトニクスに関連した臨時GPS観測のための基 準点としても利用されつつある.

図6は地震研究所が中心となって実施した連続観 測網と臨時観測の成果を集大成したものである.太 平洋プレート,フィリピン海プレートの運動が精密 に求められているのをはじめ,これら海洋プレート の沈み込む領域での島弧の背弧拡大などが明らかに されつつある.また,フィリピン海からインドネシ アに至る島弧地域や北海道からシベリアにかけての 地域においても他大学との共同観測研究によりプレ ート境界地域の変位速度場が次第に明らかになりつ performed by a ROV. Because the seafloor packages are connected using the Under Water Mateable Connectors, each unit can be recovered by a ROV for the maintenance. From the preliminary data of JT-1 and WP-2, we found that boreholes at the sea floor provide quiet environments for seismic observation (Fig. 5). For completion of the network construction, installation of a seismic station in the western Philippine Basin is scheduled in April, 2001 during ODP Leg 195.

5-3-4. GPS observations in the western Pacific

Regional permanent GPS array has been established in the western Pacific and eastern Asia since around 1995 and was named as WING (Western Pacific Integrated Network of GPS). The newly established sites are more than ten until the end of 2000. Together with otherwise establushed sites, more than 40 GPS sites have been routinely analysed.

Fig. 6 shows a summary of thus estimated GPS velocity field in the area. The figure includes results from repeated survey conducted mainly by ERI group. Established GPS array has been able to delineate overall displacement rate field in the area as well as used as reference sites for local arrays of repeated surveys. Fig. 6 indicates rigid motions of Pacific and Philippine Sea plates that moves toward west. In addition, back-arc spreading and other plate boundary deformations along the converging plate boundaries in the western Pacific are readily visible. On the other hand, Chinese continent shows areal deformations due to collision of Indian continent toward north.

In order to further investigate tectonics and dynamics of the crust and the upper mantle in the area, the network is still planned to augment in the future. This network shall be used not only for solid earth physics but also used for meteorology, climatology, hydrology and ionospheric researches.



- 図6.西太平洋GPS観測網(WING)とユーラシア安定地塊 を基準とした変位速度ベクトル.黒矢印:連続観 測点における変位速度,白抜き矢印:繰り返し観 測による変位速度,黄色矢印:プレート運動モデ ルからの推定値.なお,設置してから日が浅い観 測点やデータが不足している観測点は除いた.
- Fig.6. Western Pacific Integrated Network of GPS (WING) and velocity vectors referred to stable Eurasia. Black arrows: velocities at permanent sites, White arrows: velocities by repeated surveys, Yellow arrows: estimated velocities from plate motion models. Sites of short history and those without sufficient data are not included.



- 図7.海半球データセンターで開発されたネットワーク データセンターのシステム.
- Fig.7. Networked data distribution system developed by OHP data management center.

つある.一方中国大陸では,インド大陸の衝突に伴う大規模な変形が次第に明らかになりつつある.

西太平洋からアジアにかけての地域は,地球上で もっとも複雑かつ興味深い変動が進行しており,よ り詳しいテクトニックな変形を明らかにして地殻・ 上部マントルのダイナミクスを解明するため,さら に観測点の建設を進めている.また,GPS観測が大 気や電離層の研究に重要であることを考慮し,関連 研究者グループとの共同研究も進めている.

5-3-5.データセンター

海半球データセンターでは,海半球ネットワーク で取得される分野横断的な地球物理観測データの公 開システムを構築し,データ公開を開始した.また, 以下のような活動を通じて,地震波形データ流通の さらなる促進に貢献した.

a)ネットワークデータセンターの構築

現在,日本の機関により様々な広帯域地震計ネットワークが展開されているが,それらのデータは様々なデータセンターから様々なデータフォーマット・ユーザーインターフェースで公開されている. この不便を解消するため,ネットワークを介した分散処理の技術を応用し,様々なネットワークを介した分散処理の技術を応用し,様々なネットワークのデータを単ーユーザーインターフェース・国際標準フォーマットで提供するデータ公開システムを開発した(図7).またこのシステムを通じて,海半球ネットワークデータだけでなく,様々な国内外の観測網のデータを取得できるようにした.開発したデータ取得用ソフトウェアをCD-ROMにし,世界中の研究者に配布した(図8).

b)国際広帯域地震観測網連合(FDSN)へのデー
夕報告

日本の広帯域地震観測網のデータを国際標準フォ ーマットに変換し,データ交換のための国際連合組

5-3-5. Data Center

Ocean Hemisphere Project Data Management Center (OHPDMC) constructed the data distribution system for interdisciplinary OHP network data and began to open them to the public. OHPDMC also contributed to the further promotion of seismic waveform data circulation via the following activities:

a) Construction of Network Data Center

Various broadband seismograph networks are being operated by Japanese institutes, but their data are distributed from various data centers in various data format with various user interfaces. To solve this inconvenience we developed networked data distribution system providing various networks data with a unified user interface in international standard data format (Fig. 7). We also set up the system so as to be able to integrate not only OHP network data but also various international and domestic networks data. We made CD-ROM (Fig. 8) of this integration software and distributed it to researchers in the world.

 b) Data Report to Federation of Digital Broadband Seismograph Networks (FDSN)

We converted Japanese broadband seismic networks data to the international standard format, and reported them to the international union for data exchange (FDSN) as a representative of Japan.

5-3-6. Data analysis

The first objective of OHP is to complete the Ocean Hemisphere networks. Besides, the major science target is to extract new information related to the Earth's interior by analyses of data from being constructed and existing networks. Outcome of such researches includes: (a) development of a new efficient data analysis method, (b) study of electrical conductivity structure of the mantle



- 図8.ネットワークデータシステムを通じてデータ取得 するソフトウェアのCD-ROM.
- Fig.8. CD-ROM of the software integrating data via the networked data distribution system.

織(FDSN)に日本を代表してデータ報告をした.

5-3-6.データ解析

海半球計画の第1の目的は海半球ネットワークを 完成させることにあるが,建設途中で得られるデー タあるいは既設の観測網から得られるデータを解析 して,地球内部に関する新しい情報を引き出すこと も大きな目的となっている.以下,成果を列挙する と,(a)高精度・高速理論波形計算法の地球内部 構造推定への応用,(b)中国東北部のマントル電 気伝導度構造の解明,(c) 西太平洋域のプレート 運動の解明,(d)西太平洋域のマントル遷移層の 微細構造解明,(e)常時地球自由振動現象の発見 (5-5を参照),(f)マントル・トモグラフィ解像度 の向上など.

例えば(b)では,電話回線を利用した地電位差 の時間変動観測を,中国東北部において行っている (図9上).得られたデータを解析してマントルの電 気伝導度構造を調べた.異なる2つの手法で解析し た結果,600kmから800km付近で電気伝導度が急増 する構造が明らかになりつつある(図9下).(d) では,日本列島に展開されている高密度の広帯域地 震計観測網のデータ解析から,地震学的に決定する のが困難とされているマントル遷移層密度パラメタ 一のその場観察(日本弧下の)に世界に先がけて成 功した.その結果標準密度モデルに較べて有意に小 さな密度不連続が観測された(図10).(f)では, P波のデータに加え新たにPP波の走時を読みとるこ とで,上部マントルのトモグラフィー解像度の格段 の向上に成功した(図11).その結果ハワイの直下 に上部マントルに局在した低速度領域があることが 判明した.

5-3-7. 中国大陸-フィリピン海 地震電磁気機動観測

海半球計画の一環として,西太平洋から中国大陸 に至る,いわゆるマントル下降流地域の構造を詳し く調べる目的で,図12に示すような中国大陸からフ



図10.マントル遷移層不連続面での密度・S波速度不連続 . Fig.10. Density and S-wave velocity jumps at the mantle transition zone discontinuities.



- 図9.(上)中国東北部の地電位差観測点.(下)S05で推 定された電気伝導度構造.滑らかに変化するよう に推定されたモデルと電気伝導度が急変する深さ を推定するモデル.
- Fig.9. (Top) Electric observation sites in NE China. (Bottom) The inferred 1-D electrical conductivity models beneath S05. Two different models are shown; one with smoothness constraints and the other expressed by delta functions of conductance.

beneath NE China, (c) elucidation of plate motions in the western pacific region, (d) detailed study of the mantle transition zone in the western Pacific region, (e) discovery of the Earth's background free oscillations (cf. 5-5), (f) improvement of the resolution of seismic tomography.

For example, in (b), observation of long-baseline

telluric field variations is carried out by using telephone lines in northeastern China (Fig. 9). Data obtained from this experiment were analyzed to study electrical conductivity structure of the mantle beneath this area. Two different methods were applied and both indicated a similar model with a sudden conductivity increase at the depth of 600-800 km (Fig. 9). In (d), by analyzing data from the high density broadband seismic networks in Japan, first in situ seismological estimation of the density jump across the transition Tomography beneath Hawaii



- 図11.太平洋ハワイ島下のマントル地震波速度構造. (上)P波走時による今までのモデル.(中)PP波走 時データを加えた新しいモデル.(下)上のモデル は,この図の赤線の下のマントル構造.
- Fig.11. Seismic velocity structure beneath Hawaii. (top) old model with direct P wave data only. (middle) new model with P+PP wave data. (bottom) cross sections above are along the red line in this map.

ィリピン海を横断する測線による地震電磁気海陸機 動観測を実施した.

海底観測は1999年11月(設置)から2000年7月 (回収)までの約8ヵ月間にわたって行なった.海 底地震観測では15台の長期海底地震計(LTOBS) を約100海里間隔で展開した.LTOBSは低消費電力 な稍広帯域のセンサーであるPMD社製の WB2023LPと,直径50cmのチタン球耐圧容器を採 用することで長期観測を可能としたものである. PDEカタログから選んだ震央距離70度以内・Mb5.5 以上の地震は充分なS/Nで記録されていることを確 認した.伊豆マリアナやフィジーの深発地震,一部 のアラスカでの地震などの注目すべきイベントも捉 えられていることがわかった.

海底電磁気観測は,海底地震観測と同じ測線に6

zone discontinuities, which is known to be very difficult, is performed beneath Japanese islands, and density jumps significantly smaller than the reference earth models are obtained (Fig. 10). In (f), PP wave travel time data are newly obtained from broadband waveforms to improve existing P wave tomography model, especially in the upper mantle. The new model, for example, shows a slow velocity region beneath Hawaii, which appears localized in the upper mantle (Fig. 11).

5-3-7. Seismic and electromagnetic array observation along the Philippine Sea-China profile

As a part of the Ocean Hemisphere network Project, we performed long term seismic and electromagnetic (EM) array observation along the Philippine Sea-China profile (Fig. 12) to reveal more detailed image of inhomogeneous mantle structure of so-called the zone of down-going mantle flow.

Ocean bottom seismic observation was carried out for eight months from Nov. 1999 until July 2000 by using 15 semi-broad band ocean bottom seismometers (LTOBS) along a profile of about 2800 km length. The LTOBS contains a semi broad-band sensor (WB2023LP, PMD) in a pressure case made of titanium sphere (D=50cm), which enables us long-term observations up to one year. The data quality was preliminarily examined using PDE catalog. Events with Mb 5.5 or larger within epicentral distances of 70 degrees are well recorded with adequately high S/N. We found that several deep events in Japan, Izu-Mariana and Fiji and some events in Alaska are well recorded.

Along the same profile and during the same period, ocean bottom EM observation was also carried by using 6 ocean bottom electro-magnetometers (OBEM). Each OBEM measures variations of three components of the geomagnetic field and two components of the electric field every minute. All the instruments were safely recovered, and good records were obtained.

On-land broad-band seismic observation was started at four stations in China by a collaboration with the Analysis and Prediction Center, China Seismological Bureau. The observation was originally planned to have 16 sites, which had to be reduced due to several difficulties. However, this will not cause serious problem because data from the network in China (CDSN) became available.

In Jilin Province of northeast China, we have performed observation of electric field variations by using telephone lines (Network-MT) by collaborating with Institute of Geology, China Seismological Bureau. The observation area is known to its recent active volcanism, 台の海底電磁力計(OBEM)を設置して実施した. OBEMは3成分の地磁気と2成分の電位差変化を1 分毎測定する.すべての装置が回収され,ほぼ全観 測期間にわたって良好な電磁場変動の記録が得られた.

海底地震計の設置と時期を合わせて,中国地震局 分析預報中心と共同で中国において臨時広帯域地震 観測を4観測点で開始した.当初,海底地震観測点 の間隔と同程度の間隔で16台の地震計を設置する予 定であったが,諸般の事情により観測計画を縮小せ ざるを得なかった.しかし研究者に公開されている 中国国内の観測網(CDSN)のデータを併せて利用 することにより,観測計画の縮小をある程度カバー できると考える.

中国東北地方の吉林省では,日本国内で実行中の ネットワークMT観測と同様の電話回線を用いた地 電位差変化観測を,中国地震局地質研究所との共同 で行なった.この地域は,大陸性の活発な火山活動 があり,その地下構造との関連も注目される.この 観測は,対象を周辺地域に広げて継続する.

今後は観測データの解析をすすめ,最終的には地 震学及び電磁気学的モデルの融合を図り,より確か らしい西太平洋領域のマントル構造モデルを構築す る予定である。 and its relation to deep structure is one of the most interesting targets. This project will be continued for the coming several years to extend the study area.

Our new data set from seismic and EM observations will provide unique opportunity to investigate the upper mantle structure in the western Pacific region in more details.



図12.フィリピン海の海底観測点と中国における地震観測点の配置.

Fig.12. Locations of ocean bottom sites in the Philippine Sea and on-land seismic sites in China.

5-4.準リアルタイム海底観測システム

日本周辺の海域で発生する地震の場を研究するた め,機動性の高い自己浮上型海底地震計による臨時 観測及び海底ケーブル式海底地震計による定常観測 をこれまでに開発し推進してきた.しかし,大地震 の余震活動や突発した群発地震の推移を海域で正確 に知るためには,臨時の設置が可能でかつリアルタ イムな観測データの入手が必要である.その点で上 記の二方式では片方の条件を満たせない.この隙間 を埋めるべく,地震地殻変動観測センターでは水中 音響通信と人工衛星テレメータの技術を組み合わせ た準リアルタイムな海底地震地殻変動観測システム の開発を1996年より開始し,1998年12月に実地試験 を行った後,試験運用を2000年8~9月に新島・神津 島近海の群発地震観測で実施した.

本観測システムの構成(図1)は,1)海底で連 続して地震観測を行い収録する海底部,2)海底部 と水中音響通信し陸上との衛星通信を行う係留ブイ 部,3)これらの制御と観測記録の受信を行う陸上 部,からなっている.海底部では,広帯域高精度3 成分加速度計と圧力計の計測値が容量16GBのハー ドディスクに連続(100Hz,24bit)で記録される. 時刻は高精度の水晶発振器と係留ブイ部のGPSによ る時間差測定により,必要充分な精度が確保される. 海底部と係留ブイ部の間では電波が使えないため, 水中音響通信による高速データ伝送(~13200bps) を行う.係留ブイ部には陸上部と衛星通信するため の船舶用NTT衛星電話装置及び時刻とブイの位置 を知るためのGPS等を装備している.海上のブイは 動揺が大きいため,信号追尾型アンテナを静止衛星 の方向へ保持する専用の2軸ジンバル機構も組み込 まれている.海底部・係留ブイ部ともに電源は大容 量のリチウム電池で賄われる.陸上部との衛星デー

5-4. Semi Realtime Ocean Bottom Observation System

For the research of off shore "stages" where many earthquakes have occurred around Japan, we have developed pop-up ocean bottom seismometers (OBS) with high mobility for temporal dense observations and ocean bottom cable systems for stationary geophysical observations. But, it is necessary to have an observation system with mobility and realtime data acquisition for precise research of transitions of aftershock or earthquake swarm activities. In these points, two observation systems mentioned above are not adequate. For this reason, the Earthquake Observation Center has started a development of the semi realtime ocean bottom seismic and geodetic observation system by using technology of an underwater acoustic communication and a satellite telemetry from 1996. After the field test which was performed in 1998, this system was deployed for the swarm observation off Niijima-Kozu islands in the summer of 2000.

The construction of this system (Fig. 1) contains, 1) the ocean bottom unit (OBU) that acquires and records seismic signals, 2) the moored buoy unit (MBU) that performs underwater acoustic communication with the OBU and the satellite telemetry, and 3) the land control unit (LCU) that receives the acquired data and controls the OBU and the MBU. Measured values from the broadband precision 3-component accelerometer and the pressure gauge of the OBU are continuously stored in hard disks (16GB) with a high resolution digitizing (100Hz, 24bit). The time accuracy of the OBU is kept as



図1.システム構成図. Fig. 1. The system construction.



図2.新島沖に設置された本システム. Fig.2. The MBU of this system deployed off Niijima island.

タ通信は最高4800bpsの伝送速度がある.陸上部で は、地震記録の受信だけでなく海底部・係留ブイ部 のほぼ全ての設定を制御可能である.受信した地震 記録は陸上観測ネットワークと併合し直ちに解析さ れる.地震記録の信号はデータ量が多く、本システ ムの通信速度では完全なリアルタイム観測を行うこ とは電源容量の点からも困難である.そのため、通 常は陸上部から指示した時間窓のデータのみを海底 部にある連続記録から抜き出して受け取る仕組みと なっている.

試験観測は1998年12月に駿河湾北東部の江梨沖 (水深100m)で実施した.この際は,陸上部の代わり に作業船上の衛星電話装置を利用し,係留ブイ部と の通信を行った.本試験では,海中雑音の測定・音 響通信出力の調整によって水中音響通信の能力を確 認した.その結果,本システムは水深4000mまで実 用的な信号対雑音比を確保可能であることが分かっ た.

2000年6月末に始まった三宅島噴火活動では,地 震活動が新島・神津島近海へと海域に広がったため, 多数の自己浮上型海底地震計による短期間繰り返し 観測を実施したが,群発地震活動の推移をリアルタ イムに把握するために本システムを8月に水深300m の地点に設置した(図2).島にある陸上観測点だ けでは海域の震源域での震源の深さが正確に得られ なかったが,この1観測点の地震記録が加わること で震源が浅く分布していることを準リアルタイムに 把握できた(図3).この観測により,本システム の有用性を明確に示すことが出来た.



better than 10ms by the combination of the DTCXO and the time difference measurement between the GPS on the MBU and the OBU Clock. As it is impossible to use electric waves in the deep sea, the high-speed underwater acoustic communication system (~13200bps) is used between the OBU and the MBU. The NTT satellite phone system (N-STAR) and the GPS for location and time are equipped on the MBU, which also has a two axes gimbal mechanism for the tracking antenna of the satellite phone due to large sway of the buoy. Both the OBU and the MBU have large capacity lithium cells for the power source. The speed of satellite data communication is 4800bps (maximum). The LCU can control almost all parameters of the OBU and the MBU. The received data is analyzed with the land seismic network data immediately. It is still impossible to perform a true realtime (continuous) ocean bottom observation, because of the limited speed of the communication and the capacity of the power source. So that only the data of preset time windows is received in usual operations.

The field test was performed at the northeast part of the Suruga Bay in December of 1998. In this test, a satellite phone on the ship was used instead of the LCU, and the ability of the underwater acoustic communication system was examined by measuring of the noise level and variation of the output acoustic power. As the result, this system is operative up to the depth of 4000m with enough signal to noise ratio.

Short term and repeated observations by using many pop-up OBSs were performed during the swarm off Niijima-Kozu islands after the eruption of the Miyake island since June of 2000. This system was deployed in the center of this area to detect changes of the swarm activity in August (Fig. 2). True, shallow distribution of epicenters were revealed in semi realtime, those were uncertain only by the data of observatories on near islands (Fig. 3). Usefulness of this system is clearly indicated by this observation.

- 図3.本システムにより改良された震源分布と観測点配 置図(右下).観測点は陸上が三角,本システムが 星印.震源は丸(殆ど初期値の深さ)から三角の 位置へ改良された.
- Fig.3. Improved epicenter distribution and map of observatories (lower right). Locations are indicated as triangles (land) and a star (this system). Epicenters are changed from circles (almost initial depths) to triangles.

5-5.地球と大気の共鳴振動

地震活動が静穏な期間においても,数100秒の周 期帯で地球は揺れ続けている事が分かってきた. 我々はこの現象を常時自由振動と呼んでいる.観測 された振動は伸び縮み基本モードに対応する.励起 振幅はngal程度の大きさであり,数多くの小さな地 震ではその大きさの説明がつかない.励起の統計的 特徴から大気擾乱が有力な励起源であると考えられ ている.我々はこの現象をより詳しく調べ,(1) 大気音波と固体地球の共鳴を発見すると共に(2) 励起振幅の年変動を検出した.

1991年ピナツボ火山の噴火時に,共鳴周波数に対応する卓越周期周期225s,270sの振動が観測された. このように大気中の現象が大気自由振動を励起すると,大気音波と固体地球の共鳴が起こると予測される(図1).常時自由振動の励起振幅も詳しく解析してみると,共鳴周波における振幅が10~20%他のモードより大きい事がわかった(図2).励起源が地表付近の大気に存在すると,この超過振幅の大きさを説明できる.

Kobayashi and Nishida [1998]の大気励起理論 に基づくと励起振幅は7月をピークに5%程度年変 動するはずである.実際に励起振幅を詳しく解析す ると(図2),10%程度年変動が観測された.位相 振幅ともに理論と調和的である.

常時自由振動現象の存在と今回の共鳴現象・年変 動の発見は大気と固体地球とを1つの系として捉え る事の重要性を物語る.

参考文献

- [1] Kanamori, H. and J.Mori, Geophys. Res. Lett., 19, 721, 1992.
- [2] Kobayashi, N. and K. Nishida, Nature, 395, 357-360, 1998.
- [3] Nishida, K. and N. Kobayashi, J. Geophys. Res., 104, 28741, 1999.
- [4] Nishida, N., Kobayashi and Y. Fukao, Science, 287, 2244-2246, 2000.



図1.大気音波と固体地球の共鳴の概念図. Figure 1. Schematic figure showing our idea of the excitation mechanism of acoustic coupling.

5-5. Resonant oscillations between the earth and the atmosphere

Earth's background free oscillations have now been firmly established. They comprise the fundamental spheroidal modes with amplitudes on the order of 0.5 ngal. The cumulative effects of many small earthquakes are too small to explain the modal amplitudes. The statistical examination of the excited normal modes suggests that atmospheric disturbance may be an excitation source. Here we report (1) evidence of the annual variation of this phenomenon and (2) evidence of acoustic resonance of these seismic free oscillations.

Preferential excitation of the seismic modes that can couple atmospheric acoustic modes has been reported. For example, Rayleigh waves with particular periods of about 225 and 270 s were observed to be associated with the volcanic eruption of Mount Pinatubo. Thus, some excess excitations at these frequencies are expected if atmospheric phenomena excite the oscillations (Figure 1). From the analysis of seismic records we found the evidence for greater amplitudes of the two acoustic coupled modes than the other modes (Figure 2). The resonant amplitudes suggest that the excitation source is at or just above the Earth's surface.

A dimensional analysis by Kobayashi and Nishida [1998] indicates that atmospheric disturbance can generate Earth's free oscillations at a ngal-level with a possible annual variation of intensities on the order of 10% (Figure 2).

The phenomenon can be understood only if the two systems of the solid Earth and atmosphere are viewed as a coupled system.





5-6.火山での広帯域地震観測

火山での地震観測といえばつい最近までは,1秒 より短い周期しか計ることのできない短周期地震計 によって行われるのが常であった.このような地震 計による観測と,傾斜計・伸縮計などによる測地学 的な(地殻変動)観測の間には,観測周波数帯域に 大きな空白があり,1秒から数百秒の周波数帯域に おける火山の変動は今までほとんど観測されてこな かった.我々は1991年から他の研究機関(地質調査 所,気象研究所,東京工業大学,京都大学)と共同 で活動的火山(桜島,阿蘇山)における広帯域地震 観測を行ってきた.このような観測により,火山に おける広帯域地震観測の重要性が近年認識されるよ うになってきた.

図1は阿蘇火山が1994年に水蒸気爆発を起こした 時に広帯域地震計によって観測された地震波形であ る.この図で,上向き(正)の変位は地面が膨らん でいることに対応するので,それを考慮してこの地 震波形を見ると,水蒸気爆発(現地では土砂噴出と 呼ぶ)とは以下のような現象であることが読みとれ る:火口から土砂が吹き上げる 50秒ほど前から, 周期20秒ほどのパルス的な変動をしながら全体とし てはゆっくりと地面が膨らみ始める;地下での圧力 を支えきれなくなると,火口から土砂の噴出が起こ り,地面はゆっくりとしぼんでいく;土砂が吹き出 す過程に対応して短周期の地震波がでるが,これは, 火道を土砂や水蒸気が激しい早さで通るときに出る 地震波である;短周期の地震波放出,すなわち土砂 の噴出が終わると,地面の膨らみは元に戻って,土



initiation defiation

- 図1.土砂噴出の広帯域地地震波形.火口から1.4km離 れた観測点の上下動の記録.(上)原記録(速度 波形)(中)長周期のバンドパス・フィルターを 掛けたもの(下)積分した変位記録.
- Fig.1. Broadband seismograms (vertical component) of a phreatic eruption observed at a station 1.4km away from the active crater. (top) raw velocity seismogram; (middle) velocity seismogram bandpass filtered between 10s and 30s; (bottom) displacement obtained by integrating the top record. The vertical broken line indicates the time of the eruption.

5-6. Broadband Seismometry at Active Volcanoes

Seismic wavefields observed near active volcanoes contain plenty of information about volcanic activities in the frequency range between 0.01 Hz and 1.0 Hz, where, until recently, conventional geophysical monitoring of volcanoes had not paid much attention except for a few rare cases. The physics operating in a volcano is extremely complex; in different frequency bands, different physical processes dominate the wavefield, which makes broadband seismic observations essential to unravel the physical processes of volcanic activity using seismic data.

Since 1991, we have been conducting a series of observations in two active volcanoes in Japan: Sakurajima and Aso. A series of deployments of broadband instruments in Sakurajima not only convinced us of the importance of broadband seismic observations at volcanoes, but also led us to another volcano by observing strange long period 10s wave trains apparently generated near the Aso volcano located 150km away



- 図2.(上)阿蘇山の長周期微動.(中)阿蘇山中岳周辺 の鳥瞰図と求められた亀裂構造.(下)長周期微 動の振幅分布(青:観測,赤:理論).
- Fig.2. (top) A typical long period tremor (in velocity); (middle) the inferred crack-like conduit; (bottom) the observed and the model-predicted amplitudes of LPT are respectively represented as red and blue circles whose radii are proportional to LPT amplitudes.

砂噴出の一過程が終了する.このように広帯域地震 計により水蒸気爆発の全貌が明らかになった.

さらに,静穏期の観測から,15秒を基本周期にし て,7.5秒,5秒,3秒と倍音関係にある固有周期の微 弱な揺れ(長周期微動,図2)があることがわかって いる.長周期微動を詳細に調べることで震動源の正 体が分かり,火口直下の南北に延びたクラック状の ものとなる.この走向は,地表の火口列の方向と一 致する.すなわち南北に連なる火口列は地下にある 亀裂構造がもたらしたものなのである(図2).またこ の亀裂構造が,水蒸気爆発直前の膨らみを起こして いる.このように広帯域地震計による観測で,地表 の噴火活動を規定する火口直下の構造が明らかにな った.さらに,爆発前の地下の膨らみを捉えること で,爆発の直前予測も出来る可能性がひらけてきた.

有珠2000:

有珠山は2000年3月31日に約20年ぶりに噴火を起 こした(7-2を参照). 地震観測体制の整っていない 有珠山では, 阿蘇の場合のような質の良いデータを 得ることは出来なかったが,噴火の直前10分前(!) に広帯域地震計を1台,昭和新山のふもとに設置す ることが出来た(北大理学部との共同研究).図3 はその地震計によって観測された,噴火10分前から 一月間のスペクトルをまとめたものである. 矢印で 示した部分に,周期10-12秒の震動の存在が確認で きる.噴火直後に10秒ほどであったものが徐々に周 期を12秒に伸ばしつつ震幅を大きくし,一週間程大 きな震動を起こしている.この長周期微動源の位置 は西山の南南東約1-1.5kmに決まる.この微動源の 位置は,GPS観測などから求められる地下の圧力源 の位置とほぼ一致している.また深さについては, 不確定性が大きいものの,これまで観測されている 他の火山の長周期微動源の深さ(~2km)より深く, 火山直下のマグマの運動に関係した長周期微動とも 考えられる.

このように阿蘇山で初めに発見された周期約10秒 の長周期微動は多くの活動的火山で観測され(三宅 2000の成果については7-3を参照),火山活動につい て様々な新しい情報・知見を与えることが広帯域地 震観測により明らかになりつつある.日本中の活火 山に広帯域地震計を設置し,モニターすることが望 ましい.



from Sakurajima. Deployment of a dense network of broadband seismometers in Aso revealed a hydrothermal reservoir 1 to 1.5 kilometers beneath the crater that is continually resonating with periods as long as 15s, even when there is no apparent surface activity at the crater. When phreatic eruptions are observed, broadband seismograms elucidate vividly the whole eruption process: gradual pressurization and long-period (about 20s) pulsations of the reservoir during the 100-200s before the initiation of the discharge, followed by gradual deflation of the reservoir concurrent with the discharging flow. The observed spatial variation of the signal amplitudes reveals that the source of 15s long period tremors (LPTs) consists of an isotropic expansion (contraction) and an inflation (deflation) of an inclined tensile crack with a strike almost parallel to the chain of craters. The extension of the buried crack plane meets the crater chain, including the active fumarole at the surface, suggesting that the crack has played an important role in transporting steam (gasses) and/or lava to the craters from below. This work also demonstrates a powerful usage of broadband seismometers as geodetic instruments to constrain subsurface structures at active volcanoes.

Our results so far demonstrate the high potential for broadband seismic observation near active volcanoes to add essential information which has been missed by conventional seismometry. There is now much evidence from volcanoes of the world indicating the presence of long-period volcanic signals. We feel that volcanology should embrace state-of-the-art developments, and broadband seismometers as well as other instruments, such as infra-sonic microphones, should be installed as standard equipment for monitoring volcanic activities.

USU2000:

Mt. Usu erupted at ~13:10 (JST) on March 31, 2000 after twenty-some years of quiescence (cf. 7-2). We (with a team from Hokkaido Univ.) were able to install a broadband seismometer just 10 minutes (!) before the eruption ~3.5km from the eruption site. Broadband seismograms of this eruption (magma-phreatic) indicate that no precursorly slow deformation, which was observed in Aso, exists for this eruption. On the other hand, we were able to observe 12sec long period tremors apparently emitted from the observed pressure source region at about 4km depth (Fig. 3).

Long period tremors first observed in Aso appear to be a common feature of many active volcanoes, which proves importance of broadband seismometry at active volcanoes (see also 7-3 for the Miyake eruption).

図3.有珠2000噴火のスペクトログラム.噴火直後から一 月分.

Fig.3. One-month spectrogram of the broadband records of the Usu2000 eruption.

5-7. 地震動の伝わり方

地震動(地震による地面の揺れ)は震源で発生し て地下構造を伝わってくるので,地下構造が複雑な らば地震動も複雑な伝わり方をする.大規模な堆積 平野である関東平野は,その西側で硬い基盤が露頭 していて,そこから東京湾に向って厚い堆積層が分 布する複雑な地下構造になっている.

地震研究所を含む各機関により,この平野とその 周辺には600台を越える強震計が近年整備されてき た(図1).1998年5月に伊豆半島沖の深さ3kmで 発生したM5.7の地震は,そのうちの384台で観測さ れている.このような浅い地震では,ラブ波と呼ば れる長周期の表面波がしばしば発達し,関東平野で も周期8秒程度のものが明瞭に見られる.384台とい う非常に多数の観測によって,これらラブ波に伴う 地震動の伝播を可視化することが可能となった.

この波を強調するために,まず観測機器で記録された加速度記録を速度波形に変換し,周期5秒までのローパスフィルタを適用した(図2A).次に地震の発生から10秒ごとに,水平面内の地震動の軌跡を地図の上にプロットした(図2A~D).ラブ波はその波面に平行な(波線に垂直な)地震動を発生させるので,各観測点における地震動の軌跡から,そこでの波面や波線を特定できる.なお,西側では地盤による増幅がなく振幅が小さくなってしまうので,すべての軌跡は記録時間全体での最大振幅で正規化されて描かれている.

波面がここであるという判断は,地震動の振幅と 軌跡の急激な変化を見て行った(図2中の弧).図 2をA B C Dと見れば,山地を通る西側の波面 は秒速3.5から4kmで伝わっているのに対して,平 野の中心部ではわずか1km/s程度の速度で伝播し ているに過ぎない.この速度の違いが波面の不連続 となり,この不連続を埋めるような形で,西側から



5-7. Propagation of Seismic Ground Motion

Since seismic ground motion propagates from an earthquake through subsurface structures, its propagation should be complex in a complex subsurface structure. The large-scale Kanto basin has such complex structures that firm basement is exposed in the west and thick sediments are distributed to the Tokyo bay.

Several institutions including ERI have installed more than 600 strong motion instruments in the basin and its surroundings, recently (Fig. 1). An M5.7 earthquake at a depth of 3km off the Izu peninsula was observed by 384 out of them in May, 1998. Such a shallow earthquake often generates long-period surface Love waves, and these waves are seen in the Kanto basin with periods of about 8s. The 384 observations enabled us to visualize the propagation of the ground motion associated with these Love waves.

To emphasize these waves we first converted the records to velocity seismograms and applied a low-pass filter with a period of 5s (Fig. 2A). Then we plotted the trajectories of ground motion in the horizontal plane for 10s intervals after the earthqauke on a map (Fig. 2A-D). The Love wave generates ground motion parallel to its wavefront (perpendicular to its ray), and so the trajectories can help us identify the wavefront and ray. We normalized each trajectory to the maximum amplitude for the recording duration, to make small ground motions in the west visible.

We identified wavefronts by noting abrupt changes in the amplitude and trajectory. The wavefront to the west travels with a speed of 3.5 - 4 km/s, while that in the center of the basin propagates as slow as 1.0 km/s (Fig. 2 A B C D). The difference between the speeds causes a discontinuity between the wavefronts, and a part of the Love wave in the west is refracted into the basin in order to heal the wavefront discontinuity (Fig. 2B-C). The process is analogous to the generation of a head wave at an interface. The refracted surface wave is dominant around the basin edge and appears to propagate from there rather than from the epicenter.

Numerical simulations and localized array analyses suggest the presence of such surface waves which do not come directly from the epicenter, but here it is verified by actual records for the first time. The physical

- 図 1 . 関東平野の地形と強震観測点約600点の分布 (Koketsu and Kikuchi, Copyright 2000 by Science).
- Fig.1. Topography of the Kanto basin and the distribution of about 600 strong motion stations (Koketsu and Kikuchi, Copyright 2000 by Science).

盆地に向って屈折するラブ波が発生する.これは地 下構造の境界面で屈折波(ヘッドウェーブ)が発生 するのと類似の現象である.この屈折ラブ波は盆地 の端とその付近で地震動の主要な部分を占めており, この波は地震の震央からではなく,盆地境界から伝 わってくるように見える.

こうした震央からでない方向から伝わる表面波の 存在は,数値シミュレーションや小規模なアレイ観 測などで示唆されていたが,実際の地震の記録で確 かめられたのは本研究が初めてである.また,その 発生の物理的なメカニズムも,波面の不連続を補償 する屈折表面波の発生と初めて明らかにされた.

以上のような地震動の伝播様式の解釈を確かめる ため,関東平野の地下構造モデルにおけるラブ波の 波線追跡を行った.地下構造探査の結果からS波速 度構造を推定し,グリッドを置いて各点ごとの水平 成層構造を抽出する.ローカルモードの近似に基づ いて,それらに対して周期8秒におけるラブ波基本 モードの位相速度を計算し,この位相速度分布の中 で地震発生後40秒まで波線追跡した(図2C中の紫 線).波線先端を結んだ理論波面は観測された波面 によく一致している. mechanism of their generation is also interpreted as refraction to compensate for a wavefront discontinuity.

To confirm the above ground motion pattern, ray tracing has been carried out for the Love waves. The Swave velocities are estimated from the results of geophysical explorations, and horizontally layered models are retrieved at grid points. The phase velocities of the fundamental mode of the Love wave are then calculated at a period of 8s using the local-mode approximation. Rays are traced in their distribution to 40s (Fig. 2C). The wavefronts connecting the tips of the rays agree well with the observed wavefronts.



図 2 . 地震発生の(A) 20秒 , (B) 30秒 , (C) 40秒 , (D) 50秒後 , 10秒間の水平 地震動の軌跡 (Koketsu and Kikuchi, Copyright 2000 by Science) .

Fig.2. Trajectories of ground motion in the horizontal plane for 10s intervals (A) 20s, (B) 30s, (C) 40s and (D) 50s after the earthquake (Koketsu and Kikuchi, Copyright 2000 by Science).



6-1. 島弧地殻変形過程

地震研究所は,全国の研究者との共同研究により, 人工地震及び自然地震の合同観測・実験を行ってき た.1950年に始まった大規模な人工地震による地下 構造調査は,わが国の地球科学における大型共同研 究の代表的なものとして知られており,当初から地 震研究所がその世話役を務めてきた.このほぼ半世 紀の間,全国の研究者との共同研究により明らかに されてきた全国各地の地下構造は,もっとも基礎的 な情報として地球科学の諸分野で活用されてきた. 日本列島の地殻構造の全体像も、人工地震の調査に より始めて明らかにされたのである.更に,地震研 究所は1993年以来,日本列島の内陸部で起こる地震 の発生様式を理解するための稠密自然地震観測研究 を全国の研究者と共同で行ってきた.1993年は日光 周辺域,1995年は兵庫県南部,1996年は中部山岳地 域(飛騨)での観測が実施され,例えばマグマや流 体に起因する地殻内反射体についての知見が深まっ た.

このような共同研究の実績を踏まえ,1997年から は,地殻内の様々なスケールの不均質構造を多面的 な観測・実験から解明し,地殻活動発生のメカニズ ムを不均質構造との関連性から明らかにする新しい プロジェクト,"島弧地殻の変形過程"を発足させ た.このプロジェクトは,これまでに行われてきた 屈折法地震探査,稠密自然地震観測の他に反射法地 震探査を加え,これらを密接に連携させ,上述の目 的に迫るものである.

1997 - 1998年の実験・観測は,東北日本で実施さ れた.この探査により,日本海溝から東北日本弧を 経て日本海にいたる詳細な地殻構造断面が明らかに なるとともに,東北脊梁山地下に発達している深部 断層系のイメージングに成功した(ハイライト研究 5-1参照).一方,自然時震観測においては,衛星通 信を用いた地震観測テレメタリングシステムによる 大規模な合同地震観測を東北奥羽山地で全国の研究 者と共同で実施した.50個所の臨時テレメータ観 測点において約2年間の臨時観測を行った.このよ うな大規模な合同観測は,衛星通信システムを用い て初めて可能となった.内陸地震の発生機構を理解 するために,高精度の震源分布,トモグラフィー法 による地殻のイメージングなどの研究が行われた. 図1には,トモグラフィーの結果を示した.この図 から,脊梁山地(第4紀火山列)にそった低速度体 の存在が確認される.また,対象領域の東側(即ち 北上山地)は,総じて高速度域であり,屈折法地震 探査の結果と調和的である.

6-1. Deformation processes of island arc

Research on the crustal structure using an explosion seismic technique in Japan was started in 1950 as an important cooperative research in geoscience. The cooperative research of many universities and institutes was arranged by ERI. Results of investigations conducted in many regions of the Japanese Islands have been referred as basic geophysical information by scientists in various fields of geosciences.

Since 1993, ERI has been also conducted intensive seismic observations under nationwide cooperation with other universities and institutions to investigate physical mechanism of earthquake occurrence. In 1993, we installed a dense seismic array in the Nikko area; in 1995, the Hyogo-ken Nanbu earthquake region was surveyed; and, in 1996, we surveyed the Japan Alps region. Through these studies, we have revealed important structural features involving mid-crustal reflectors probably related by fluid or magma within the crust.

Based on the projects mentioned above, we started a new project of "Deformation processes of island arc crust" in 1997 to elucidate the crustal inhomogeneities from multidisciplinary experiments and observations, and investigate the mechanisms for crustal activities in relation to the inhomogeneous structures. In 1997-1998, an extensive seismic expedition was undertaken in Northern Honshu Arc. From seismic refraction/reflection surveys, a detailed crustal section of this arc was presented (See Recent Research Highlights). In the microearthquake observation, we used a sophisticated telemety system using satellite communication, The data for 2-year observation revealed a precise microearthquake distribution and 3D images of crustal inhomogeneity. Fig. 1 shows the result from the tomography study. In this figure, we see a trend of low velocity material along the backbone range (the Quaternary volcanoes). The eastern part of the surveyed area is characterized by a high velocity body, which is consistent with the result from the seismic refraction study.

In 1999-2000, an extensive seismic expedition was undertaken in Hidaka region, Hokkaido, where the Kuril Forearc is colliding against the Northern Honshu Arc. A 227-km long seismic refraction/wide-angle reflection survey revealed a eastward dipping plane within the Kuril Forarc and the velocity inversion occurring west of 1999-2000年には,北海道日高地域を中心とした 観測・実験を実施した.この地域は,千島前弧と東 北日本弧の衝突が進行している興味深い地域である. 全長227kmの屈折法探査によれば,千島弧側には, 西上がりの幾つかの広角反射面が存在している.一 方,日高山脈の西側の構造は極めて複雑で,低速度 帯の存在が指摘されている.また,日高山脈東側で 行われた反射法地震探査では,東傾斜の反射面が明 瞭な形でイメージングされた(図2).この反射面 は,西に向かって衝上する千島弧の地殻内反射面で あると考えられる. the Hidaka Mts. A seismic reflection survey clearly imaged eastward dipping planes within the Kuril Forearc, which strongly suggests the westward obduction of the Kuril Forearc.



- 図1.東北脊梁山地の稠密地震観測によるトモ グラフィの結果.(a)調査地域図.(2)水 平断面図(深さ10km).(c)垂直断面図 ((b)のa-b).
- Fig.1. Result from tomopgaphic imaging in Northern Honshu. (a) Surveyed area. (b) Horizontal section at a depth of 10km. (c) Vertical section along a-b in (b).



6-2.反射法地震探査による活断層の地下 構造

活断層の地下構造を明らかにすることは, 地震発 生のメカニズムや,シナリオ地震の想定などにとっ て重要である.地震研究所には兵庫県南部地震以降, 反射法地震探査システムが導入され,内陸活断層の 地下構造を明らかにするための研究を全国の研究者 と共同で進めてきた.これらの研究は,島弧地殻変 形過程のプロジェクトと有機的に結合し, 地震発生 域から地表近傍まで活断層の構造を総合的に明らか にすることを主眼として研究を行ってきた.1997-98年は東北地方,1999-2000年は北海道の活断層系 で調査を実施してきた(図1).また,この他に平 均変位速度が大きい内陸活断層系である糸魚川-静 岡構造線や中央構造線活断層系についての探査も進 めている.これらの探査を通じて,東北地方に多い 地殻最上部での断層のフラット・ランプ構造(図2) や,地下に主要断層が伏在する断層起因褶曲の実態 (図3)など,地表の活断層と地下の震源断層を結 びつける上で重要な構造形態が明らかになりつつあ る.



図1. 浅層反射法地震抹重測線 . 有緑は 弧変形過程のプロジェクトで実施し た深部地殻反射法地震探査測線 . Fig.1. Location of shallow reflection seismic

profiles acquired by cooperative projects.



6-2. Imaging of active faults by seismic reflection profiling

Knowledge of the subsurface geometry of active faults, especially the geometry of seismogenic faults, is key to understanding active tectonic processes and assessing the future's destructive earthquakes. To reveal the relationship between surface active-faults and deep seismogenic faults, a seismic reflection profiling system was introduced to the Earthquake Research Institute after the Hyogo-ken Nanbu earthquake of 1995. Since 1996 seismic reflection profiling across active faults has been carried out under cooperation with groups of Japanese universities and government research institutions (Fig. 1). The active faults in Northern Honshu and Hokkaido have been focused as one of the programs of multidisciplinary investigations on deformation processes of island arc crust. Seismic reflection profiles were also acquired from active faults which show the higher slip rate, such as Itoigawa-Shizuoka Tectonic line and Median Tectonic line active fault systems. Through seismic reflection profiling, subsurface geometry of active faults has been revealed, such as a flat and ramp structure in the upper most crust (Fig. 2) and active growth fold by blind thrust (Fig.3).



図2.千屋断層を横切る反射法地震探査断面 Fig.2. Seismic reflection profile across the Senya fault, northern Honshu, Japan.

図3.北海道苫小牧東部,勇払背斜を横切る反 射法地震探査断面

Fig.3. Seismic reflection profiles across the Yufutsu anticline, eastern Tomakomai, Hokkaido, Japan.
6-3.日本列島周辺海域における海・陸 プレート境界域における研究観測

日本海溝や南海トラフのような沈み込みプレート 境界では歴史上巨大な地震を発生し大被害を及ぼし てきた.このプレート境界付近での地震発生メカニ ズムを解明するために,水と物性に注目した観点か ら海底地震計と制御震源,自然地震を用いた観測研 究を行っている.

1995年以降,南海トラフ,三陸沖,日本海東縁, 伊豆小笠原沖において観測を実施した.南海トラフ では,東南海地震と南海地震の境界付近の陸側プレ ート内に不連続的地殻構造があることがわかった. 三陸沖の北緯38度40分~39度の地震空白域に相当す るプレート境界では強い地震反射波を観測した(図 1). これはそこに薄い流体が存在することで説明 可能であり,流体によりプレート境界では大地震を 起こしにくい.31度の伊豆小笠原海溝付近ではマン トルウエッジが蛇紋石化している結果を得た(図2). 低温型蛇紋石がプレート境界に存在すればそこでは 大地震を起こしにくいと考えられ,伊豆小笠原の大 地震発生の傾向を説明できる.三陸沖における観測 では,北緯40度の地殻構造に不連続があることがわ かった.この構造不連続より北側は1968年十勝沖地 震と1994年三陸はるか沖地震の主破壊域に相当する. 40度以北にある地殻内の地震波速度の低下は流体の 移動に関係している可能性がある.

6-3. Seismic observations at the plate boundaries around Japanese islands

The plate boundaries at the subdution zones around Japanese islands have generated destructive earthquakes in past. To study the earthquake generation mechanism in viewpoints of physical properties and role of water at the plate boundaries, we have carried out seismic experiments using ocean bottom seismometers since 1995. At the Nankai Trough, we found the structural discontinuity between the 1944-Tonankai and the 1946-Nankai earthquakes. At the Japan Trench, we observed strong seismic reflections from the plate boundary at 38°40' and 39°N for the aseismic region (Fig. 1). This observation can be interpreted by existence of fluid, which might release strains at the plate boundary. By the experiment at the Izu-Bonin Trench, we estimated the sepentinized mantle wedge (Fig. 2). The serpentine at the plate boundary reduces occurrence of large earthquakes. By the experiment at 39-41°N of the forearc slope of the Japan Trench, we found the structural discontinuity at the lower crust at 40°N, where coincides to the major moment release regions for the 1968-Tokachi- Oki and the 1994- Sanriku-Haruka- Oki earthquakes.



- 図1. 三陸沖の沈み込みプレート境界の反射強 度が強い場所で地震活動が低い(北緯38 度40分~39度).
- Fig.1. Seismic reflections were intense for the aseimic zone located at 38°40′-39°N.



図2. 北緯31°の伊豆小笠原のプレートの沈み込み境界に蛇紋岩化した物質と考えられる低い地震波速度の物質が存在する. Fig.2. Serpentinized materials with low seismic velocities seem to exist at the Izu-Bonin subducting plate boundary of 31ºN.

6-4.古地震

地震発生の繰り返しの実態の解明は,地震の長期 予測のために,そして地震発生の場における定常的 運動及びその揺らぎの解明のためにも重要である. 地震の繰り返しの間隔は数百年から数千年に及ぶ場 合が多く,地質学的手法を取り入れた活断層調査, 津波痕跡調査及び歴史地震調査を,各大学の研究者 とともに共同して実施している.このような研究は, 対象とした震源断層の物理的性質(震源の静的・動 的パラメータ,破壊伝播様式,破壊強度分布等)の 解明にも貢献している.

活断層の地形・地質・地球物理学的調査

単に発生時だけではなく,地震時のずれの量やその空間分布等を推定して,地震発生の繰り返しモデルの検討や,強震動予測に役立つ震源モデルの推定 手法の開発等を行っている.

地質学的手法による古津波調査

津波痕跡調査により,歴史時代,先史時代の東海 地震や南海地震,また十勝沖地震など,海溝型地震 の発生履歴の解明を行っている.

史料地震学調査による断層モデルの推定

1854年安政伊賀上野地震, 1847年善光寺地震など,



- 図1.ジオスラーサーによる丹那断層の調査(広島大学 近藤久雄撮影).
- Figure 1. 'Geoslicer' survey of the Tanna fault (by Hisao Kondo, Hiroshima Univ).

6-4. Paleoearthquake Studies

Understanding of recurrence behavior of large earthquakes is essential for long-term earthquake forecast and also important for studies on earthquake generating mechanism, especially on its steady-state nature and various disturbances affecting it. Repeat time of large earthquakes ranges from hundred years to several thousand years or more and cooperative researches among university researchers on active faults, paleotsunamis, and historical earthquakes are carried out. Our findings are also helpful to estimate properties of a seismic fault such as static and dynamic parameters, mode of rupture propagation, and spatial distribution of asperities.

Geomorphological, Geological, and Geophysical Survey of Active Faults

Not only occurrence time of paleoearthquake, but also co-seismic slip and its spatial variation will be estimated for examination of recurrence models and constructing seismic fault models for strong motion prediction.

Geological Paleotsunami Studies

Historical and prehistoric Tokai and Nankai



図2.バイブロコアリングによる浜名湖の津波堆積物調 査(高知大学 松岡裕美撮影).

Figure 2. Vibro-coring survey of tsunami deposit at Lake Hamana (by Hiromi Matsuoka, Kochi Univ).

地震による発生事象一件ごとの詳細位置確定,デー タベース化を推進し,地質・地盤情報との相互検証 を行い,それらの地震の発生機構を解明している.



- 図3. +勝海岸を17世紀に襲った津波の堆積物(北海道 大学 平川一臣撮影). 黒土が下にあることから,津波によって剥ぎ取ら れた凍土層の塊が逆転して堆積したことがわかる. この土塊を黄土色の火山灰(1667年樽前)が覆っ
- てเาอ . Figure 3. Tsunami deposit (rip-up clast) of the 17th century tsunami attacking the coastal area of Tokachi (by Kazuomi Hirakawa, Hokkaido Univ) A mass of frozen ground was overturned by the tsunami and later covered by volcanic ash identified as Ta-b (the 1667 eruption of the Tarumae volcano).

earthquakes and Tokachi-Oki earthquakes are studied by examining geological paleotsunami evidence for better understanding of the recurrence of interplate great earthquakes.

Fault Model of Historical Earthquakes Estimated from Historical Documents

Exact location of each reported feature is identified and database is constructed for the 1854 Iga-Ueno and the 1848 Zenkoji earthquakes. Comparison of the data with surface geology improves our understanding of faulting mechanism.

6-5. GPSによる総合観測研究

GPS (Global Positioning System) は極めて応用 範囲の広い技術であり,数km程度の広がりの火山 体の地殻変動から地球全体の変形まで,様々なスケ ールの地球表層の変動現象を明らかにすることがで きる.このためGPSは測地学・地球物理学の分野で 基本的な観測手段として急速に導入されつつある. 地震研究所のGPS研究グループは,全国の関連研究 者と共に1988年頃「GPS大学連合」を結成し,日本 列島の地殻変動の観測や周辺のプレート運動の観測 など,多数の受信機と研究者を必要とするような大 規模なプロジェクトを企画立案し,国内外の研究者 と共同して,観測研究を実施してきた.

特に力を注いできたのは,西太平洋~東アジアに かけての地域におけるGPS観測網の構築(5-3 海半 球計画の項参照),伊東市周辺域における稠密アレ イの構築,及び地震・火山活動に伴う臨時観測の実 施,などである.図1,2は伊東市東方沖に発生し た1997年3月の群発地震に関するGPSデータ等を解 析して得られた断層面上の開口速度の時間発展を示 したものである.このような地殻変動の数理解析の 他,キネマティックGPSを応用した海底地殻変動の 検出やGPS津波計の開発あるいは,大気遅延量推定 を通じての気象学・気候学への応用など, GPSの応 用分野はさらに拡がる可能性を秘めており, 地震研 究所では全国の研究者と共同しつつこれらの先端 的・実験的研究を推進している.

Obs

50

40

30

50 40

30

Height change (mm) 20 20 10 10 0 0 -10 10 -20 20 -30 10 20 30 40 50 60 40 0 Distance from J-52 (km) 139° 10' 139° 00 km 5 10 -52 5105 3046 2106 35° 00' 35° 00' 0297 3062 34° 50' 34° 50' 20mm → GPS(obs.) → GPS(calc.) 5microrad → Tilt(obs.) Tilt(calc.) 139° 00' 139° 10'

6-5. Application of the Global Positioning System

The Global Positioning System (GPS) is a space geodetic technique to estimate accurate ground coordinates and their temporal changes. The GPS research team in ERI established a nationwide research group called Japanese University Consortium for GPS Research (JUNCO) among related GPS researcheres in 1988. The group has promoted and conducted a variety of GPS projects of different scale of crustal deformations. Local dense array project in the Izu peninsula and the deformation monitoring project after the 1995 Hyogoken-Nanbu earthquake are the examples. In addition JUNCO has established an international permanent GPS network in the western Pacific area (see the part of the Ocean Hemisphere Project, 5-3). Numerical analysis based on the observed geodetic data is of special interest of the ERI group. Figure 1 shows the crustal deformations due to a swarm activity off Ito that occurred in March 1997, and Figure 2 shows the estimated temporal evolution of open crack on the source plane based on the geodetic data. This approach may be important for help understanding crustal process as well as for providing basic database for forcasting crustal activity. Other basic researches include applications of kinematic GPS for detecting sea-floor crustal deformations and to GPS buoy and applications to meteorology, climatology.

図1.伊東市東方沖に発生した群発地震に伴う地殻変動.矢印は GPSによる水平変位,折れ線グラフは水準測量結果を示す. 観測値と計算値を重ねて示している.

Figure 1. Crustal deformation observed at a swarm activity that occurred in March, 1997 off Ito area. Arrows are the horizontal displacements by GPS and dotted curve in the above inset are the levelling results (Aoki et al., 1999).



図2.西北西-東南東走向の群発地震の断層面上の開口速度変化.最大開口位置が地表に向かって移動しているのが見える.

Figure 2. Daily evolution of open crack velocity distribution on the source area of the swarm that runs WNW-ESE. Upward migration of the cenroid open crack is visible, which may indicate the upward dike intrusion (Aoki et al., 1999).

6-6.ネットワークMT観測

日本列島全域の平均的な電気比抵抗分布を明らか にしようという試みが第7次地震予知計画の一環と して平成6年度からスタートし,現在に引き継がれ ている.地震研究所が独自に開発したネットワーク MT法観測を,全国の電磁気学研究者が力を結集し て共同で実施しようという計画である.この計画は, 電磁気的手法による地震予知研究を行う上で最も基 礎となる情報を得るための作業という意味で,いわ ば比抵抗による日本地図作りとみなすことができ, 世界で初の試みである.ネットワークMT法の電位 差観測は,8回線程度の観測網で構成されるローカ ルネットワークが2~3ヵ月おきに場所を変えて全 国を移動する.図1にこれまでに行われたネットワ ークMT観測の測線分布を示す.地震予知計画では 北大理・東北大理・秋田大工学資源・東工大理・東 大理・名大理・京大防災研・京大理・神戸大理・鳥 取大教養・高知大理などの参加により,赤丸で示さ れた地点で観測を実施した.2001年現在でのべ1000 測線以上での観測が行われ,図2に示されるように 列島スケールのMT電磁場変動の特徴が明らかにな りつつある.これらのデータをもとに,列島スケー ルの上部マントルに至る大局的な比抵抗構造が明ら かになるものと期待される.



6-6. NETWORK-MT Project

NETWORK-MT is one of the major components of the Earthquake Prediction Program. This experiment aims to reveal the mean nation-wide distribution of electrical conductivity in the Earth. Major experimental efforts focus on measuring electric field variations over 10-30 km distances using commercial telephone lines. Scientists from eleven universities and institutions in Japan are collaborating in this project.



- 図1.ネットワークMT観測実施状況.赤丸で示された 地点(東北地方,琵琶湖西部,中国・四国,九州) は平成6~12年度に観測を実施した地域.北海 道東部および青森県は平成2年度に実施した.緑 丸で示された福島県鹿島,伊豆東部,伊豆大島 三宅島などでは連続観測を継続している.伊豆大 島,三宅島の観測の一部は火山噴火予知計画によ っている.
- Fig.1. Cumulative plots of the sites in which NETWORK-MT observations were made since 1994 under the Earthquake Prediction Research program (in red circles). Green circles indicate the sites of continuous monitoring of the telluric voltage differences. Measurements in other areas were taken in 1989-1993 in other projects.
- 図2.ネットワークMT観測によって決定された東北日本 における周期64分の位相分布.電場が東西,磁場が 南北に変化する時の電磁場間の位相差を示し,位相 差が大きいほど地下深部に低比抵抗部が存在するこ とを示す.東北地方背弧側に島弧の走向に沿って高 位相帯が認められる.
- Fig.2. Spatial distribution of phase of Network-MT impedances in NE-Japan (period: 64 minutes). Impedances, whose electric and magnetic field directions are respectively EW and NS, are shown here. Larger phase value indicates the existence of lower resistivity bodies in the deeper portion. Such high phase values are detected in the backarc side of Tohoku district along the strike of the Tohoku arc.

6-7. 地殻比抵抗構造の研究

地震活動や火山活動の活発な地域の地下構造を知 ることは、それらの活動の場を把握しメカニズムを 理解するために必要である.このような場所で地殻 の比抵抗構造を調べることにより、地下の温度や地 下水の分布などに関する情報を得ることができる. 地震や火山噴火の予知計画では、全国の大学が協力 して地殻比抵抗構造探査を実施している.地震研究 所は、それらの共同研究の中核的役割を果たすとと もに、新しい観測手法や構造の解析手法の開発など を行っている.

活断層などの地震活動域の構造探査は,地震予知 研究推進センターが中心となって進めている.自然 の電磁場変動の観測によるMT法の群列観測や,制 御された人工的な電磁場を用いた手法などを適用す る.特に後者は,ノイズの影響の著しい場所の地殻 深部の探査を可能にするために開発した方法である. 最近の共同観測は,奥羽脊梁山脈(平成10年度)・ 出羽丘陵(平成11年度)・日高衝突帯(平成12年 度)・伊豆半島東部(平成7,9,10,11,12年度) などにおいて実施された.いくつかの地域では,微 小地震が比抵抗構造の境界付近に分布していること や,断層に沿って低比抵抗帯が連続していることを 示唆する結果が得られている.

火山における研究は火山噴火予知研究推進センタ ーおよび地震予知研究推進センターが協力して進め ている.最近は,雲仙火山や霧島火山など,九州の 火山の構造探査を対象として,火山体浅部の地下水 の分布と噴火前兆現象の発現との関係の解明や,マ グマ溜りの存在する深さと噴火様式の関連などにつ いて研究がなされている.

6-7. Study on Crustal Resistivity Structure

The crustal resistivity structure is investigated in areas of high seismic and volcanic activities. The results from seismically active areas indicate a relation between distribution of microearthquakes and/or deap seated active faults and crustal resistivity. In volcanic areas, investigations aim to clarify the relations between ground water distribution and precursory signal generation, depth to magma source and features of volcanic eruption.







Fig.2. 2-D resistivity cross section determined by analysis of wide-band MT survey performed at Ou Backbone Range and Dewa Hills. Also shown are seismicity data after Umino et al.(2000) (circles), S-wave reflectors (squares) & P-wave scatterers (stars) determined by Asano(1998), seismic relection result after Hirata et al.(1999), and seismic refraction result after Iwasaki et al.(1999).

6-8.火山体構造探查

火山噴火を理解し,噴火予知の信頼性を高めるに は,火山の地下がどうなっているかを知ることが重 要である.マグマはどこにあるか?噴火の前にはど のように上昇してくるか?その時,噴火の前兆現象 はどこでどのように発生するのか?こうした疑問に 答えるため,火山噴火予知計画の一環として,平成 6年から火山体構造探査が始められた.この実験は, 全国の火山研究者の共同研究として実施され,地震 研究所の火山噴火予知研究推進センターが推進して いる.これまでに図1に示す霧島,雲仙,磐梯,阿 蘇,伊豆大島,岩手の各火山において探査が行われ, 毎年全国から90名余りの研究者が参加している.

実験は、地震や電磁気、その他の地球物理学的手 法で行われているが,探査手法の開発も含めた幅広 い視点で実施している.人工地震による探査は,火 山周辺の6ヶ所で爆破を行い,それによって生じる 振動をおよそ300ヶ所に設置した地震計で観測する. 観測データは,不均質性の強い火山の構造を解明す るために本研究グループによって開発された波線追 跡法によって精密な3次元インバージョンを行い, 火山の地下およそ3kmまでの詳細な速度構造が明 らかにされるようになっている.しかしマグマ溜り が存在すると考えられている地下3km以深の構造 を明らかにするには探査深度が不足しており,人工 地震データに加えて自然地震データを利用した探査 を併用する手法を開発中である.地震計を100台以 上設置して長期に観測を行う実験を行ったり,重力 データを加えて構造を決定する手法の開発も行って いる.図2は,伊豆大島において重力データも加え て推定した速度構造である.深さ5kmほどにマグ マ溜りと考えられる低速度域が検知されたほか,ダ イクの集合体と考えられる高速度域が深さ1kmほ どに見出されている.

電磁気構造探査では,多くの火山の地下10km程 度に抵抗の低い層が広がっており,火口直下では浅 くなっている事が判明した.この層は,マグマ,あ るいは火山ガスの上昇域に対応していると考えられ る.また,地表付近に抵抗の低い層が広がっており, 熱水を多く含む層あるいは熱変質を受けた層と考え られている.深部から上昇してきたマグマや火山ガ スは,この層と接触して,火山性微動や地熱異常な どさまざまな噴火の前兆を引き起こしている.

6-8. Joint volcanological experiment on volcanic structure and magma supply system

Since 1994, joint experiment has been conducted in several volcanoes in Japan to reveal the structure and the magma supply system by the scientist group of national universities under the National Research Project for Prediction of Volcanic Eruptions (Fig.1). Volcano Research Center conducts and promotes this experiment. The experiment was carried out by seismological, electromagnetic and other geophysical methods.

Seismic explosion experiments succeed to determine a precise velocity structure up to 3km in depth by highdensity observation network and newly developed seismic tracing method. In recent years, new method, which combines teleseismic and gravity data, succeeded in detecting some anomalous regions related to magmatic activity in Izu-Oshima Volcano (Fig.2).

Electromagnetic survey found that the deep low resistivity region about 10 km below the surface, and the shallow low resistivity region about 1 km below the surface. Shallow low resistivity region, which is interpreted as a water-saturated porous layer, plays an important role in controlling types of eruption and in generating precursory phenomena of volcanic eruptions.



図1.火山体構造探査実施火山.

Fig.1. Joint volcanological experiment on volcanic structure and magma supply system in Japan.



図2. 伊豆大島火山の速度構造. Fig.2. Velocity structure of Izu-Oshima Volcano.

P-wave Velocity

7.近年の地震と火山活動研究 Researches of Earthquakes and Volcanic Eruptions in the Recent Few Years

7-1.台湾地震

1999年9月21日午前1時47分(現地時間)ごろ, 台湾中部でMw7.7の大地震が発生し,6800棟以上の 建物が倒壊した.震源地は南投県集集鎮付近であっ た.地震による被害は震源に近い南投県や周辺の台 中市などの台湾中部に集中し,死者は2297人に及ん だ.長さ80kmにわたって縦ずれ成分に富む地表地 震断層が出現した.断層の一部は川を横切り,落差 8mの滝を造った(図1).



- 図1.地震断層は豊原市大甲渓に滝をつくり,橋を壊した(1999年9月23日撮影).
- Fig.1. The Tachia River in Fengyuan was cut by an 8 m displacement that created a new water fall and destroyed a bridge.

台湾はフィリピン海プレートの上にのったルソン 弧と中国大陸との衝突帯である.大陸とルソン弧の 間にたまった堆積物が衝突で掻き上げられて付加体 となって隆起し,逆断層で切られている.そのよう な断層の一つがこの大地震を引き起こした車籠埔断 層である(図2).衝突が若いので海溝陸側の付加 体構造と類似し,海溝系地震ともみなすことができ る.

この大地震はどのような歪み場の中で発生したの であろうか.台湾で本地震前に実施されたGPS観測 データから推定した歪み速度分布を図3に示す.こ の地震は台湾東部と南西部のひずみ速度の比較的大 きな地域から少しはずれたひずみ速度が比較的小さ な場所で発生したことがわかる.

東京大学地震研究所は、地震発生直後から情報の 収集に努め、まずグローバル広帯域地震観測網の遠 地実体波記録を用いて震源過程を調べ、結果をいち 早くホームページで公開した。その後、台湾全土の 高密度強震計データを加えて波形解析を行い、図4 のような詳細な震源過程を得た。震源断層は南北 80kmにわたり、その北西端で約9mの最大すべり を生じた.

7-1. The 1999 Chi-Chi, Taiwan, Earthquake

In the early morning of September 21, 1999, the destructive earthquake of Mw7.7 struck central Taiwan near the small town of Chi-Chi. There were 2297 deaths and about 6800 buildings destroyed. It was accompanied by extensive faulting, which trends about north-south and was traced for about 80 km along the Chelungpu fault. The principal surface expression of faulting appeared on the riverbed and it created a new waterfall (Fig. 1).

Taiwan is located in a collision zone between the Asian continent and the Luzon Arc on the Philippine Sea plate. The Tertiary sediments on the continental margin have been off-scraped and sliced by thrusts due to the collision, forming the uplifted mountain range. One of the thrusts is the Chelungpu fault on which the Chi-Chi earthquake occurred (Fig.2). Because the collision is young, the geological structure is close to that of the subduction zone.

In order to help understand tectonic background of the



- 図2.台湾中部の地質構造東西断面.台東縦谷が衝突の 縫合線であるが,プレート相対運動のかなりの部 分は,西部山麓帯の下の付加体を切る逆断層で消 費されている.1999台湾大地震をおこした車籠埔 断層もそのような逆断層の一つである.
- Fig.2. Geological cross-section of central Taiwan. The Longitudinal Valley is the suture zone of the collision, but the relative plate motion is also consumed at the thrusts and the decollement beneath the Western Foothills. The ChiChi earthquake occurred on one of such thrusts.

1999 Chichi, Taiwan earthquake, ERI analyzed data from the repeated GPS surveys conducted during a period of 1990-1995 in Taiwan. Figure 3 shows obtained pattern of maximum shear strain in the period. Shallow earthquakes in the same period are also shown. The figure indicates that the 1999 earthquake occurred in the area of relatively low strain rates between the eastern Coastal range and the southwestern area of high strain rates.



- 図3.GPSデータに基づく最大ずりひずみ速度分布 (1990-1995).同期間の浅い地震の震源も示す (d 30km, M 4.0).印は1999年集集地震の震源. 黒い線は活断層.赤線は地震断層の位置を示す.
- Fig.3. Maximum shear strains of the Taiwanese islands estimated by the Least Square Prediction method for the period 1990-1995. Shallow earthquakes (d 30km) of magnitude greater than or equal to 4.0 for the period from 1990 to 1995 are plotted (ISC database). Black asterisk shows the epicenter of the Chi-chi earthquake and the red line denotes the surface faults.

この高密度強震計データによれば,車籠埔断層, 特にその北側部分の近傍で異例に大きく,長周期成 分に富んだ地動速度が観測されているが,この地震 動による被害はそれほど大きくなかった.それに対 して、断層より10kmから20km以上離れた震央付近 からその東側にかけての地域で,甚大な被害が発生 し,速度・加速度ともに大きい強震動が観測された. 地震研究所ではこれらの強震動記録が得られた地点 付近の学校建物の被害調査を行うとともに,強震記 録を入力とする地震応答解析を行い,実際の被害と 強震動の関係を明らかにした.

集集地震は台湾中部の褶曲・衝上断層帯で発生た 地震であり,地震にともなって大規模な地表地震断 層が出現した.地震研究所では、この地震断層の正 確な実変位量・変位方向と地震断層の性状を記載す るために現地調査をおこった.精密測量によって復 元された変位ベクトルは北部で大きく10.1mである. 変位ベクトルの方向はGPSによる調査の結果と調和 的であった.地震断層は一部区間を除いて,変動地 形的に認定される活断層とよく一致している.また, 数万年間の平均的な地殻変動を明らかにするために, 震源域周辺の変動地形調査をおこなった.車籠埔断 層はその西側の彰化断層とともに東傾斜の衝上断層 系をなしており,過去10万年間の累積した変形では ともに同程度の変形量を示している.

地震研究所では,本震発生15日後に20台の地震計

Soon after the earthquake, ERI set up the special page on the web site, and tried to provide information about relevant researches and surveys on the Chi-Chi earthquake. A preliminary result of the source process was obtained on the following days from teleseismic data, notifying that the major moment release occurred about 40 km north of the epicenter. Figure 4 shows a spatial distribution of the fault slip obtained from the joint analysis of teleseismic data and strong motion data. The maximum slip amounts to about 9 m near the end of seismic fault.

In the strong motion data, we find very large longperiod ground velocities around the northern part of the Chelungpu fault, but they did not cause very severe damage. Damaging ground motions with large velocities and accelerations happened in the epicentral area and the east of it, which are 10 to 20 km or more away from the fault. ERI investigated the damage to the buildings close to observation stations, and derived the relation between the actual damage and strong ground motion by carrying out earthquake response analyses with strong motion records as inputs.

The surface ruptures with a large displacement, associated with the Chi-Chi earthquake, appeared along the Chelungpu fault, which is an out-of-sequence thrust in the fold-and-thrust belt in the western Taiwan. To determine the exact amount of net-slip and direction, ERI carried out field survey in October 1999. The maximum amount of net-slip obtained was 10.1 m in the northern part of the fault. The slip directions are concordant with those from GPS measurements. The surface ruptures occurred along the pre-existing active faults determined



- 図4 震源断層上の断層すべり分布.遠地実体波と近地 強震計記録の解析によって得られた.印は震央.
- Fig.4. Spatial distribution of the fault slip obtained from teleseismic data and strong motion data. Star indicates the epicenter and solid curve indicates the Chelungpu fault

を現地へ持ち込んで約2ヵ月半の余震観測を行った. 20,000個以上の地震が観測され,約2,000個の地震に 対して,地殻内の速度構造の不均質を考慮して震源 再決定を行った(図5).余震は,東に約30度で傾 く面上に分布し,深さ約15kmでは水平に広がり, 更に、本震直下約30km付近にも分布している.こ れらの震源分布は,この地震がユーラシアプレート の付加体下部で発生したことを示している.

余震の活発さをあらかじめ明らかにすることは、 防災的見地から必要であり,住民の抱く過度の不安 の除去に役立つ.そこで、この大地震の余震活動の 特徴を速やかにとらえ,予め定めた期間にある大き さ以上の余震が何回起こるか予測することを試みた. 余震活動の経過を改良大森公式に当てはめ、設定し た期間に起こる余震数の期待値を求めた。本震から 2カ月の期間に計13回の予測を行い、11回は予測幅 の範囲に収まった。

地震研究所では、地震後の余効的地殻変動を観測 するために2周波GPS受信機2台と本研究所で開発 された小型1周波GPS受信機8台を地震発生約3週 間後に設置した.約6ヵ月後の2000年3月下旬に撤 収した.小型1周波GPS受信機は低消費電力である ため,商用電源を使用せず自動車用バッテリーと太 陽電池パネルを用いることができる.そのため,商 用電源の有無にかかわらずGPS受信機を設置するこ とができた.観測点は地表に現れた地表断層の北部 にあたる台中市から東方に直線状に配置した.地表 断層をはさんで下盤(西側)での変位は観測されなか ったが上盤(東側)では一月平均で1~1.5cm西へ 移動していることが観測された.台湾中央科学研究 院による震央付近におけるGPS余効変動観測ではこ こで求められた値の4~6倍の変位が得られており, 余効変動が空間的に均一ではないことがわかった.



by tectonic geomorphology, except for the short segment in the northern part of the fault. The survey of tectonic geomorphology across the Chelungpu fault in 2000, revealed the vertical crustal movement last 100 ka, suggesting that the amount of slip along the frontal thrust (Changhua fault) is as large as one of the out-ofsequence thrust (Chelungpu fault).

ERI have conducted an aftershock observation of the 1999 Chi-Chi, Taiwan, Earthquake. We deployed 20 seismographs in and around the focal area. For two months observation we recorded a large number of aftershocks. Taking the lateral heterogeneity in the crustal structure into account, we have a clear distribution of aftershocks (Fig.5). There are three particular trends in an east-west cross section: an east dipping distribution, a very low angle distribution, and a deeper distribution. They correspond to the fault plane of the main shock, the supposed decollement between the accretionary wedge and the upper boundary of the Eurasian Plate, and activities in the Eurasian plate.

A plausible range of the number of major aftershocks of the 1999 Chi-Chi, Taiwan earthquake was tried to predict. Based on the modified Omori formula, the number expected in a certain time period was estimated. Among 13 trials of prediction, 11 cases were successful during 2 months after the main shock. Such an attempt will contribute to the temporary planning of disaster prevention and elimination of over-anxiety among the people in the epicentral area.

In order to observe postseismic deformation, ERI deployed eight single frequency and two dual frequency GPS receivers about three weeks after the Chi-Chi Earthquake. The single frequency receiver is developed in ERI. Ten GPS receivers formed the linear array perpendicular to the strike of the earthquake fault. This GPS line array crosses the fault trace on the surface from Taichung City to central mountain area because the surface projection of the maximum slip area on the fault is about 40 km east of Taichung City. We detected the movement to the west at the sites on the hanging wall in the eastern area, while no movement on the footwall in the western area. The displacement rates are 1 to 1.5 cm/month, suggesting heterogeneous postseismic deformation.

図5.1999年台湾集集地震の余震分布.観測点補正値を加え て再決定した震央分布とその東西断面図.本震の位置は 星印,観測点は逆三角で表した.

Fig.5. Aftershock distribution with a station correction. Epicenters (upper) and a depth distribution (lower) are shown. A star and inverse triangles indicate the main shock and observation stations, respectively.

7-2. 有珠山2000年噴火

今度の有珠山の噴火では,顕著な地震活動が前駆 するという有珠山特有の性質を活かして噴火の開始 を上手く予知できたことが,大学の火山観測研究史 において画期的な事件であった. 有珠山では噴火の 4日前からの急激な地震活動の活発化が見られた. その後,山頂部の隆起に引き続いて,2000年3月31 日,北西山腹(西山西麓)でマグマ水蒸気爆発が発 生した.翌4月1日にはその北の金毘羅山でも噴火 が始まった.噴火の勢いは時間とともに減少し,噴 火は火口から勢いの良い土砂噴出を伴うタイプの水 蒸気爆発(図1)を経て,火口の直上で泥が炸裂す るタイプへと移行した.水蒸気爆発によって,多数 の火口が出現した.西山西麓では4月3日頃から, 顕著な地割れを伴って隆起現象が観察され,その隆 起率は時間と共に減少した.今回の噴火は,一旦, 山頂直下に貫入したマグマが北西方の浅部に移動し て開始したと考えられる.また,噴火には地下水が 強く関与し,火口下への水の供給が時間と共に減少 したため,噴火様式が変化したものと考えることが できる.今回の噴火は1910年に水蒸気爆発を起こし て潜在ドームを使った明治噴火と良く似たパターン であった.



図1. 有珠山西麓での水蒸気爆発. 手前が西山火口, 奥 が金毘羅山火口.背後は洞爺湖と温泉街. 4月10 日陸上自衛隊ヘリコプターから撮影.

Figure 1. Phreatic eruptions at the western flank of Usu volcano. Craters locate at west Nishiyama (in front) and Kompirayama. Background is Lake Toya and the hot spring resort. Taken from a helicopter of Ground Self-Defense Force on April 10, 2000.

7-2. Usu 2000 eruption

A commencement of eruption at Usu in 2000 was predicted successively, empirically using the eruptive behavior of this volcano. This was an epoch making event in the history of university researches on volcanic eruptions. Seismic activity had become high in level at Usu volcano four days before eruption. Following inflation of the summit area, eruption started with phreatomagmatic eruption at the northwestern flank of the volcano (west Nishiyama) on March 31, 2000. The next day eruption also began in Kompirayama north of the first eruption. The scale of eruption had decreased with time, changing from issuing cock's tail jet (Fig. 1) to explosion of mud just above the craters. Multiple craters appeared by repeating phreatic explosions. Uplifting of west Nishiyama became clear on April 3, being accompanied with many faults, though the rate of uplifting decreased with time. It is considered that the eruption started, following the northwestward migration of magma that once intruded just beneath the summit. Temporal change of the eruption mode is likely to have reflected gradual decreasing in water inflow into the vent. The scenario of this eruption was close to the 1910 eruption that formed a cryptodome being associated with phreatic eruptions.

ERI supported the national university's emergent research project on this eruption, serving observation equipment, securing travel expenses for researchers, establishing emergent observation system, making applications for observation researches to the Ministry of Education, and so on. ERI itself organized the examination committee for maintaining its functions in emergent events, and set the steering office for the Usu eruption on March 30, a day before the eruption. The office gathered information related to the eruptive activity and provided it inside and outside the institute, and, as the cooperative research center of national universities, made communication and negotiation with the outside. Homepage of Usu eruption in the ERI server functioned effectively to distribute information on the research activity outside. Apart from the researches, ERI loaned four satellite telemetry systems to Japan Meteorological Agency for monitoring the eruptive activity, and dispatched technicians to install them.

Seismic and tilt observation: We have conducted broadband seismic observation at Usu volcano since just before the first eruption on March 31, 2000 in cooperation with other universities. In the broadband seismic observations, 13 broadband sensors were installed with continuous recording mode. Spectral analysis of the broadband data revealed the existence of very-long-period seismic tremor with dominant period longer than 10 sec, which cannot be detected by conventional short-period seismometer (for details, see 5-6 Broadband seismic observation of volcanoes). We also installed 3 tiltmeters in April 14-17 around Usu volcano. Recording and analysis of tilt data have been conducted at Usu Volcano Observatory, Hokkaido 地震研究所は、この噴火に関して、大学の観測研 究支援を行った.すなわち、観測体制の整備支援、 観測班の旅費の確保、緊急観測体制整備に関する調 査、および文部省への申請書類の作成などである. さらに、「緊急時における研究所の機能確保のため の指針規則」にしたがって、3月30日に検討会を設 置した.検討会では、連絡本部を地震研究所内部に 設置し、現地調査観測活動の状況把握と支援、情報 の収集と提供、文部省などとの対外折衝、他機関と の情報交換などを目的とした.情報発信にはホーム ページが有効に使われた.大学の火山観測とは別に、 火山活動監視のために、気象庁から地震研究所へ衛 星テレメータ装置(合計4台)の貸与申し込みがあ り、装置設置のための技術官の派遣も行った.

地震・傾斜観測: 3月31日に噴火を開始した北海 道有珠山において,噴火直前から他大学と共同で広 帯域地震計による観測を実施した.この観測では, CMG-3T,STS-2,CMG-40T等の広帯域地震計を, のべ13箇所に設置し,無線テレメータおよび現地収 録方式で連続観測を行った.波形解析から,活動初 期に周期10秒以上の長周期微動が西山付近を震源と して発生していることがわかり,熱水の寄与の可能 性が議論されている(詳細は,5-6 火山での広帯域 地震観測を参照).このような長周期の微動は,通 常の地震計では観測することができない.傾斜観測 では,2000年4月14-17日に有珠山周辺の3点に傾 斜計を設置した.その後,データ収録・解析は有珠 火山観測所に引継がれた.

稠密GPS連続観測: 有珠火山およびその周辺の地 殻変動を把握するために北海道大学を中心として東 北大学,名古屋大学,九州大学と共同で2周波GPS 観測点を6点設置した.これにより約5kmの平均 基線長を持つGPS観測網を設置することができた. この観測網で観測されたデータから地殻変動を準リ アルタイムで得ることができ,変動を監視するため に北大と共同でGPS自動解析システムを構築した. これは6時間ごとに各観測点からGPSデータを携帯 電話で回収し,Bernese GPS Software Ver 4.0 BPEを用いて解析を行い,結果を北大のホームペー ジで公開した.このシステムにより噴火口にもっと も近い観測点で5月上旬までは約20cm/月,その後 5月中旬から変動が小さくなったことが観測された.

重力観測:噴火後の5月から1カ月以上の間,北大 と共同で,火口から2kmの地点で絶対重力の連続観 測を世界に先駆けて実施した(図2).5月20日頃 までは減少傾向が続いていたのが,それ以降は増加 傾向に転じたことが明瞭に捉えられた.高精度な絶 対重力計による測定によって初めて可能となった結 University.

GPS: To observe the deformation in and around the Usu Volcano dual frequency GPS receivers were deployed at six sites whose averaged baseline length is about 5km. Our institute collaborated with Hokkaido University, Tohoku University, Nagoya University and Kyushu University in this operation. To detect deformation of the volcano every day we construct the automatic analysis system of the GPS data with Hokkaido University. This system get the GPS data every 6 hours using a mobile phone, then calculate the deformation with Bernese GPS software Ver. 4.0 BPE. Finally, the figures of the time-series are upload on the Home Page of the Hokkaido University. We can detect about 20cm/month at the nearest site to the crater until the begging of May 2000 and deformation rate is decrease in middle May. It became possible that the position of the sites could get every several hours by this system.

Gravity: After the eruption of 2000 Usu volcano, we carried out an absolute gravity measurement in conjunction with Hokkaido University for more than 1 month since 14 May, 2000; the site is only 2 km away from the eruption vent. Figure 2 clearly illustrates a gravity decrease until around 22 May, followed by an increasing trend; such a small but significant gravity change could never be detected until we used a high



- 図2.北大有珠火山観測所(火口から2km)における絶 対重力変化(単位はマイクロガル=10⁻⁶cm/s²); 絶対重力の平均値は980423007.7マイクロガル.5 月22日頃まで重力が減少し,それ以降に増加して いるは,周辺の地殻の隆起が沈降に転じたことに 対応していると考えられる.
- Figure 2. Absolute gravity change (unit in microgal=10⁻⁶ cm/s²) at Usu Volcano Observatory, Hokkaido University, which is only 2 km away from the eruption vent; mean absolute gravity is 980423007.7microgal. Gravity continued to decrease until around 22 May, when it begins to increase. This probably reflects a commencement of subsidence after the preceding uplift of nearby ground surface.

果である.周辺地域の地殻変動が,このころを境に 隆起から沈降に転じていたこととも整合する.

熱観測: 有珠山の総合観測の一環として,有珠火山北西部の新火口群から放出される噴煙の映像を解析して放熱量を推定した.放熱量は間欠的に噴火が発生していた噴火当初はあまり大きくなく,常時噴煙をあげるようになった4月7日頃急速に増大し,その後徐々に減少した.噴火開始から1ヶ月間の放熱量の平均は約2GWで,前回の1977~78年噴火時よりおよそ1桁大きい.このことは,マグマが貫入した領域に地下水が豊富に存在し,マグマとの間に活発な熱交換が行われたために放熱量が1桁大きくなり,その結果として噴火活動が短期間に終了するになったと考えられる.この他に噴煙の赤外映像を解析する基礎的な研究も行った.

写真観測: 噴火による山体の変動を明らかにする ため、定点を設けてデジタルカメラで撮影を繰り返 した。西山火口群から西へ15-16kmほど離れた豊浦 町の観測地点から4月3日に撮影を開始し、4月4 日には火口付近が1日あたり1m以上の速さで隆起 していることが時間差実体視で明らかとなった。隆 起は日を追って減速したものの、その量は合計で10 m以上に達した。変動には南向きの成分が大きく、 その向きを逆にたどると、西山火口群中央部付近の 地下の比較的浅いところにマグマが上昇し、周辺を 押し上げたことが示唆された。 precision absolute gravimeter. The detected absolute gravity change is consistent with the changes in ground deformation measured around the Usu volcano.

Geothermal observation: Heat discharge rate from the newly opened craters on the northwestern part of Usu Volcano is estimated by analyzing video images of the volcanic smoke as a part of the joint observation. The heat discharge rate was rather small at the beginning stage of the eruption, which has intermittent explosions, but increased rapidly on about April 7, which has continuous eruptions, and decreased gradually within one month. The amount of the heat discharge for 1-month from the beginning of the eruption is estimated about 2GW in average, which is 10 times of the discharge rate in the last eruption in 1977-78. The large discharge rate caused by the intense interaction of ground water and magma may make eruptions to finish in a short time. The fundamental research of analyzing the infrared imagery of the volcanic smoke was also done.

Time-differential stereoscopy observation:

Volcanic deformation was tried to detect by digital photographs taken exactly at the same location. At Toyoura town about 15-16km west of the Nishiyama craters, it was possible to observe a part of the craters. Using a pair of photographs taken at this point after April 3, 2000, remarkable uplift more than 1 m per day was proved on April 4 around the craters by a timedifferential stereoscopy. The uplift attained more than 10 m in total with gradual decrease in rate. Considering the direction of the uplift with southward shift of the ground surface, a certain amount of magma was suggested to intrude at a shallow depth beneath the middle of the Nishiyama craters.



図 3 . 有珠火山の放熱量の変化 . Figure 3. Variation of the heat discharge rate of Usu Volcano.

7-3.2000年三宅島火山活動

<<調査観測の支援体制>>

地震研究所の対応

2000年6月26日午後7時30分,気象庁より臨時火 山情報第1号が出された.地震研究所はこれに呼応 して同夜10時、「三宅島火山活動に関する連絡本部」 (本部長:情報センター長,構成員:火山センター 及び情報センターの教職員)を立ち上げた.連絡本 部は,同夜ただちに三宅島に向かった電磁気観測班 との連絡を皮切りに,出張者の把握,連絡,情報の 収集,研究報告会の実施,広報(HPやマスコミ対 応)など,調査観測研究の後方支援を行ってきた. 火山活動は6月末に終息に向かうかに見えたが,連 絡本部としては規模を縮小しつつも体制を継続した. 結果的にはこのことが後の本格的な火山噴火及び神 津島新島群発地震活動に際しても機敏な対応・情報 提供を可能にした.その後,火山ガスの大量放出と いう更なる火山活動の展開や泥流の発生によるライ フライン被害の現実を前に,9月4日全島避難措置 がとられることとなった.これを契機に大学として はより本格的な観測研究体制の構築を図るべく大学 総合観測班を立ち上げた.

大学総合観測班の活動

2000年の三宅島噴火前から,多くの火山研究者は 21世紀初頭には次の噴火が発生すると考えていた. そのため,様々な調査研究が精力的に行なわれてき た.全磁力の観測から地下の温度上昇を捉えた事な どはその1例である.噴火発生後は,火山研究者は 精密観測を速やかに実行し、観測結果を報告したり、 データの解釈にあたって助言を行うなどして,監視 業務にあたる気象庁の支援に個別に貢献してきた. しかし,三宅島の活動が活発化したため,大学総合 観測班が組織化された.観測班は,地震,地殻変動, 重力,熱電磁気,火山ガス,地質物質科学の6分野 と連絡調整からなり, 地震研究所は総合観測班の活 動拠点として事務局機能を果たした.総合観測班の 観測・研究の目的は、およそ3000年ぶりに三宅島で 進行しつつある活動の全貌を把握し,活動の予測の ための物理過程の究明とモデルの検証を行うことで ある.総合観測班は,総合・研究の方針を決定し, 方針に基づく予算要求のとりまとめや気象庁との観 測調査の調整などを行っている.観測班の活動によ って,わが国や世界の類似の火山活動に対する先導 的研究が進みつつあり,高度化した観測や観測デー タの解釈,将来の活動予測などによって幅広く監視 業務を担当する気象庁を支援している.総合観測班 の活動状況や観測研究の方向性は随時ホームページ に掲載されている.これらの内容は,火山研究者や

7-3. 2000 Volcanic Activity of Miyake-jima

<<Organizations>>

Immediate Response of ERI

On the evening of June 26, 2000, Japan Meteorological Agency (JMA) issued a caution of the Miyake-jima volcanic activity. A few hours later, ERI organized the steering office to support various kinds of geological and geophysical observations. The office gathered information on the eruptive activity as well as earthquake swarm which was induced probably by the migration of magma. Special page was set up on the ERI web site, where research activity and relevant information were provided in and outside ERI. The office also arranged temporal meetings for data examination and interpretation.

University Consortium for the Integrated Volcanological Observation

Before the 2000 eruption of Miyake-Jima Volcano, many volcanologists thought that the next eruption would occur in the beginning of the next century. Therefore, various investigation researches have been done vigorously. After the beginning of the present volcanic activity, volcanologists started precise observations and contributed individually to JMA which has a responsibility to watch the volcanic activity by reporting the observations and advising on the interpretations. However since the activities of Miyake-Jima became high, University Consortium for the Integrated Volcanological Observation on the Miyakejima has been organized. It consists of Head, coordinator, and six observation units (seismology, crustal movement, gravity, geothermal and electromagnetic research, volcanic gas, geology, and material science). ERI fulfilled a bureau function of this observation group. The purpose of this group is to observe the whole volcanic activities and to construct and verify a physical model of the Miyake-Jima eruption to predict the future activity.



図1 総合観測班の事務局機能

Fig.1. Bureau function of the University Consortium for the Integrated Volcanological Observation 防災・報道関係者のみならず,三宅島島民,市民からも高い評価を得ている.

<<調査観測研究で明らかになったこと>>

噴火と陥没火口の時間経過

三宅島では6月27日に小さな海底噴火が起こった. その後,7月8日に突然の山頂部の陥没が起こり(図 2), 断続的な噴火活動へと移行した.地質グルー プは噴火毎の噴出物の野外調査と室内での岩石学的 解析を行うと共に,火山活動の観測を空からも続け た.最初に噴火したマグマは前回噴火と同じ化学組 成を持つ.山頂の陥没口は8月中旬まで次第に拡大 し続けた.その最終的な大きさは直径約1.6km深さ 500mでその容積は0.5km³に達する.山頂からの噴 出物量はわずかに0.01km³で陥没量に比べてはるか に小さい.このことは,今回の陥没イベントが,陸 上噴火を伴わずに地下に大きな空洞ができたために 生じたことを物語っている.噴出物は細粒の火山灰 であり,明らかにマグマ物質と思われるものを含ま ず,熱水が強く絡んだ噴火であることを示す組成的 特徴を持っていた.8月18日には噴煙が約15kmの 高さまで上昇する最大規模の噴火であり,全島を火 山灰が覆いつくし,住宅地にまで噴石が降り注いだ (図3).また,8月29日の噴火では噴煙が「火砕流」 様に横方向に流れ北岸の住宅地にまで達した.9月 に入って噴火活動がほぼ収まったが,激しい脱ガス が続いている.



図2 2000年7月8日に出現した三宅島山頂陥没口.7月9 日午前,海上保安庁機から撮影.

Fig.2. Collapsed crater at the summit of Miyake-jima volcano that appeared on July 8, 2000. Taken from an aircraft of Japan Coast Guard on the July 9 morning.

三宅島・神津島近海の地震活動の推移

三宅島から始まった地震活動は,すぐに三宅島の 北西海域に移動し,M6級の地震5個を含む活発な The bureau of the observation group decides the policy of the research and a budget requirement, and makes the adjustment of the observation with the JMA. The activity of this group is leading the research for the similar volcanic activity in Japan and in the world, and widely supports the JMA by the advanced observations and interpretation of the data. The activity of the observation group and the aim of the research are presented on the homepage. These pages get high evaluation not only from the community but also from Miyake-Jima islander and the citizen.

<< Research reports >>

Sequence of the Summit Collapse and Eruptions

The eruption started with a small submarine eruption on 27 June 2000. A sudden collapse of the summit area on July 8 developed into intermittent eruptions from the summit (Fig. 2). Geologist group inspected products of each event, studied their petrology, and kept monitoring the eruptive activity from the air. The lava of the submarine eruption is close to that of the 1983 eruption. The dimension of the summit collapsed crater increased until mid-August; its final dimension is about 1.6 km across, 0.5 km deep and 0.5 km³. The total volume of eruptives is 0.01 km³, much smaller than the former. These strongly indicate the formation of large open space under the volcano prior to and during the eruptions. The products are fine volcanic ash, and unlikely contain essentials of this eruption, but have compositions showing strong contribution of hydrothermal fluid. The largest eruption whose ash cloud rose about 15 km above the summit took place on August 18. Volcanic ash of it fell over the whole Miyake-jima and stones were showered on the residential area. Ash clouds moved slowly such as pyroclastic flows, and enveloped houses in the northern coast on August 29 (Fig. 3). Though the eruptive activity itself had declined in September, strong degassing had continued since then.

· Earthquake swarm started under the Miyake Island

Earthquake activity spread toward the northwestern oceanic region. It includes five large earthquakes with the magnitude larger than 6.0 and a huge number of earthquakes. To get better resolution for the spatial and temporal changes in the activity, we conducted a series of pop-up and buoy telemetering ocean bottom seismometer observations. The epicenter distribution obtained strongly indicates a northwest-southeastern lineament. The vertical cross-section shows two trends; the deeper (7-13km) distribution forms a very thin zone



図3.8月18日噴火による火山灰および噴石の等層厚線図. Fig. 3. Deposition of eruption products of the August 18 eruption. Left: volcanic ash. Right: ballistics and cinders.

活動が三宅島・神津島近海およびその周辺部で発生 した.これらの地震活動は海域で発生したため,自 己浮上型の海底地震計とテレメータブイ方式の海底 地震計を設置して詳細な震源分布を求めた.その結 果,震源は深部で薄い板状の分布になっていて,地 下のマグマの移動を示唆する重要な情報になってい る(図4,5).

三宅島・神津島・新島・式根島での機動強震観測 によって得られた減衰(Q⁻¹)トモグラフィもマグ マの移動を示唆する減衰帯の存在を示す(図6). and the shallower (< 7km) distribution is much thicker (Figs. 4, 5). This feature is important for understanding the behavior of the magma migration.

Several strong motion seismometers were also installed at the Izu-islands in the early stage of the earthquake swarm. The tomography of Q^{-1} obtained from these data clearly indicates high attenuation area in the straight between Miyake-jima and Kouzu-shima (orange area in Fig. 6).







図4b. 震源の移動(6月26日~9月30日). Fig. 4b. Time-space distribution (Jun. 26 - Sep. 30).

図4a. 震央分布図(6月26日~12月31日)と主な地震のメカ ニズム解.

Fig. 4a. Epicenter distribution (Jun. 26 - Dec. 31) and focal mechanisms.



図5.50度回転して南西から見た深さ断面図(精度の良いものだけ).

Fig.5. Cross-section rotated 50 degrees.

長周期地震波の発生源

7月8日の山頂陥没に伴う噴火の後,同月11日ご ろから長周期の地震波パルスが観測された.地震波 パルスの発生は防災科学技術研究所の設置した傾斜 計で観測された山上がりの傾斜ステップと完全に対 応している.地震研究所が島内に設置した地震計の 速度記録によると,振幅はパルス毎に異なるものの, パルス幅は40~50秒とほぼ一定している(図7). 発生頻度は,初めは1日に2~3回であったが,次第 に1~2日に1度の発生となり,8月18日の噴火以降 は発生していない.震源位置は山頂火口の南~南西 方向1km,深さは2~3km程度と推定されている. この地震波パルスの多くは,モーメントマグニチュ ードMwで5に達し,日本中の広帯域地震計で観測 された.波形解析からは,10⁷m³に達する体積膨張 を伴うメカニズムが得られている.長周期パルスの 震源モデルについては,直径数百m,長さ2~3km のピストン状の岩塊が火道内を間欠的に滑り落ちて いき,降下時にピストンがマグマ溜りに押し込まれ ることにより膨張パルスが発生するという「ピスト ン降下モデル」(図8)や,大量の地下水がマグマ の熱で急激に加熱され膨張してパルスを発生させる という「地下水急膨張モデル」(図9)が提案され ている.

- 図7.長周期地震波パルス.最上段は三宅島内の広帯域地震 計の記録,下2段は本州の広帯域地震計(防災科技研) の記録.
- Fig.7. Example of 50s-seismic pulses (2:10 July 14th). KAS: broadband seismometer in the Miyake-jima, JIZ and FUJ (NIED): broadband seismometer in Honshu.



図 6 . 強震データの解析による減衰トモグラフィ . Fig.6. Tomography image obtained from strong motion data.

Source Process of the long-period seismic pulses

Very-long-period seismic pulses (VLP pulses) were observed a few times a day from July 8 to Aug 18, 2000, synchronized with the step-like tilt increase (Fig. 7). The pulse width is 40 to 50 sec and is almost constant regardless their amplitude. The occurrence of VLP pulses completely ceased after the summit eruption on Aug 18. Waveform analyses of these signals show that the source mechanism of these pulses is characterized by large volume expansion of 10^7 m³. Several models have been proposed. One is an intermittent subsidence of a piston in the volcanic conduit (Fig. 8). Another is an underground vapor expansion model (Fig. 9).





- 図8.ピストン降下モデル:(1)マグマの流出によりマ グマ溜り圧が徐々に下がるが,火道との摩擦で支 えられてピストンは動かない.(2)更なるマグマ の流出で火道の摩擦がピストンを支えられなくな り,降下を開始.マグマ溜りへのピストンの突入 に伴い,長周期地震波が発生する.
- Fig. 8. "Piston drop model". Step 1: Pressure in the magma reservoir gradually decreases with steady magma flow from the reservoir. Piston has not yet started descending due to reservoir pressure and friction. Step 2: As reservoir pressure decreases down to some threshold, side friction is not enough to stop the piston from sliding down. The piston slammed into the magma causing reservoir pressure increase which generates a very-longperiod seismic pulse.

稠密GPS観測が捉えたマグマ移動

三宅島では,地下浅部に上昇してくるマグマの動 きを地殻変動からとらえるために,1995年からGPS による観測が行われてきた.観測は毎年行われてお リ,観測点は約45点に及ぶ.うち3点は地震研究所 までテレメータされている連続観測点である.今回 の三宅島における一連の火山活動の期間中にも, GPSによって地殻変動が観測された.最初のイベン トである6月26日に始まった群発地震前後の地殻変 動(図10)からは,山頂直下に存在していたマグマ が阿古地区の地下より西北西方向へ貫入したことが 推定された.また,その後の地殻変動(図11)から は,三宅島の山頂からやや南ないし南西側の地下に 減圧力源が存在していることがわかり,地下のマグ マや地下水の流出過程と関連づけられている.島内

非断層性長周期地震 震源モデル



- 図9.地下水急膨張モデル:(1) 高温部に向かって地下 水が流入し,微小地震が多発する.(2) 急激に熱 せられた水蒸気の圧力が一定値を超え山体が膨張 し,長周期パルスを発生する.(3) 水蒸気が水に 戻る過程で山体はゆっくり収縮する.
- Fig.9. "Underground vapor expansion model". Step 1: The groundwater gradually permeates the cracks under the summit and approaches hightemperature region. Micro earthquakes are triggered at this stage. Step 2: The groundwater is heated into a state of overheating inflation, which causes very-long-period pulse. Step 3: While the expanded steam passes through the cracks, it is cooled into water. Accordingly Mt. Oyama is slowly contracted.

Magma Intrusion inferred from a dense GPS network

To observe crustal deformation in the Miyake Island, GPS observations have been extensively carried out since 1995. Total number of observation points is about 45. Three permanent stations were deployed and the data are collected through public telephone lines every morning and store on a hard-disk of a Unix machine. On June 26, 2000 we can detect the magma intrusion in Ako region in the Miyake Island accompanied with the earthquake swarm using GPS data (Fig.10). The crustal deformation accompanied with the summit collapse was observed in July (Fig.11). To check how crustal deformation occur automatic GPS analysis system was constructed. On this system GPS RINEX data are gotten from the Unix machine and then are analyzed by Bernese

期間

M103-M248: Aug.28/29, 1999 - Jul. 1/2, 2000 SMY2,CND,AKO,SBN: Aug.28/29, 1999 - Jul. 1/2, 2000 LNC,IZM,JGK,MAP,SAN: Aug.28/29, 1999 - Jul. 1/2, 2000 ST2: Aug.28/29, 1999 - Jul. 10, 2000 MSN: Aug.28/29, 1999 - Jul. 12, 2000



図10.GPS測量から明らかにされた2000年6月26日の群 発地震発生前後の地殻変動.矢印は水平変動,色 およびコンターは上下変動を表す.

Fig.10. Crustal deformation detected by GPS observation on June 26, 2000. Arrows show horizontal displacements. Vertical displacements are indicated by contour lines and color.

の地殻変動がどのように変化しているかを知るため に、1日1回起動されるGPS観測データの自動解析 システムを構築した.解析はBernese GPS Software Ver.4.2 BPEを用い、4時間毎にデータを 区切って行い、結果をホームページで閲覧できるよ うにした.

重力場の時空間変動

2000年6月の三宅島火山活動開始以降,10ないし 30日に1度の割合で,絶対重力測定と相対測定と組 み合わせた,いわゆるハイブリッド測定を世界に先 駆けて実施した.観測の結果,2000年7月6日には, 山頂部に約150マイクロガルの重力減少域を検出し, 山頂直下の空洞生成の兆候をとらえた(図12a). そ の2日後の7月8日には,果たして山頂カルデラが 一気に200メートル以上も陥没するというイベント が発生している. 陥没後まもない7月11日の再測定 では,わずか5日の間に山頂部で1100マイクロガル も重力が減少していることを見出した(図12b). この変化は当初の山頂陥没だけでは説明がつかない ことを報告し,山頂直下に1億立方メートル以上の 空洞がさらに生じていることを指摘した.この指摘 どおり,山頂部は陥没を続け,8月末には6億立方 メートルもの山頂部の陥没が実際に起こっている.

期間 M103-M248: Jul. 1/2 - Aug. 5/6 SMY2,CND,AKO,SBN: Jul. 1/2 - Aug. 5/6 LNC,IZM,JGK,MAP,SAN: Jul. 1/2 - Aug. 5/6 A008,NGO1,NGO2,NGO3,NGO4,ST2: Jul. 10 - Aug. 5/6 MSN: Jul. 12 - Aug. 5/6 補足:7月31日の地震による変動を補正.



- 図11.GPS測量から明らかにされた2000年7月から8月に かけての地殻変動.矢印は水平変動,色およびコ ンターは上下変動を表す.
- Fig.11. Crustal deformation detected by GPS observation in July, 2000. Arrows show horizontal displacements. Vertical displacements are indicated by contour lines and color.

GPS Software Ver.4.2 BPE. Then the result of the analysis are upload on the Home page of our institute.

• Spatio-temporal Gravity Variation associated with Volcanic Activity

Since the onset of volcanic activity of the Miyake-jima volcano, Japan in June 2000, we have been carrying out frequent (once per 10 days) gravity measurements around the volcano. Combined use of an absolute gravimeter FG5 with two LaCoste-Romberg gravimeters enables us to trace the accurate and high-resolution spatio-temporal gravity variation caused by the event. It exhibits a peculiar and informative spatial pattern for each volcanic phase.

<Phase 1> (intrusion and pre-collapse): Dyke intrusion associated with deflation of a deep magma chamber clearly left gravity increase exceeding 100 microgals around the supposed dyke. We also find 150 microgals decrease on the caldera floor that was destined to collapse in two days after our measurement (Fig.12a). The signal can be well modeled in terms of a cavity created at 2 km beneath the caldera.



図12.三宅島火山の重力変化.単位はマイクロガル.

- (a)噴火前の1998年6月-2000年7月6日までの変化.山頂部の150マイクロガルの減少は陥没の前兆.
 - (b)7月8日の陥没開始をはさむ前後数日(7月6日-7月11日)の重力変化.山頂部で1000マイクロガルを超える超 ド級の変化は,陥没の一層の進行を指し示す.
- Fig. 12. (a) Telltale gravity decrease originates from the cavity growing beneath the caldera.
 - (b) Extraordinary gravity change exceeding 1000 microgal suggested ever growing caldera collapse since July to Aug. 2000.

以上のことから,火山活動推移を予測する上で,高 頻度ハイブリッド重力測定がきわめて有効であるこ とが実証されたと考えている.また,2000年8月ま での絶対重力測定の解析から,三宅島のマグマは山 頂直下にドレインバックしたのではなく,神津島周 辺の群発地震域にマグマが吸い出されていったと考 えるほうが合理的であるとする結果を得た.

2000年10月前後から三宅島では停電が続いている ため,途絶えている地殻変動観測も少なくない.こ の間もハイブリッド重力測定は毎月1度というペー スではあるにしても,火山活動推移予測の基礎デー タを提供しつづけている.

火山を透視する電磁気観測

三宅島においてはプロトン磁力計8点,短基線自 然電位計3点,NTT電話回線を利用して島内9ヶ 所の電極を結んだ長基線自然電位計測,という電磁 気連続観測を1995年から開始した.また自然電位の 面的測量とMT法による比抵抗構造探査を,全国大 学およびフランスLGO-OPGC,アメリカUSGSの研 究者達と共同で実施してきた.

- 1996年7月頃から2年間,雄山山頂と南斜面の 全磁力がそれぞれ増加および減少を示した(図 13).山頂カルデラの南縁直下700mあたりで, 熱消磁が起こっていたと推定される.
- 2) 2000年7月8日の水蒸気爆発に伴う山頂陥没は, わずか4分以内に完了したことが全磁力観測か ら確認された.7月1日から当日の陥没まで,

<Phase 2> (implosion): The summit caldera steadily continued to collapse in 2 months (from July 8) to have a diameter of 1500 meter or more with depth of 450 meter in September 2000. The loss of mass (exceeding 1.200 billion tons) caused systematic gravity decrease exceeding 1100 microgals (Fig. 12b).

<Phase 3/4> (explosion/degassing): The gravity measurement continued to provide information on volcanic activity since September 2000, when crustal deformation observations suffered from problems of power supply and telecommunication systems; the Miyake-jima island was evacuated in early September 2000.

Electromagnetic observations

- The geomagnetic total intensity observation revealed a paired anomalous change, at OYM and TRK since mid-1996 (Fig. 13). This was ascribed to thermal demagnetization at a depth of 700 m beneath around the southern rim of the summit caldera.
- 2) Total intensity data indicated that the initial sinkhole was formed within 4 minutes at the time of the steam explosion on July 8. Magnetic data suggest that a nonmagnetic area (i.e. vacancy) was generated initially at a depth of 2 km and moved toward the summit.
- 3) SP variations very similar to the velocity waveform of VLP pulses were observed, together with step-like changes in the total intensity. SP changes are

三宅島の南北中心軸に沿ったプロトン磁力計は, 顕著な全磁力変化を示した.これらの変化は磁 化消失領域(空洞)が,山頂の直下2kmあた りから次第に上昇して行ったことを示す.

- 3)7月8日以降に発生するようになった傾斜ステ ップに伴い,広帯域地震計の速度波形とそっく りな自然電位の変化が長基線電場に,また傾斜 計(地震計変位)記録と同様な全磁力の段差状 変化が,いずれも繰り返し観測された.このこ とは水蒸気あるいは水が膨張力源から周囲に, 強制的に注入され拡散していることを強く示唆 する.
- 4)7月8日以降,島内の各所で全磁力が大きな変 化を記録した(図14).島の東西での全磁力の 増加,南北中心軸での減少が特徴である.そし て8月18日の大規模噴火を境に,変化が横ばい になった.また,噴火時に自然電位分布が大き く変化したところから,三宅島火山内部に存在 した大規模な熱水対流系が,この噴火で大きく 変化した可能性がある.

- 図13. 三宅島火山の全磁力変化(1995年10月 2000年5 月). 柿岡(KAK)を基準とした単純差の5日平均. 雄山(OYM)は山頂カルデラ内に,また大路池北 (TRK)は雄山の南山腹に位置する.
- Fig.13. Changes in the geomagnetic total intensity in Miyake-jima volcano (Oct., 1996 - May, 2000). 5day means of simple differences relative to KAK are plotted. OYM is located in the summit caldera, while TRK on the southern slope of the central cone Mt Oyama.

attributed to the movement of water, while the magnetic field to the piezomagnetic effect. SP variations strongly suggest that the forced injection of vapor and/or water should take place into the surrounding rocks around the source of the VLP pulses.

4) Since July 8, the total intensity showed a large amount of changes at several stations and it became flat after the largest eruption on August 18 (Fig. 14). The model estimate by approximating the hole as a demagnetized disk cannot fully explain the observations: Thermal demagnetization at depth should have proceeded until August 18 and then it weakened. A large-scale hydrothermal system might have collapsed by the Aug. 18 eruption, as inferred from changes in SP during the eruption.



- 図14. 三宅島の代表的な観測点の2000年6月から12月ま での全磁力変化. 八ヶ岳(YAT)を基準とした単純 差日平均. KNS, RES, TJMは島の東西に位置し, KMU, TRK, TARは島の南北中心軸沿いに分布し ている.
- Fig.14. Changes in the total intensity at representative stations on Miyake-jima island (June - Dec., 2000). Daily means of simple differences relative to YAT are plotted. KNS, RES and TJM are located on the east and west sides, while KMU, TRK and TAR along the central N-S line of the volcano.

7-4.2000年鳥取県西部地震

2000年10月6日,鳥取県西部を震源とするM7.3 (暫定値)の地震が発生した.2001年1月16日までの 余震分布を図1に示す.京都大学および防災科学技 術研究所のデータを統合して震源決定を行なった. 余震分布は,北北西-南南東走向に長さ約30km,深 さ約15km以浅に拡がっている。本震の震源は,約 5kmに決定されている.図中DATは,精細な地殻 構造やメカニズム解などを明らかにするために,鳥 取県西部合同地震観測グループにより設置された DAT方式の臨時観測点である.

鳥取県西部地震の破壊過程を,震源域近傍の強震 記録から逆解析により求めた結果を図2に示す。断 層面は、震源より南側で走向N142 E,長さ14km, 幅13kmを,北側で走向N158 E,長さ16km,幅 13kmを想定して解析した。大きな滑りを起こした 領域は震央付近の深さ2kmから6kmに位置してお り,最大すべりは4mである。この地震の地震モー

7-4. 2000 Tottoriken-Seibu earthquake

The 2000 Tottoriken-Seibu earthquake (M7.3, temporally determined) occurred on October 6. Figure 1 shows an aftershock distribution from Oct. 6 to Jan. 16, 2000, located by the combined DPRI's data(KYT) with Hi-net. The aftershock distribution was about 30 km long in the direction of NNE-SSW, and shallower than 15 km. The mainshock hypocenter was determined at a depth of about 5 km. Yellow circles indicate the temporal microseismic observation stations installed by the Japanese university group of the urgent joint observation for the 2000 Tottoriken-seibu Earthquake in order to investigate precise crustal structure and focal mechanisms and etc..

The rupture process of the Tottoriken-Seibu earthquake is revealed using strong motion seismograms installed around the source region. The spatial distribution of final slip is shown in Fig. 2. The fault plane on the south side of the epicenter has 14 km long and 13 km wide with the strike of N142°E, and that on



図1.鳥取県西部地震の余震分布図(2000年10月6日~2001年1月16日)。京都大学(KYT)、防災科学技術研究所(Hi-net)の データを統合して震源決定を行なった.

Fig.1. Aftershock distribution of an earthquake of October 6, 2000 in the Western Part of Tottori Prefecture (Oct. 2000 - Jan. 2001). The aftershocks were located in shallower than 15 km by the combined DPRI's data(KYT) with Hi-net.

メントは1.2 x 10¹⁹ Nmである。

余効性地殻変動を観測するために地震発生から5 日後の10月11日から12月27日まで地震研究所で開発 した1周波受信機を用いてGPS観測を行った.観測 点は地震断層に直交するような直線状とし,震央の 位置を中心とし断層の西側,東側にそれぞれ4点ず つ設置した.観測点の間隔は500mから1200mであ る.図3に観測点の位置と各観測点の水平変動を示 す.地震時の変位と同じ向きの余効変動が観測され た. the north side has 16 km long and 13 km wide with the strike of N158°E. The large slip area lies around the hypocenter with the depth of 2 km to 6 km deep. The largest slip and the seismic moment are 4m and 1.2×10^{19} Nm, respectively.

To observe the postseismic deformation we deployed newly developed one frequency GPS receivers from October 11 to December 27, 2000. The linear GPS array was constructed around the epicenter and it is perpendicular to the aftershock distribution. Figure 3 shows the average horizontal displacement from October 11 to November 2, 2000. The postseismic deformation was observed.





Fig.2. Rupture process of the Tottoriken-Seibu earthquake viewing from the west.



- 図3.10月11日から11月2日までの各観測点の平均的な 水平変動ベクトル.
- Fig.3. Average horizontal deformation vector between October 11 and November 2.

8.研究部門,センター紹介 Research Activities of Divisions and Research Centers

8-1. 地球流動破壊部門

本部門では,地震・火山に関連した現象を,地球 内部の流動・破壊現象としてとらえる視点に立って, 観測,実験,および理論的研究をおこなっている. 最近の主な研究を紹介する.

固体液体集合体の力学的性質

岩石の流動・破壊現象には水やメルトなど流体の 存在が大きな影響を与えている.地球の流動や地震 の発生における流体の役割を解明し,また,地震波 を用いて地球内部の流体を検出するための基礎とし て,固体-液体集合体の力学的的性質を理論的考察 と室内実験により研究している.本物の岩石を用い る溶融実験は千度C以上の高温を必要とする非常に 難しい実験であるが,本研究ではマントルの岩石に 良く似た性質を持つ有機物のアナログ物質を用いる ことで実験を簡単化することに成功し,他の実験グ ループに負けない精度の良い実験を行なっている.

揮発性元素による惑星物質科学

揮発性元素のひとつである希ガスは、化学的に不 活性なため物理的プロセスを探求するのに有用なト レーサーである.地球および地球外物質中の希ガス 濃度・同位体組成を調べることにより、マグマ活動 における物質移動や熱史に関する制約,地表におけ る浸食レートの推定、小惑星や火星上での火成活動 史や地球外物質の起源の解明、などの研究を進めて いる.また,K-Ar年代やPu-Xe年代を通して火山活 動や惑星形成に関する年代学的研究も行っている.



- 図1.希ガス分析試料の例.(a)マントル起源希ガスを含 むかんらん石試料.写真横幅は約6mm.(b)石鉄隕 石(かんらん石とそれを取り囲む鉄ニッケル合金 から成る).写真横幅は約3cm.
- Fig.1. Samples we analyzed for noble gases. (a) olivine with mantle-derived noble gases. Photograph is 6 mm wide. (B) stony-iron meteorite (olivine is surrounded with Fe-Ni metal). 3 cm wide.

大規模活断層系の地震評価手法の確立

糸魚川 - 静岡構造線活断層系など,複数の断層か ら構成される大規模な横ずれ断層系からは,M8級

8-1. Division of Earth Mechanics

This division performs integrated studies on earthquakes and volcanoes with the view that earthquake and volcanic processes are flow and fracture phenomena in the Earth. Recent projects are outlined below.

Mechanical Properties of Solid-liquid Composites

Mechanical behaviors of solid-liquid composites are studied both theoretically and experimentally. Special attention is paid to the partially molten rocks and rock plus fluid systems kept at elevated temperatures, which are characterized by the reaction rate rapid enough to achieve textural equilibrium. Experimental studies on the acoustic wave propagation and the development of stress-induced anisotropy in partially molten media were performed using an analog sample (a binary eutectic system of organic compounds), which partially melts near room temperature.

Noble gas Geo-/cosmo-chemistry

Noble gases are useful tracers of physical processes because they are little influenced by chemical processes. Isotopic compositions of noble gases in terrestrial and extra-terrestrial materials are analyzed to study their origins, mechanism of magmatic differentiation processes, thermal histories, and surface erosion rates. Chronological studies using K-Ar and Pu-Xe methods have also been carried out for clarifying volcanism and planetary formation.

Seismic Risk Assessments for Large Active Fault Systems

To evaluate the seismic risk caused by a large active fault system, such as the Itoigawa-Shizuoka Tectonic Line, we study fault segmentation using paleoseismological data, and propose the new evaluation method. For example, the 1999 Izmit and Duzce earthquakes, which occurred on the north Anatolian fault system, give us the opportunity to examine if the fault system has behaved simply or complicatedly through the seismic cycle. We thus perform trench excavations across the north Anatolian fault system to reveal the paleoseismic behavior.

Recurrence of Large Earthquakes

To estimate magnitude of large paleoearthquakes, we

の内陸地震の発生が懸念されている.1999年にトル コで発生したM7.4イズミット地震,M7.1デュズジ ェ地震は,北アナトリア断層系の活動によるもので あるが,一度に長大な区間が活動せずに,時間をお いて連鎖的に活動した.当部門では,横ずれ断層系 の大地震の繰り返し発生挙動を解明するために,北 アナトリア断層系でトレンチ掘削調査を行い,過去 の地震発生パターンと1999年の地震発生パターンと の類似や相違を調査している.

大地震の繰り返し発生

活断層から発生した過去の地震規模を知るために は,地震の際のずれの量を検出する必要がある.当 部門では,地層抜取装置と考古学的掘削手法を組み 合わせることによって,地層に記録された過去の地 震のずれの量を3次元的に検出する手法を開発して いる.そのケーススタディサイトとして丹那断層 (静岡県函南町田代地区)を選び,841年および1930 年北伊豆地震の地震一回分の横ずれ量をそれぞれ復 元した.また,活断層から将来発生する地震規模の 予測のために,活断層の長さとそこで起こった歴史 地震の規模を比較した.

地表地震断層問題

直下地震の脅威の一つに,地表地震断層の形成に 伴う大変形がある.地震断層の発生や変形を予測す るため,断層形成過程の数値シミュレーションの開 発を試みている.

モデル実験によって明らかにされた形成過程のメ カニズムに基づき,地表構造の不確定性や断層のば らつきを考慮した確率有限要素法を構築中である.

断層進展問題

断層進展挙動の支配メカニズム解明を目指して, 物質内部での応力場を非接触・非破壊で計測する手 法を開発中である.この手法を用いてモデル実験を 行い,断層において不安定かつ三次元的に成長する 破壊過程を解析する.現在までに実験装置の基本部 分の開発を終え,計測データから応力場を得るため の解析手法を開発中である.

群発地震および余震活動予測評価手法の開発

大規模なマグマ活動や大地震によって周辺の応力 場が変化し,地震活動がそれに伴って変化する.顕 著な群発地震活動や余震活動などがその例である. したがって,事象発生後の応力場の変化を即座に計 算することにより,今後の地震活動度の変化を予測 することが可能である.当部門では,1999年トルコ イズミット・デュズジェ地震,2000年伊豆諸島群発 地震,2000年鳥取県西部地震等において,事象発生 後1~3日中に応力場の変動を計算し,その後の地震 need to know the amount of displacement due to the surface faulting by an earthquake. We have designed a new excavation technique which combines threedimensional archaeological trenching and soil sampling by Geoslicer. Using this technique on the Tanna fault, central Japan, we have found the offsets caused by the most recent 1930 Kita-Izu earthquake and penultimate event in the sediments. Further, we compared the size of a historical earthquake which took place on an active fault with the length of the fault for forecasting the size of a future earthquake which will take place on an active fault.

Surface Earthquake Fault Problem

The formation of surface earthquake faults is a fatal hazard to nearby structures. For a reliable prediction of such surface faults, we are developing a numerical



- 図2.2000年伊豆諸島群発地震活動期間中に深部のダ イク貫入により横ずれ断層に加わった剪断応力速 度(深度4kmでの計算値).約2ヶ月間の地震は 応力速度の大きな地域に分布する.この地域の通 常の応力速度は約0.1bar/年と推定され,活動期 間内に地震発生域には数百~数千倍もの応力が加 わっていたことがわかる.地震活動度もこれに比 例して増加し,通常の数百~数千倍になった.
- Fig.2. Calculated shear stressing rate due to a dike inflation and observed seismicity during the 2000 Izu Islands swarm events (June 26- August 23). Most of the strike-slip shocks have been triggered by the sudden jump of the loading rate. We found that the seismicity rate proportionally increased with the shear stressing rate.

活動予測を試験的に行った.現在,これらのケース スタディを通じて評価手法の妥当性や有用性を検討 している.

地震・火山活動予測と変動検出

地震および火山活動の経過を力学的な視点や確率 過程としての視点から分析し,2000年伊豆諸島の地 震の活動予測や鳥取県西部地震の余震頻度の予測を 試みるなど,活動を予測する方法について検討して いる.また,必要に応じて時間差実体視法を利用し た地殻変動検出にも努め,2000年有珠山噴火では, 西側山麓における顕著な隆起をいち早く明らかにし た.

プレート衝突帯におけるひずみ蓄積過程のモデル化

プレート運動によって,プレート境界ではひずみ が年々蓄積していく.食い違い理論を用いて,衝突 境界でのひずみ蓄積を始めて定式化した.東西から のプレート衝突による本州中央部での変形を理論的 に求めた結果,GPS観測結果を良く説明することが わかった.



Tension Crack

- 図3 プレート衝突帯におけるひずみ蓄積の重ね合わせ モデル.中段のプレートの剛体運動を維持するに は,物質除去が必要であり,除去された物質は, 下段の割れ目破壊に充填される.
- Fig.3. Superposition model of strain accumulation at a collision zone. Removal of excess mass is necessary to maintain a rigid plate motion, which is compensated by a tensile crack dislocation.

simulation tool that is based on the mechanisms that is clarified in model experiments. The simulation uses a stochastic finite element method to account for the uncertainty of underground structures and the variability of the fault.

Fault Evolution Problem

New non-destructive, no-contact measuring method for 3D stress field in materials is being developed. This method is intended to serve as a tool for revealing the governing mechanism of the fault behavior. Unstable, three dimensional evolution of the fault surface can be analyzed by this method. Currently, experimental setup has been completed and analysis method for identification of the 3D stress field using experimental data is being developed.

Development of Earthquake Forecast System for Swarm and Aftershock Activity

Seismicity succeeding to a significant volcanic event or large earthquake corresponds to the static stress changes due to the event. We intend to implement the relationship between stress change and seismicity rate change into the long-term probabilistic earthquake forecast. To test our method, we have calculated the stress changes and evaluated seismicity rates after or during the 1999 Izmit and Duzce shocks, 2000 Tottoriken-seibu earthquake, and 2000 Izu Islands earthquake swarms.

Prediction of Seismic and Volcanic Activities with Crustal Deformation Survey

On the mechanical and probabilistic viewpoints, seismic and volcanic activities are analyzed to find available methods for prediction: e.g. the activity of the 2000 Izu Islands earthquakes and the frequency of the aftershocks of the 2000 western Tottori Prefecture earthquake. Also we tried to obtain crustal movements using time-differential stereoscopy. At Usu volcano, remarkable uplift was detected in the western foot of the mountain within several days after the commencement of the eruption in 2000.

Dislocation Model for Strain Accumulation at a Plate Collision Zone

Strain accumulation process taking place in a zone of plate collision is formulated with dislocation models. The theoretically calculated result reproduces well the result of GPS observation in a central part of Honshu, Japan.

地殻変動モニタ

地殻変動モニタは,時々刻々と変化する列島各地 域のひずみと応力を調べるものである.常時計測さ れるGPSデータを利用して地域の平均的なひずみ を計算するとともに,新しい逆解析手法を適用して 応力の分布を推定する.モニタが提供するひずみと 応力のデータを基に,より信頼度の高い列島の物理 モデルを構築し,地殻変動や地震発生のシミュレー ションに利用する予定である.

高分解能都市強震動シミュレータ

都市の防災や危機管理を立案するためには,強震 動を高い分解能で予測する技術が必須である.階層 型解析理論に基づき,高い時空間分解能を持つ新し い強震動シミュレータを開発中である.これは,断 層破壊から個々の地点での揺れという一連の地震過 程を計算するもので,最新の数値解析手法を適用し, 高精度化を図っている.横浜市を対象としたシミュ レーションでは観測データの良好な再現に成功して いる.

Crustal Deformation Monitor

The crustal deformation monitor is to examine the strain and stress state over the Japanese Islands which change daily and yearly. The monitor calculates regional average strain and estimate regional stress applying new inverse analysis methods. The data provided by the monitor will be used to construct a reliable model of Japan, as well as to simulate future crustal deformation and earthquake events.

Strong Motion Simulator for Metropolis

The prediction of strong motion is essential for the hazard mitigation and the emergency control. We are developing a new analysis tool of the strong motion with the aid of multi-scale analysis theory. The tool is to simulate the whole processes of an earthquake, i.e., from a source fault to a target point. Data measured at Yokohama City are well reproduced by the analysis tool, with sufficient spatial and time resolution.

8-2.地球ダイナミクス部門

本部門は,地震・火山などに関連した現象を,地 球全体からみた視点において明らかにすることを目 的として,理論,データ解析,観測,室内実験等の 方法を用いて総合的な見地から探ることを行っている.

地球テクトニクス分野では,地球表面の各所でお きる多様なテクトニクスをグローバルな地球内部変 動の視点から理解することを研究目標としている. 地球内部の熱の排出にともなってなされる仕事の地 表への現れがテクトニクスであるが,現在の地球で はこれはプレートテクトニクスの形態をとっている と考えられている.プレートテクトニクスは,プレ ート境界が力学的に弱いことで特徴づけられるが, その場合プレートをのせたマントル対流の形態は一 様粘性の対流の形態に近い.しかし実際のプレート に働いている力を地震のメカニズムなどから見てみ ると,これからはずれることが多い.そしてはずれ る場合に大陸分裂や背弧海盆拡大など活発なテクト ニクスが起きている.このことは,むしろプレート テクトニクスからのずれが多様なテクトニクスをも たらしていることを示唆している(図1).現在の 研究テーマは次の通りである.1)日本付近のプレ ート運動,2)プレート・スラブ内応力場,3)プ レート運動原動力,4)スラブ地震の発生メカニズ ム,5)太古代のテクトニクスと環境変動.

マグマ学分野では,岩石学や高温高圧実験(図2) の手法を用いてマグマに関する研究を行っている. 個々の火山におけるマグマ組成の変遷を解明するこ とによって,その火山で将来起こりうる噴火の様式 を予測するための重要な手がかりが得られる.また, 火山活動の源となるマグマの一部は上部マントルの 部分溶融により生成され,部分溶融の程度や深さの 違いなどによって多様性が生じているため,このよ うなマグマの研究を通じて地球内部の温度条件や化 学組成などを推定することができる.さらに地球初 期には地球の表面を覆う深いマグマの海が存在し, このマグマの海における結晶・固化の過程で現在の 地球内部構造の大局が形成されたと考えられている



8-2. Division of Global Dynamics

In this division, we are investigating the mechanism of phenomena related to earthquakes and volcanism on a global scale based on theoretical, observational, and experimental studies, including data analyses and laboratory work.

In the Global Tectonics Group, the aim is to reveal origins of various types of tectonics on the Earth's surface from the viewpoint of the global dynamics of the Earth's interior. Tectonics is the surface expression of the mechanical work done in association with the evacuation of the heat generated within the Earth's mantle. It is believed that the tectonics of the present Earth has a form of plate tectonics. Plate tectonics is characterized by weak plate boundaries, and in this case, the form of the mantle convection with plates is close to the convection of a fluid with uniform viscosity. However, the actual states of stresses within plates indicate that this is not the case; in many cases, the convection style deviates from the uniform viscosity one. Active tectonics, such as the continental drifts and back-arc spreading, is seen in such cases. This indicates that the deviation from plate tectonics is rather the cause of the various active tectonics seen on the Earth's surface (Fig.1). The following themes are currently investigated: (1) Plate motions around the Japanese islands, (2) stresses within plates and slabs, (3) driving forces of plates, (4) mechanisms of slab earthquakes, and (5) Archean tectonics and evolution of environment.

In the Magma Research Group, various studies on magmas have been conducted based on field studies and high pressure experiments (Fig.2). Temporal variations in magmatic composition of several active volcanoes have been studied to understand the mode of their future eruptions. Studies on the genesis of primary magmas have been conducted to understand the thermal condition and

- 図1. テクトニクスの三つの形態:(a),(a')スラブ引っ ぱり力が大きく衝突力と釣り合っている.(b)負の スラブ引っぱり力=スラブ押し力が海洋プレート の駆動力とつりあっている.(c)プレートはスムー スにマントル対流とともに循環しており,定常的 な島弧変動が起きる.地表でめぼしいテクトニク スが起きるのは(c)からのずれがある場合である.
- Fig.1. Three categories of tectonics (a) and (a') Slab pull force is dominant and balanced with the collision force. (b) Negative slab pull force is balanced with the mantle drag force beneath the oceanic plate.
 (c) Plate recycles in a smooth way along with the mantle convection, and normal island arc tectonism occurs in the upper plate. Non-trivial tectonics occurs in the cases other than case (c).



ので,地球の進化を理解するためにも,さまざまな 圧力におけるマグマの挙動を理解することが不可欠 である.以上のような観点からマグマに関する様々 な研究を行ってきた.地球内部では水がマグマに似 た振る舞いをすることを最近発見したので,高圧下 での水も主要な研究対象となっている.最近の研究 テーマとして次のようなものがある.(1)デカン 洪水玄武岩の調査・研究.(2)洪水玄武岩マグマ の発生に関する実験的研究.(3)マントル物質と 共存する水の化学組成とその挙動.(4)伊豆大島 火山,浅間火山,三宅島火山等のマグマ組成の変遷. (5)島弧マグマの結晶過程における水の役割.(6) 三宅島2000年噴火マグマの岩石学的研究.

地球物質進化学分野では, グローバルな規模で生 じる火山活動や地球深部における揮発性元素の存在 とその役割,物質循環を含む地球内部での物質移動 などやそれらの過程を明らかにすることを通じて, 地球における物質進化を解明することを目指してい る.地球内部における揮発性元素の存在がマントル 物質などの物性に与える影響は大きく,その存在度 や化学・同位体組成などは地球の進化過程を強く反 映している.地球物質の進化の過程を明らかにする ため,岩石や鉱物の化学・同位体(希ガス,ベリリ ウム10/ベリリウム9)組成,放射年代(カリウム ーアルゴン、アルゴンーアルゴン、放射性炭素14法), 鉱物組成の解析などを手段として,各種の噴出岩や 捕獲岩として得られるマントル構成岩石・鉱物,さ らには地球初期物質の状態を推定するために隕石な どの地球外物質なども対象として研究を行っている (図3).現在は以下のような課題を分野としての研 究テーマとして研究を行っている.1)地球内部の 揮発性元素の存在と地球進化との関係,2)キンバ ーライト中の揮発性元素の成因,3)ホット・スポ ット火山とマントル・プルームとの関係,4)地球 内部における物質循環と地球内部の化学的構造,5) 洪水玄武岩の生成とマントル・プルームの関連,6) 拡大系における地球内部からの物質移動とその化学 的特徴,7)ベリリウム10を用いた日本列島下のマ グマへの堆積物の寄与の実証.

地球化学グループは,火山の諸現象や地球の物質

- 図2 超高圧発生装置 (PREM).内部に8個の超硬合金製のア ンビルが組み込まれており,中心部の2-10mm³の正八 面体の容積に25GPaまでの圧力と2500℃までの高温 を発生できる.
- Fig.2. Ultra-high pressure apparatus (PREM). By assembling eight anvils made of WC, it can generate pressure up to 25 GPa and temperature up to 2500°C in the octahedral volume of 2-10 cubic milimeters at the central part.

the chemical composition of upper mantle. Experimental studies on magmas at high pressures have also targeted to understand the crystallization process of the magma ocean in the early stage of the Earth. As we recently found aqueous fluids behave like magma at high pressure, aqueous fluids in mantle condition became our research targets. Our recent research themes are as follows. (1) Study on Deccan flood basalts, (2) Experimental study on the genesis of continental flood basalt magma, (3) Experimental study of the composition and the behavior of aqueous fluid in the mantle, (4) Temporal variations of magmatic compositions of Izu-Oshima, Asama, and MIyake-jima volcanoes, (5) Role of water in the crystallization of island-arc magmas, (6) Petrological study of Miyakejima 2000 eruption.

In the Group Researching the Evolution of Terrestrial Materials, the aim is to reveal the evolution of the Earth through the study of volcanism on a global scale and the role of volatile elements in the Earth's interior. Since the presence of volatile elements in the mantle will affect the characteristics of mantle materials seriously, it is important to examine the present and the past states of volatile elements in the Earth's interior, which has not well been studied. To reveal such points, chemical and isotope (noble gases, ¹⁰Be/⁹Be) compositions, radiometric



図3.希ガス同位体分析用質量分析計(VG5400). Fig.3. Noble gas mass spectrometer (VG5400).

循環・進化などを探求する研究を,行っている.現 在の中心課題は1)マグマの発生から移動の諸現象 にタイムスケールをつけることと,2)火山岩中の 微小部分,例えば個々の斑晶鉱物やメルト包有物, 更には鉱物結晶の累帯構造の各部分に残された記録 を読みといて,マグマの生成から移動,マグマ溜り 内での貯留,さらに噴火にいたるメカニズムを解明 することである.1)についてはウラン238放射壊 変系列の核種の放射能非平衡現象を利用した研究を 行っている.島弧の火山活動は沈み込むスラブから の脱水が重要な寄与を果たしていると考えられてい るが,その際に初生マグマに流体とともに移動しや すいウランが付け加わる.こうして生じたウラン 238-トリウム230間の放射非平衡を利用すればマグ マが生じてから地表に達するまでの時間に制約をつ けることができる.本所に設置された多重検出器磁 場型ICP質量分析計(図4)による,ウラン238-ト リウム230放射非平衡の分析技術を確立した.本法 を伊豆島弧をテストフィールドとして適用する研究 を開始した.2)についてはレーザーアブレーショ ンICP-MSによる微量元素分析技術を確立するとと もに, 班晶の微小部分の同位体測定技術を開発して いる.これらを雲仙の試料に適用し,マグマ溜まり の化学進化の解明に用いる研究を行っている.その 他に沈み込み地域での物質循環の解明のためにリチ ウム,鉛同位体をトレーサとした研究を目的として 分析技術の開発を行い手法を確立した.また初期地 球におけるコマチアイトの成因を考察するための Lu-Hf同位体トレーサ系の分析技術,コア マント ル相互作用を検証することを目的とした白金族元素 の微量分析技術の開発にも取り組んでいる.



- 図4.磁場型ICP質量分析計(Micromass IsoProbe)のイ オン源.本装置をTh, Pb, Li, Srなどの同位体測定 に使用している.ICPイオン源により10ng程度の 微量トリウムの同位体測定が可能になった.
- Fig.4. Ion source of Inductively Coupled Plasma Mass Spectrometer (Micromass IsoProbe). This massspectrometer produces precise isotopic data for Th, Pb, Li, Sr and other elements.

The ICP ion source of this mass spectrometer enabled isotopic analysis for small amount of thorium (10ng). (K-Ar, Ar-Ar, ¹⁴C) ages, and mineral compositions have been investigated for mantle-derived rocks and minerals, in addition to extra-terrestrial materials (Fig.3). The following themes are being investigated at present: (1) Present state of volatile elements in the Earth's interior, (2) Origin of volatile elements in kimbelites, (3) Relationship between a hotspot volcano and a mantle plume, (4) Recycled materials in the Earth's interior and the chemical structure of the Earth, (5) Relationship between plateau formation and mantle plumes and formation ages of plateaus, (6) Material transfer and chemical characteristics at a spreading system, (7) Verification for the contribution of sediments to the arc magma under the Japanese Islands based on ¹⁰Be.

In the Geochemistry Group, we investigate the geochemical evolution of the earth and material transfer including phenomena related to volcanic activity. Our current main topics are 1) to put geochronological constraints on the time scale of volcanisms in subduction zones, and 2) to reconstruct the course of the chemical evolution of a magma, during production, as well as the transportation, and the eruption of magma by microanalytical techniques to read geochemical records in volcanic products. We will tackle the first target by uranium radioactivity disequilibrium method. It is considered that magmatism in subduction zones is triggered by addition of fluid expelled from a subducting slab. The addition of uranium by the dehydration events forms radioactivity disequilibrium between ²³⁸U and ²³⁰Th. Taking advantage of the phenomenon, we can put constraints on the time scale of magma movements from magma formation to eruption. We have established a procedure to analyze the radioactivity disequilibrium by using an multi-collector Inductively Coupled Mass Spectrometer (MC-ICP-MS) installed in ERI (Fig.4). We just started to apply this method to Izu arc as a test field. For the second target, we have established analytical protocols for trace elements by a Laser Ablation system coupled with an ICP-MS. We also established a microdrilling technique for Sr isotopic analysis in a plagioclase phenocryst. We applied the two techniques to plagioclase samples extracted from volcanic products from Unzen. Apart from the two projects, we established analytical schemes for Li and Pb isotopic analysis. Two elements will work as powerful tracers to investigate material transfer in subduction areas. In addition, we have undertaken the developments of analytical procedures for Hf isotopic analysis to investigate genesis of Archean komatiites and of Platinum Group Elements analysis to investigate core-mantle interaction.

新たな地球計測機器の開発

(1) レーザー干渉を利用した観測機器

新しく高性能・高信頼度の測器が開発されたとき, 新しい地球物理学の研究分野が開かれる.この信念 のもとに,われわれが新たに開発した機器の一つが 「マイケルソン型レーザー干渉式広帯域短周期地震 計」である(図1).千分の一秒という短周期の振 動まで見逃さぬよう,1kHzまでもの平坦な出力特 性を誇っている(図2).われわれはさらに,レー ザー歪計や海底傾斜計, 六成分地震計等の開発を進 めている.



図1.マイケルソン型レーザー干渉式広帯域短周期地震 計.

Fig.1. Wideband short-period seismometer using a Michelson laser interferometer.

(2) ACROSS(精密制御回転震源による地下トモグ ラフィ)の開発

精密な調和弾性波を用いたトモグラフィ技術を開 発している.このシステムは震源のフェイズドアレ イと地震計アレイから成る.震源を回転する偏心質 量によって実現し,堅固な地面または地下に固定す る. 偏心質量は精密なサーボモータで駆動され,回 転周波数を精密に一定に保つ.全体としてコヒーレ ントな波動場を作り出し,震源の位相と出力をコン トロールして波を集束したり走査できる.地震記録 は即時スタッキングによってSN比を高める.

ACROSSのトモグラフィは調和波動場での逆問 題であるが, セプストラム解析によってイベントを 識別すれば,従来の物理探査法と同じように地震波 の速度を推定できる.また多数の震源のフェイズド アレイ運用によって直接に散乱構造を同定する場合 には,照射波の集束とモード制御によって空間分解 能を高くできる.

震源はシステム開発の中心であり,偏心質量を長 時間にわたって高速回転し速度を制御することは未 踏技術であり,製作には多くのノウハウが織り込ま

8-3. Division of Monitoring and Computational Geoscience

Development of Brand-new Geo-monitoring Instruments

(1) Laser Interferometers

A new instrument with high performance or high reliability often opens up new fields of geophysics. With this belief, we developed new instruments. Shown in Fig.1 is a wideband short-period seismometer using a Michelson laser interferometer. To detect short-period vibrations down to 1ms, the frequency response of the output signal has a flat performance up to 1kHz (Fig.2). We are also trying to develop other types of instruments, such as a laser strainmeter, an ocean-borehole tiltmeter, and a seismometer which can sense six degrees of vibration components.



Fig.2. Frequency response of the seismometer.

(2) ACROSS (Accurately Controlled Rotary Seismic Source) Tomography

We are developing a tomography based on accurately harmonic elastic wave. This system is composed of a phased array of artificial seismic sources and an array of seismographs. The source is an oscillator in which an eccentric mass is driven by a servomotor and is installed under the ground. We maintain the frequency of the sources constant. We also deploy sensors in a dense array. Recorded data are stacked immediately and the SN ratio of the data is augmented.

The mathematical feature of the ACROSS tomography is an inversion of the harmonic wave field. This is a young subject and a lot have to be exploited. But we can transform it mathematically to a conventional velocity tomography. Another approach is a phased array operation of many sources in which resolution is expected to be significantly improved. In this approach, the scattering structure is identified directly.



図3.出力1トン級小型精密制御震源. Fig.3. Accurately Controlled Source with 1 ton Force

れている.1998年に震源の原形機が完成し,現在室 内試験を進めている(図3).さらに,山梨県東部 の地震活動域に近い東京電力・葛野川揚水発電所の 深部トンネルに実証試験モデルを設置して性能試験 を進めている.

重力場の時間変化と空間分布の観測と理論研究

マグマの上昇や,地盤の隆起・沈降に伴って,万 有引力を及ぼすみなもとの地下の物質の移動がおこ る.このとき生じる,ごく微少な重力の変化に着目 して,火山噴火予知や地震予知の基礎研究のため, 以下の3つのテーマに取り組んでいる.

- (1)ヨウ素安定化レーザーと原子時計という最先端 技術を組み合わせた絶対重力計(図4)や,高 精度スプリング重力計を駆使して,国内各地で 重力を10億分の1までの超高精度で測定してい る.各観測点は年1回以上の頻度で繰り返し測 定を行い,時間変化を監視している.
- (2)海底付近で起きる巨大地震の研究には,陸域だけの観測では不十分である.大地震の前後で, 震源域直上では,海底の高さが数cm程度上下することを利用して,人工衛星海面高度計データの解析をすすめ,海の地震の実像を明らかにする研究を行っている.
- (3)活断層の周辺では,過去の地震活動の影響を受けて,重力に特徴的な空間パターンが生じる. このパターンを解析することにより,地下に潜在する活断層の検出や,断層活動様式の研究を行っている(図5).

The source undoubtedly is the center of concern. Highspeed rotation of an eccentric mass with accurately constant velocity for a long time is an unexplored technology and many inventions have been needed. We made the first model in 1998 and have been examining it in the laboratory (Fig.3). We also completed improved and stronger sources, installed them in a deep tunnel of Kazunogawa Power Station, eastern part of Yamanashi prefecture, of Tokyo Electric Power Company and currently conducting experiments.

Theoretical and Observational Studies on Temporal and Spatial Variations of the Gravity Field

Minute gravity chages occur when crustal deformation and/or transport of underground materials occurs: ascent of magma, co-seismic uplift/subsidence, pre-seismic groundwater migration. We try retrieving information on the subsurface deformation from observed surface gravity.

- (1) Gravity field monitoring at tectonically active regions. We repeat gravity measurements several times a year at the Tokai subduction area, Asama Volcano, Izu Peninsula and other locations. The combination of an absolute gravity measurement (FG5 gravimeter in Fig.4) and a relative one (LaCoste & Romberg gravimeter) enables us to determine spatio-temporal gravity changes with an accuracy and a precision of 1-5 microgals. We apply the elastic/viscoelastic dislocation theory to the observed gravity change to estimate the underground deformation process.
- (2) Physical interpretation of gravity anomaly around



図4.FG5型高精度絶対重力計. Fig.4. The FG5 high-precision absolute gravimeter.



図5.北伊豆断層周辺の重力異常.

Fig.5. Gravity anomaly around the Northern Izu Fault System. (left) Gravity anomaly expected from the accumulation hypothesis. (right) Observed gravity anomaly after removing the regional trend.

地震破壊の理論的研究

本部門における研究活動の柱の一つである理論的 および数値モデリングに関する研究とその基礎とな る数学的手法の開発を行っている.現在の研究課題 は地震破壊の理論的研究と,断層破砕帯の力学的特 性の評価手法の開発研究の二つに大別される.

(1) 地震破壊の理論的研究

現実の地震が発生する地殻は,様々の大きさの力 学的に弱い面(一般に亀裂と呼ばれる)を含むこと が知られている.密に分布する亀裂は,一般に,強 い影響を及ぼしあう.これを相互作用と呼ぶが,こ の相互作用こそが,地震破壊を特徴づける重要な要 因であろうと我々は考えている.この考えに基づき, 関連の理論解析手法を開発しながら,種々の地震破 壊現象にあたえる相互作用の影響について考察して きた.この一連の研究により,相互作用という概念 のもと,大地震の始まりから停止にいたる過程のみ ならず,地震活動の統計的諸性質までもが統一的に 理解できるようになってきた.

大地震が繰り返し起きているような場所は,断層 帯という一種の破砕帯が形成されていることが知ら れている.また,このような断層帯内部では,亀裂 密度がたいへん高くなっていることが知られている. このような断層帯内で開始した破壊の成長の様子を モデル計算した例を図6に示す.相互作用のため, 多くの破壊を引き起こしながら成長を開始し,全体 としては,ゆっくりした速度で破壊の成長が始まる ことがわかる.これは最近の精度の良い観測結果と たいへん調和的である.

(2) 地震波を用いた断層破砕帯の力学的特性の評価手法の開発

「地震破壊の理論的研究」の研究成果に基づくと,

active faults. A peculiar gravity anomaly pattern often occurs around active faults. We postulate the hypothesis that the current gravity anomaly manifests as a result of an accumulation of repeated co-seismic gravity changes in the past. In particular, the gravity anomaly around the Northern Izu Fault System is explained well by geomorphologically determined offset and seismic fault parameters of the 1930 Kita-Izu earthquake (Fig.5).

Theoretical Study of Earthquake Ruptures

(1) Theoretical Study of Earthquake Faulting

It is well known that the shallow part of the Earth's crust, where a large majority of earthquakes occur, is permeated by a number of pre-existing cracks of various sizes. In general, densely distributed cracks interact mechanically with each other. We have theoretically and numerically studied the effects of crack interactions on various aspects of earthquake ruptures. We also have developed mathematical methods of analysis forming the basis of such studies. It has been revealed that crack interactions can be a key element characterizing earthquake ruptures; we can understand in a unified way



- 図6.断層破砕帯内(-100<X<100,-15<Y<15)の破壊 の成長の様子のスナップショット.Tは時間を表 し,T=0ではすべての亀裂は同じ長さである.赤 は成長をおこした亀裂である.
- Fig.6. Snapshot of rupture growth in a fault zone (-100<X<100, -15<Y<15), where T is nondimensional time. All the cracks have the same length at T=0. The red line segments denote propagation-experienced cracks.

地震の発生予測のためには断層帯内部の亀裂分布特 性を評価することが重要となる.予測手法として,最 も効果的なものは,断層帯に弾性波を入射させてそ の応答を調べることであろう.このような考えに基づ き,密に分布する亀裂群による散乱特性についての 一連の理論的研究を行ってきた.これにより,断層 帯内を伝わる地震波の精度よい観測により断層帯の 特性が評価できる可能性があることがわかってきた.

地震発生過程・強震動のシミュレーション

(1) 地震発生過程・強震動のコンピュータシミュレ ーション

スーパーコンピュータを用いたモデリングによる 現象の解明を行っている.その例として破壊力学に もとずく地震発生過程解析がある.この研究では, 地震発生の仕方をコントロールする断層パラメータ (強度分布,応力解放量分布)を直接推定し,得ら れたパラメータを用いて地震発生場のダイナミクス, テクトニクスを考察する.このような破壊力学にも とずく震源モデルを使うと,この震源近傍の強振動 評価も可能になる.図7はこのようにして得られた 1984年長野県西部地震の断層運動(縦の断面)と地 動(横の断面)のシミュレーションの結果である. 地表での最大地動加速度は赤で示した部分で生じて いるが,現地調査によれば断層真上のまさにこの場 所に大加速度域が発見されている.



not only an earthquake rupture process from its nucleation to arresting, but also from the statistical properties of earthquake activity from the concept of the interaction.

A fracture zone called a fault zone is formed where shallow earthquakes occur repeatedly. It is known that crack distribution density is very high there. Rupture growth in such a fault zone is simulated, and an example of the result is illustrated in Fig.6. This figure shows that the earthquake rupture begins growth by exciting some subsidiary ruptures because of intense crack interactions. It is also shown that the overall rupture velocity is quite slow at the stage of dynamic rupture nucleation, which is also due to the crack interactions. This explains recent seismological observations quite well.

(2) Development of Method to Estimate the Mechanical Properties of a Fault Zone

Our study of earthquake rupture suggests that it is crucial to estimate crack distributions in a fault zone for predicting an earthquake. It would be most effective to investigate the response of a fault zone to incident seismic waves. A series of theoretical studies has been carried out on the scattering property of a fault zone, and the possibility has been suggested that the mechanical property of a fault zone can be estimated by precise seismological observations of seismic waves propagating in the fault zone.

Simulation of Seismic Source Processes and Applications to Design of Structures

(1) Computer Simulation of Rupture Process and Generation of Strong Motion

An inversion of seismic waveforms has been used to infer distributions of kinematic parameters, e.g., slips or moment release or rupture time on the fault. It is based on kinematic fault models that include some arbitrary assumptions. We have proposed an efficient method to reconstruct physically a reasonable dynamic rupture process with the constraint of kinematic inversion results and applied it to several earthquakes. The heterogeneous distributions of stress drop and fault strength excess have been revealed. In the method, ground motions near the fault are also calculated. Fig.7 shows snapshots of slip velocity on the fault and ground motions generated for the 1984 Naganoken-seibu earthquake.

図7.1984年長野県西部地震の断層運動(縦の断面)と地動 (横の断面).

Fig.7. The slip velocity on the fault and the ground velocity at each time step for the 1984 Naganoken-seibu earthquake.
(2) 強烈な直下地震動に適合する耐震構造の設計法の研究

兵庫県南部地震の経験に立って,我が国の構造物 の設計では,直下地震による極めて強い地震動に対 して,損傷制御と振動制御を核とする精密な設計・ 施工によって構造物の安全性を確保することになっ た.しかし,この新しいコンセプトは,従来の設計 法(許容応力度法)を根本的に変更するものでありな がら,データの不足,発生確率が低い事象について の費用対効果の評価の困難さ,などのために,なお 確立にはほど遠い段階にある.

この新しい設計法は,地震動の予測精度を要する だけでなく,構造案に応じて危険な地震波が異なる ため,地震学と構造力学の知見を総合的に運用して, 地震発生過程・強震動のシミュレーションと構造物 の弾塑性地震応答シミュレーションを連携すること により,震源近傍の大型構造物の耐震設計を可能に する方法論の構築をめざしている.

(2) New Design Methodology of Structures against Strong Near Earthquakes

The concept of L2 design seismic load, which was introduced into the design of civil engineering structures, has not been thoroughly investigated, and serious confusion exists among engineers. Our basic idea to establish a rational design method is 1. to develop a highly reliable structural analysis based on the integration of earthquake sciences and structural mechanics, and 2. to control vibration and damage. Following this strategy, we are designing new large structures located in the neighborhoods of active faults and are accumulating and analyzing detailed data.

8-4. 地震火山災害部門

耐震工学

耐震工学の目的は,地震災害,特に構造物の被害 を防止または軽減することである.構造物や地盤の 耐震設計,補修,補強技術等に応用するために,1) 設計用地震動,2)地震時挙動,3)耐震性能評価, 4)被災度判定,5)被害想定,等に関する理論的 研究あるいは実用的研究を行っている.具体的な研 究手法として,1)地震被害調査,2)強震記録の 収集,3)実構造物の計測,4)動的破壊実験(図 1),5)静的破壊実験(図2),6)数理解析,7) 物理・統計理論,等がある.





- 図1.6層1/3スケール鉄筋コンクリ-ト壁フレ-ムピ ロティ構造の震動実験(2000.7).(a)加震前の試 験体,(b)最大入力Takatori 135 kine 相当に対す る全体と1層の層間変形の応答.
- Fig.1. Shaking table test of 6-story one-third scale reinforced concrete wall-frame building structure with soft first story, July 2000. (a) Test specimen before test. (b) Response of overall and first story drift angles to the maximum input motion of equivalent Takatori 135 kine.
- 図2.大地震による既存建物の柱の軸圧縮崩壊を防止するための簡易で経済的な補強方の性能確認実験(2000.8) (a)シート補強試験体の最終破壊状況.(b)無補強試験体の復元力特性(せん断破壊とともに軸圧縮破壊) (c)シート補強試験体の復元力特性(極めて大変形まで軸力を保持).
- Fig.2. Performance verification test on a simple and economical method of strengthening reinforced concrete columns against axial load collapse during major earthquake, August 2000. (a) Reinforced

8-4. Division of Disaster Mitigation Science

Earthquake Engineering

The objective of earthquake engineering is to prevent or mitigate disasters, especially damage to structures, caused by earthquakes. Academic or practical methods of simulating or evaluating 1) design earthquake motion, 2) response, 3) seismic performance, 4) damage, or 5) risk, are developed and improved through observation, experiment (Fig. 1 and Fig. 2), analysis, and theory, for application to seismic design, repair and strengthening of structures and ground.







concrete specimen strengthened with sheet after cyclic lateral load test. (b) Hysteresis of reinforced concrete column specimen without strengthening failed in shear and axial load collapse. (c) Hysteresis of the column specimen strengthened with sheet maintaining axial load capacity until amazingly high drift.

地震動の破壊力

地震災害を減らすには,地震動および構造物に関 する研究に加えて,その両者をむすびつけて,地震 動の破壊力,即ち,どのような地震動が構造物に大 きな被害をもたらすか,について検討しなければな らない.地震動の破壊力,即ち,地震被害は,地震 動と構造物の強さの相対関係によって決まるので, その両者を把握する必要がある.その成果の一部は, 例えば,計測震度のような,地震動の破壊力を表現 する指標として還元される.そのような指標は, 1995年兵庫県南部地震の場合でもわかるように,ど の位の被害が生じているかを迅速かつ正確に把握し, 震災直後の素早い対応をするために不可欠なもので ある.しかしながら,そのような検討には,同じ構 造物条件下で多くの強震記録が得られることが必要 で,今までは充分な検討が難しかった.

1999年台湾集集地震では,同じ構造物条件下で多 くの強震記録が得られ,実際の被害の大きさも様々 で,地震動の破壊力指標について実際の被害から検 討することが初めて可能となった.実際の被害から検 討することが初めて可能となった.実際の被害(周 辺被災度)と既往の地震動の破壊力指標および,提 案する1秒程度の弾性応答値の関係についてそれぞ れ図3,4に示す.既往の地震動の破壊力の指標は, いずれも実際の被害との相関があまりよくない.こ れに対して,提案する1秒程度の弾性応答値は,実 際の被害と相関がよく,地震動の破壊力指標として 適していることが確認される.

応用地震学

地震災害を軽減することが地震学の社会的使命と すれば,地震発生時の地震動を正確に予測すること は地震学の最重要課題のひとつである.本研究室は この課題に関係するあらゆる問題に取り組んでおり, 最近の研究テーマは次の通りである.







Damageability of strong ground

In order to mitigate earthquake disaster, we have to investigate damageability of strong ground motions in addition to investigation of strong ground motions and structures. Damageability of strong ground motions, i.e., structural damage, is determined by the relationship between intensity of strong ground motions and strength of structures, therefore, we have to grasp characteristics of both strong ground motions and structures. The result of the investigation leads to index of representing damageability of strong ground motions, such as J.M.A. (Japan Meteorological Agency) seismic intensity. Such index is essential to grasp actual structural damage rapidly and accurately for quick post-disaster response. Slow post-disaster response enlarged human damage in the 1995 Hyogoken-Nanbu Earthquake. However, many strong ground motions records are need to be obtained under the same structural condition for such investigation. In the 1999 Chi-Chi earthquake, Taiwan, many strong ground motions records were obtained under the same structural condition. This made it possible to investigate index of representing damageability of strong ground motions from actual structural damage for the first time. The relationship between often used index and proposed index (elastic response with a 5% damping factor around 1.0 sec) and actual damage (area damage level) is shown in Figs. 3 and 4, respectively. Almost no correlation was found for PGA and a weak correlation for PGV, SI and JMA intensity whereas, there is good correlation for proposed index with area damage level.

Applied Seismology

Seismologists are responsible for mitigating earthquake disasters, so precisely estimating seismic ground motions is one of our most important tasks. We are working on any problems related to this task, and our recent research subjects are as follows:

1) Modeling earthquake faults and their rupture processes as sources of seismic ground motions (e.g. Rupture



図4.弾性応答(周期1秒(左)0.8秒(右),減衰5%)と 周辺被災度の関係

Fig.4. Relation between elastic response (5% damping for period 1s (left) and 0.8s (right)) and area damage level.



- 図5.1995年兵庫県南部地震の断層モデル(下)とそのすべり量分布(上)(吉田・纐纈・他,1996による).
- Fig.5. Fault model (lower) and its slip distribution (upper) for the 1995 Kobe earthquake (after Yoshida, Koketsu et al. 1996).
- 1)地震動の源となる震源断層のモデル化と破壊過 程の解明(兵庫県南部地震の震源過程の解析な ど.図5).
- 2)地震動に大きな影響を与えるリソスフェアや堆 積層の構造解析(沈み込み帯における3次元レ イトレーシングや人工地震データのトモグラフ ィー解析など)
- 3)1)の断層モデルや2)の3次元不均質構造における地震動のシミュレーション(阪神淡路大震災「震災の帯」のシミュレーションなど.図6).

強震動地震学

強震動の観測を通じて,震源近傍での強震動の特 性把握,表層地質構造の複雑さによる強震動の地域 的変動の解明に主力を注いでいる.震源のごく近傍 では,図7に示すように加速度記録には短周期の地 震動が複雑かつ豊富に含まれていることがわかり, 一方では変位波形に見られるようにS波の前に近地 項によると考えられる準静的な動きが顕著である. また,単純な破壊を想定させる地震もある.図8は その例であるが,2つの地震は単純で良く似ている. しかし,良く見ると高周波数でのスペクトル形状が 異なり,パルス形状の波形の後半部に違いが見られ る.破壊の減速モデル(中村・工藤,1997)でこの 差を説明出来そうである.

表層地質構造の強震動に与える影響は極めて大き



- 図6.1995年兵庫県南部地震による地震動の数値シミ ュレーション.上は最大速度の分布,下はその時 間推移(古村・纐纈,1998による).
- Fig.6. Numerical simulation of seismic ground motion caused by the 1995 Kobe earthquake. The upper and lower diagrams represent the distribution of peak ground velocities and their temporal snapshots, respectively (after Furumura and Koketsu, 1998).

process of the 1995 Kobe earthquake, Fig. 5).

- Exploring detailed images of underground structures, which should influence seismic ground motions (e.g. three dimensional ray tracing in a subduction zone and tomographic analysis of explosion data).
- Numerical simulation of seismic ground motion caused by fault rupture in a three dimensional heterogeneous structure (e.g. simulation of strong ground motion caused by the 1995 Kobe earthquake, Fig. 6).

Strong Motion Seismology

The major objectives of our research group are to understand the nature of near-field strong ground motions and to quantitatively estimate the effects of complex surface geology on strong motions by mainly observational approaches. Strong ground motions at the near-field contain high frequencies in the accelerogram (Fig. 7, the first trace) as well as quasi-static movements due to near field terms before the S-wave arrival in the displacement, as shown in Fig.7 (the third trace). On the other hand, events that are supposed to be simple rupture have also been observed. Figure 8 shows the example of



図7.1997年伊東沖の地震(M5.7左図)の伊東市新井(IDR)での観 測記録.右図(EW成分,上から加速度,速度,変位). Fig.7. Observed acceleration, integrated velocity and displacement

(EW) at IAR form the 1997 Ito-oki earthquake (M5.7).



図8.震源スペクトルが高周波側でのみ大きく異なる2つの地震.A地 震では断層破壊が急激に停止し,B地震では30m程度の破壊減速 域があるモデルで波形(右図)とスペクトルの違いが説明できる.

Fig.8. Two simple events differ at only high frequency. The difference can be interpreted as that the rupture stops suddenly (event A) and its velocity decelerates during 30m (event B).

い.足柄平野に展開している観測から,周期1-2秒の揺れやすさ分布を求め,図9,10に示している. 平野の中央部,南西部に揺れやすい地域が有り,表層の深さ分布に大きく依存している.

強震動評価

強震動は,地震の原因である震源断層,地震波の 伝播経路,変化に富む地表近くの地盤,の相乗効果 で決まる.構造物の設計や都市防災を考える際には, 強震動特性を理解する必要がある.地震時に危険度 の高い軟弱地盤では,動的相互作用を考える必要が ある.図11は,地表近くの超軟弱地盤により,地震 波の加速度が増幅(地下86m,地下30m,地表)し ていく様子を示している.





- 図9.遠距離大地震記録を足柄平野の周期1-2秒の揺れやすさ分布(植竹・工藤, 1998).
- Fig.9. Distribution map of relative intensity of 1-2 sec. motions in Ashigara valley estimated by using the records of remote and large earthquakes (Uetake and Kudo, 1998).

simple and similar accelerograms, however, their high frequency spectra and the waveform at later parts of pulses are significantly different. This difference can be interpreted by introducing a rupture deceleration model (Nakamura and Kudo, 1997).

Surface geology affects very much on strong ground motions. Figures 9 and 10 shows the relative intensity of 1-2 seconds ground motions in Ashigara valley referring to a rock site. Areas showing high intensity are found in the central and in the south-west of the valley and they are correspond to a deepness of sedimentary basin.

Strong Motion Estimates

Strong ground motion depends upon the causal earthquake fault, the propagation path, and a variety of local sites near the ground surface. We need to understand strong motion characteristics for earthquake-resistant structure design and urban earthquake-disaster prevention. Structure-soil interaction effects must be taken into account in a soft soil area with a high seismic risk. Fig. 11 shows the acceleration amplification of seismic wave (-86m, -30m, 0m) due to very soft surficial layers. **Numerical simulation of strong ground motion**

図10. 揺れやすさ指標の高い平野中央部の地下構造推定. 2 層構造 は屈折法探査,柱状図は微動探査による(神野・他,1998). Fig.10. Underground structure models estimated by refraction surveys and array microtremor measurements (Kanno et al., 1998)



- 図11. 地震波の加速度が地表に近づくにつれて大きく なる様子.
- Fig.11. Acceleration amplification due to very soft surficial layers.

強震動シミュレーション

地震動は,震源近傍そして伝播経路における地殻 の3次元不均質性の影響を大きく受けている.この ような効果は,大規模な3次元地震波動伝播のコン ピュータシミュレーションにより評価することがで きる.私たちは擬似スペクトル法を水平方向に,そ して鉛直方向に差分法を用いた「ハイブリッド型」 のシミュレーション手法を開発した.これにより多 数の演算プロセッサを用いた並列計算で高い演算性 能が達成される(図12).西南日本の詳細な3次元 地下構造モデルを用いて行った計算結果(図13)は, たとえば1946年南海地震のような,海溝型地震の波 動伝播特性を考察する上で有効である.

津波の研究

津波は海の地震で起きる.地震のマグニチュード





図12 . PSM/FDMハイブリッド計算の模式図 . ハイブリッ ド型並列計算では多数の演算プロセッサを用いて高 い演算性能が得られる(古村・纐纈・竹中,2000). Fig.12. Schematic illustration of the PSM/FDM hybrid calculation. The hybrid method offers fairly good speed up rate even using large number of processors (Furumura, Koketsu and Takenaka, 2000).

The seismic wavefield is significantly affected by 3D variations in crustal structure both in the source zone itself and in propagation to some distance. Such effects can be modeled in large-scale numerical 3D simulation of seismic wave propagation by using parallel computers. We developed a hybrid simulation code with pseudospectral representation for horizontal coordinates and finite-difference in depth. This arrangement improves parallel efficiency with high speed-up rate using large number of processors (Fig. 12). Numerical modeling of strong ground motion with a realistic 3D model for structure in western Japan (Fig. 13) provide a good understanding of seismic wave propagation from a subduction zone event such as the 1946 Nankai earthquake.

Tsunamis

A tsunami is a sea wave generated by a submarine earthquake. It has been clarified that the magnitude of tsunamis in the sea regions of Indonesia and Philippines exceed by one to two grades larger than those generated by earthquakes of the same magnitude of the sea region of the Japanese Islands (Fig. 14).

At midnight on June 3, 1994 an earthquake with a magnitude of 7.6 occurs in the sea region of East Java, and the inhabitants of Pancer village felt a small tremor, but a huge wave with a height of 9 meters washed away

- 図13.南海地震の3次元波動伝播シミュレーションのスナ ップショット(水平動速度分布)(Kennett and Furumura, 2000).
- Fig.13. Snapshots of horizontal ground motion from 3D simulation of wave propagation from a Nankai subduction earthquake (Kennett and Furumura, 2000).

(M)が大きいほど,引き起こされた津波の規模 (m)が大きくなるのは当然であるが,その関係は, 日本列島とインドネシア・フィリピン島孤とでは異 なることが解ってきた.インドネシア・フィリピン 島孤では,地震マグニチュードのわりに大きな津波 が起きる傾向がある.1994年6月4日の東ジャワの 地震では,パンチェル村で深夜の小さな地震で15% の人が起きただけ.そこへ9mの高さの津波が襲っ て来た(図14).

史料地震学

わが国には,古代から1400年にもわたる地震の記 録がある.史料地震学分野では19世紀までの主とし て古文書に記された地震史料を調査・収集・解読し, 史料集『新収日本地震史料』第1巻~第5巻(含別 巻)・補遺(含別巻)・続補遺(含別巻)全21冊 16812頁の刊行を行ってきた.それらの史料によっ て,過去の地震像を明らかにし,長い年月にわたる 地震の法則性を解明しようとしている.その成果は 地震の長期予測・災害・防災研究に生かされている (図15).

最近の研究では,地質学的痕跡から立証されてい る3世紀前の北米太平洋沖の「カスケード沈み込み 帯」の巨大地震が,岩手県宮古市・大槌,茨城県那 珂湊,静岡県美保,和歌山県田辺市にある古文書の 元禄12年12月8日の遠地津波の記録の解析によって, 1700年1月26日21時頃(現地時間)に起こり,地震 の規模はM=9であることを解明した.



- 図14.1994年ジャワ島東部地震津波で流されたパンチ ェル村の光景.
- Fig.14. Almost all of the houses were washed away in Pancer village by the tsunami generated by the 1994 East Java earthquake.

almost all of the houses in the village.

Historical Seismology

We started the historical study on earthquakes in 1975. The documents collected, which contain descriptions of earthquakes and tsunamis, were published as a series of books, "Shinto-Nihon Jishin Shiryo (New collection of materials for the study of historical earthquakes in Japan)", which consists of 21 volumes, amounting to 16, 812 pages altogether. The materials collected are used in the long-range prediction of earthquakes and the mitigation of disasters caused by large earthquakes and tsunamis (Fig. 15).



図15.「田辺町大帳」(和歌山県田辺市立図書館蔵)と「田辺町大帳」の津波の記事. Fig.15. The tsunami records in "Tanabe-cho Daicho" (The official diary of the mayor of Tanabe City).

8-5. 地震予知研究推進センター

平成6年6月の地震研究所の改組に際し新設され た地震予知研究推進センターの役割は,基礎研究に 責任を負う大学が中心となって実施すべき地震予知 に関する全国的共同研究プロジェクトや国際共同研 究の推進にある.また,当センターには平成12年よ り,地震予知研究の全体計画の取りまとめを担う地 震予知研究協議会企画部が置かれている.

地震予知研究協議会・企画部

1.新体制の経緯と目的

平成10年8月に,測地学審議会から『地震予知の ための新たな観測研究計画の推進について』が建議 され,とくに大学における観測研究については, 「全国共同利用研究所と各大学の地域センター等で 構成されるネットワークの強化」と「関連研究者が 広く参加すること」の重要性が指摘された.これを 受け平成12年4月1日,新体制の地震予知研究協議 会が発足した(図1).



- 図1.大学の新しい地震予知研究の体制.
- Fig.1. New organization of Universities for an earthquake prediction research.

2.企画部と計画推進部会の役目

新しい協議会は、地震予知研究計画全般を審議す る「意志決定機関」と位置づけられた.計画の立案 と実行を機能的に行うために,協議会の下に企画部 と計画推進部会が置かれた.研究計画の進捗状況と 結果の評価を行うために,協議会とは独立の「外部 評価委員会」が置かれた.企画部は地震予知研究の 全体計画の取りまとめ,計画の進捗状況を把握する ため当センターに常置の組織となり,4人の専任教 官と1人の客員教官がこの任にあたっている.計画 推進部会は,研究計画の実施にあたるとともに,研 究課題ごとの実行計画を立て,企画部に提案する機 能を持つ.建議の事業内容に基づき7つの部会が設 けられた.

8-5. Earthquake Prediction Research Center

The Earthquake Prediction Research Center (EPRC) was established in 1994 as a core facility to promote national or international research projects on earthquake prediction. To establish a scientific method for predicting a large earthquake, we still need basic researches for which university scientists bear responsibility. A major role of EPRC is to coordinate individual large-scale research projects on earthquake prediction so that they are carried out effectively. In 2000, the coordinating committee of the Earthquake Prediction Research Committee was established at EPRC.

Earthquake Prediction Research Committee and Coordinating Committee

In 1998, the Japanese Geodesy Council submitted a recommendation titled as " Promotion for the new Program of the Study and Observation for Earthquake Prediction " to the Ministry of Education, Culture, Sports, and other related ministries. This is the 5-year national program since 1999. Following the recommendation, Japanese universities established a new structure toward the earthquake forecast study (Fig.1). In September 1999, the Earthquake Prediction Research Committee was established in the Earthquake Research Institute of the University of Tokyo, which is a shared institute of Japanese universities. The EPRC promotes the earthquake prediction researches in Japanese universities to plan, conduct, and evaluate the research programs (Fig.2). The EPRC includes a coordinating committee and seven standing panels (Program Promotion Panels) for promotion of individual programs. The coordinating committee has both full-time and parttime researchers proposes basic research plans. The committee allows representatives from academic institutes outside ERI to coordinate earthquake forecast research efforts among them. The ERRC also has an external evaluation committee to evaluate the scientific merit of the university programs.

(http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/YOTIKYO/index.htm)

Cooperative Researches

1. Laboratory Experiment on Earthquake Generation Process

For physical modeling of a large earthquake for predictive purposes, it is critical to understand in terms of the underlying physics how and under what conditions a large-scale earthquake rupture is nucleated in a

3.これまでと今後の活動

企画部は,研究の進捗状況を日常的に把握するた めにインターネット等を用いた調査や,各種ワーク ショップ,シンポジウムを企画・実施し,年度末に は,成果報告シンポジウムを開催している.平成11 年度末のシンポジウムには,地震研究所内外から90 余名が参加し,地震予知研究の成果と今後の地震予 知研究の方向性について議論した.この議論の内容 は,「11 年度年次報告」としてまとめた.同時に企 画部は,新年度の実施計画を調整し,研究の方向を 提案している(図2).全国の地震予知研究者は, これに基づいてそれぞれの研究計画を立て実施する. その内容は,随時,地震研究所のホームページを通 じて公開されている(http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/ YOTIKYO/index.htm).

共同研究プロジェクト

1.室内実験に基づく地震発生の物理過程と予測モ デル

大地震の発生を科学的に予測するには,地震を引 き起こす原因となる破壊現象はどのような法則に支 配されているのか,支配法則は地震が現実に発生す る地殻環境要因の影響をどのように受けるのか,地 震はどのような経過をたどって発生し,その過程で 地震発生場の状態は変わるのか変わらないのか,必 然的に付随する現象は存在するのかしないのか,過 去に観測された地震先行現象は地震発生場がどのよ うな条件を満たしていると発現するのか,などにつ いて科学的に理解し,これを系統的に整理し,地震 発生に至る過程について時間軸に沿ったシナリオ (予測モデル)を用意する必要がある.シナリオ構 築のためには,合目的な基礎的研究が必要である. 以上のような研究上の要請に応えるため,世界に例 のないユニークな岩石破壊実験装置を,高度な技術 を有するメーカーの技術陣と共同開発した(図3).

地震発生に至る地殻活動解明のため の観測研究(4つの柱)





seismogenic environment at the final stage where enough elastic strain energy has been stored, what factors determine the size of the nucleation zone and its timescale for major earthquakes, and whether or not there are any precursory phenomena necessarily associated with the nucleation process. One of the current research projects focuses on establishing the constitutive law that governs earthquake generation processes, and thereby modeling the earthquake generation process in a lithospheric environment. To this end, a unique, state-of-the-art testing apparatus with a high-pressure and temperature spherical cell was constructed (Fig.3) to investigate constitutive properties of shear failure of rock in the brittle to brittle-plastic transition regimes under lithospheric conditions.

2. Deformation Process of Island Arc Crust

The EPRC and EOC have been a responsible organization for multi-disciplinary project of "Deformation process of island arc crust". This project is



- 図3. 地震発生環境条件下における岩石の破壊の 構成特性を調べる目的で開発された実験装 置.
- Fig.3. Testing apparatus constructed to reveal constitutive properties of shear failure of rock in the brittle to brittle-plastic transition regimes under lithospheric conditions.

目下,この装置を使って地震が発生する場と同等な 環境条件を実験室に再現し, 脆性から脆性 - 塑性遷 移過程における破壊法則の確立を目指し,国際的な 共同研究を推進している.これと平行して,破壊核 形成過程に関する研究,破壊現象固有のスケール依 存性物理量のスケーリング則の確立,岩石破壊に伴 う電磁放射に関する研究などを推進している.また, 高感度地殻応力計による試験観測も行っている.

2. 島弧地殻変形過程

地震が発生するに至る過程は,地震発生場の状態, 構造不均一と密接に関係している.したがって,地 震発生層の物性及びその空間的不均質性は,地震予 測の視点から重要である.当センターは,地震・地 殻変動観測センターとともに,制御震源構造探査と 稠密自然地震を密接に連携させた "島弧地殻の変形 過程に関する総合集中観測"プロジェクトを推進し てきた.平成9-10年には,東北日本弧の詳細な構造 と地殻活動発生様式を解明するための大規模実験・ 観測が実施された.その結果,東北日本弧西部では, 日本海生成時の伸張応力場による変形が明瞭な形で 残されていることがわかった.また,地殻は,脊梁 山地東縁で最大の33-35kmとなり,西に向かって地 殻薄化を起こしていることが判明した.また,日本 海側と太平洋側での海底地震探査結果と統合した, 東北日本弧の構造を提出した.平成11-12年度は, 北海道の日高衝突帯を研究主題とし,島弧-島弧衝 突に伴う地殻の変形様式を解明するための観測・実 験を行った.全長230kmに及ぶ屈折法地震探査と, 日高山脈を中心として実施した反射法地震探査から, 千島前弧の東北日本弧への衝上が,地殻構造の面か ら鮮明になった.また,自然地震観測については, 約50点の定常地震観測網に加え,47点の臨時観測点 が設置され,現在も観測が進行中であり,詳細な地 震活動や応力場の情報が集積しつつある.

3.活断層構造

内陸大規模被害地震は,地下15kmほどの地震発 生層底部付近で発生する.したがって,大規模被害 地震の評価や発生メカニズムを理解するには,地震 発生層底部から表層に至る領域の断層構造を理解す る必要がある.このため,当センターでは平成9年 度から活断層研究をスタートさせ,地殻スケールか ら極浅層に至る反射法地震探査による活断層の地下 構造の解明に主眼をおいた研究を進めている.平成 9-10年の奥羽脊梁山地横断構造探査では,千屋断 層・上平断層に境された脊梁山地のポップアップ構 造や地震発生層下限のデタッチメント,断層系の地 震発生層底部から表層にいたるイメージングに成功 した.この他,全国の活断層研究者との共同研究と して,地表近傍の活断層・活褶曲のデータから震源 aiming at elucidating various scale structural inhomogeneity from well-organized seismic expeditions using active and passive seismic sources. The 1997-1998 expeditions provided a new image of crustal structure across Northern Honshu Arc. Particularly, in the western part of Honshu, crust has been highly deformed by the Miocene back-arc spreading. In 1999-2000, an extensive seismic expedition was undertaken in central Hokkaido to investigate the deformation process associated with arc-arc collision. Refraction and reflection surveys succeeded in imaging obducting Kuril Forearc to a depth range of 10-15 km.

3. Active Fault Researches

EPRC has conducted active fault researches since 1997. Since destructive inland earthquakes tend to occur near the base of the seismogenic layer, revealing the entire fault structure from a shallow depth to the depth of the base of seismogenic layer is crucial to elucidate a possible mechanism of destructive earthquake generation, and thereby to infer damage from a destructive earthquake. Hence, the entire structures of active faults have been studied using very shallow to crustal-scale seismic reflection profiling. The deep to shallow seismic reflection profiling, conducted in 1997 and 1998 across the Ou Backbone Range in northern Honshu, revealed the geometry and the connectivity of an entire active fault system. In 1999-200 seismic reflection profiling was carried out across the Hokkaido axial zone and its western fold and thrust belt. Seismic profiles revealed an entire geometry of active thrust system in seismogenic layer, including shallow blind thrust at the front. Joint research projects on shallow seismic reflection profiling were undertaken with several universities. EPRC has also performed researches on the surface earthquake faults associated with destructive earthquakes, such as 1999 Chi-Chi earthquake in Taiwan and 2000 Tottori-ken-seibu earthquake in SW Japan.

4. Study on Electric Resistivity Structure

EPRC plays an important role in cooperative projects to study the electric resistivity structure in and around Japan. The NETWORK-MT experiment, which was developed in the Earthquake Research Institute, aims to study the relation between mean resistivity structure and features of crustal activity in Japan. A detailed survey is also carried out in a tectonically active area. Basic studies are also being undertaken to develop instruments for surveys, methods of field observations, and methods of analysis and modeling. The generating mechanisms of earthquakes, volcanic eruptions, and slow crustal 断層の動きを理解するために必要な活断層の浅層構 造のイメージングを実施している.また,被害地震 の調査も積極的に実施している.

4. 電磁気観測と比抵抗構造

当センターは日本列島および周辺の電気比抵抗構 造研究プロジェクトの中心的役割もはたしている. 地震研究所で開発したネットワークMT法の調査を 全国の研究者と協力して行い,日本列島全域にわた る平均的な電気比抵抗構造と地殻活動との関連を調 べている.また,特定の地殻活動域において高密度 の観測を行い,電気比抵抗構造を詳細に調べる共同 研究も行っている.これらの観測研究を実施するた めに,構造探査観測装置や測定手法および解析手法 の開発を行っている.また,海域の地下構造や地殻 活動に関連する電磁気現象の観測研究も行っている. 地震,火山活動,広域地殻変動に伴う電磁気現象を 観測して,これらの発生機構を解明しようとする研 究も行われている.伊豆半島の群発地震と異常隆起, 伊豆諸島の火山活動を主な研究対象として,プロト ン磁力計による全磁力観測(図4)や,人工電流法 による比抵抗変化の観測,NTT電話回線を用いた 長基線電場観測も行っている。

平成11-12年においては,1)北海道中北部,中 国地方西部,四国西部のネットワークMT観測,2) 千屋断層とその西方延長の広帯域MT法観測で活断 層に特有な比抵抗構造を明らかにした,3)伊豆半 島東部の隆起・群発に関連する特異な全磁力変化の 調査,4)伊豆半島と三重県飯高町の群発地震発生 域のTDEM法による比抵抗構造探査,5)三宅島 火山の全磁力および自然電位の連続観測で,2000年 噴火活動に先行あるいは伴った顕著な変化を検出し, 噴火過程の解明に寄与した,等の研究を行っている.

5.GPS観測と地殻ダイナミクス

プレートの変形を実測し,地殻の変形過程を追跡 する手段として, GPS(全地球測位システム)は最 有力の武器である.しかも,手軽に高精度の地殻変 動計測ができるので,近年急速にその利用範囲が広 まってきた (図5). 当センターでは, 全国の大学 の地殻変動研究者で組織する「GPS大学連合」の本 部・事務局をつとめるほか,各種の国内・国際共同 研究の企画・調整・推進,世界的な研究組織への窓 口と世界データの収集なども行っている.また,西 太平洋GPS連続観測網を設置して日本周辺のプレー ト運動やプレート内変形の観測調査を実施している ほか,巨大地震の震源近傍でのGPS観測による地震 の発生過程の研究や海底地殻変動観測への応用など の基礎的な研究も行っている.更に,GPSの上下方 向測定精度向上を目指し,科学技術振興調整費 「GPS気象学」に参加して,日本列島上空の可降水



図4.プロトン磁力計のセンサー(三宅島). Fig.4. Proton precession magnetometer (Miyake-jima Volcano).

deformations have been studied through various electromagnetic observations. In particular, our major targets of observations are intermittent swarm earthquakes and anomalous crustal uplift in the eastern part of the Izu Peninsula and some active volcanoes in the Izu-Bonin Arc. EPRC has also conducted observations of geomagnetic total intensity with proton precession magnetometers (Fig.4), ground resistivity using natural and controlled sources, and self electric potential (SP) with long-distance telephone cables.

For the period 1999 - 2000, we carried out the following work: 1) Network MT observations in the north-central Hokkaido, western Chugoku and western Shikoku districts, 2) To have clarified the resistivity structure of a most typical active fault, Sen-ya fault and its western vicinity, 3) Investigation of the anomalous geomagnetic total intensity changes in a rather local area in eastern Izu Peninsula, 4) Resistivity soundings in two active earthquake swarm region by TDEM method, i.e. the eastern Izu and Iitaka-Town, Mie Prefecture, 5) To have observed remarkable changes in the total intensity and self potential prior to and associated with the 2000 eruption of Miyake-jima volcano, which contributed to realize the eruption processes.

5. GPS Researches on Crustal Deformation Process The Global Positioning System (GPS), a space



図 5.GPS観測風景. Fig.5. Global positioning system.

量分布とその時間変化に関する研究を進めると共に, GPSを用いた津波計の開発にも取り組んでいる. geodetic technique to measure crustal deformation accurately, has been widely deployed in Japan, and GPS is a powerful tool to monitor crustal deformations of a variety of scales (Fig.5). EPRC serves as the headquarters of the Japanese University Consortium for GPS Research (JUNCO), not only to promote various cooperative GPS projects in Japan, but also to establish an international GPS network in the western Pacific area to monitor plate motions (see 6-5 Application of GPS). The deformation process of the Japanese islands has been studied based on dense GPS arrays; for instance, post-seismic recovery of the 1995 Kobe earthquake was monitored with a dense GPS array by JUNCO, and a GPS array was deployed in the Ito area under the supervision of JUNCO. A new type of tsunami-meter using GPS has been developed. EPRC has joined a new project called "GPS meteorology", which started in 1997 as a project run by the Science and Technology Agency.

8-6. 地震地殻変動観測センター

地震地殻変動観測センターは平成6年の地震研究 所の改組に伴い,観測を主体とする部門,センター, および観測所を統合して発足した.現在のセンター は,陸・海の地震,地殻変動,および強震動の四観 測研究分野で構成され,観測拠点としての地震観測 所,地殻変動観測所がある.地震研究所の設置目的 「地震及び火山噴火の現象の解明及び予知並びにこ れらによる災害の防止及び軽減に関する研究」を達 成するため,各観測拠点における地震活動,地殻変 動の観測と,強震動,機動的な海・陸地震観測の協 力体制により地球物理学的研究,地震予知研究,地 震工学的研究をはじめ各種の研究を進めている.ま た,地震予知観測研究の地域センター(関東・東 海・甲信越・南海)として地殻活動の常時観測およ び地震現象・異常地殻活動の研究を進めるとともに, 全国共同利用研究所のセンターとして地震予知観測 研究の進展のために全国の大学との共同研究の推進 及びその拠点としての役割を担っている.

地震観測研究分野

関東甲信越から伊豆諸島地域,紀伊半島,瀬戸内 海西部地域に約100点の高感度地震観測点を設置し て,広域の地震活動や地殻構造の研究を進めている. 伊豆半島東方沖にはケーブル式海底地震計を3台設 置して特に観測精度を高め,繰り返し発生する群発 地震活動の詳細な把握とその成因と考えられるマグ マ活動の解明を進めている.関東甲信越地震観測網 のうち19観測点では短周期地震計だけでなく広帯域 の高精度地震計も設置して観測の高度化と高ダイナ

ミックレンジ化を図り,小地震 の破壊過程と構造の不均質との 関連の研究により地震発生にい たる過程の解明を進めている.

リアルタイムに収集している 膨大な地震観測データは,開発 したワークステーション自動処 理および検測システムを用いて 効率的にその処理・解析,アー カイブを行っている.同時に開 発した衛星通信利用の地震デー タ伝送システムは全国大学に導 入され広域の定常観測と機動的 観測に利用されている.これに

- 図1. 地震地殻変動観測センターの 34 地震観測点分布.
- Fig.1. Map of the seismic stations of the Earthquake Observation Center.

8-6. Earthquake Observation Center

The Earthquake Observation Center was established by integrating the observation divisions, the earthquake prediction observation center and the observatories when the Earthquake Research Institute was reorganized in 1994. At present, the center is composed of the four observational research groups for earthquakes, crustal movements, and strong motions. The center has ten observatories and the large-scale regional observation networks covering the districts of Kanto-koshin'etsu, Kii Peninsula, Shikoku, and the western Seto inland sea regions. The center, in order to approach earthquake prediction and disaster mitigation, has been actively conducting observational researches to clarify the mechanisms and the processes of earthquake generation, and has been developing observational techniques and instruments. The Earthquake Observation Center has been also conducting the collaborative observational researches with universities and other related institutions to promote earthquake-prediction program.

Earthquake Research Group

Seismic activities, rupture processes of earthquakes and heterogeneous crustal structures have been investigated using the high-sensitivity seismic networks of more than one hundred stations covering the areas of Kantokoshin'etsu, Kii Peninsula, and western Seto inland. A data telemeter system utilizing a satellite has been developed and has been in operation since 1996, which has ensured to establish a real-time transfer of a huge





図 2 . 関東甲信越地域の地震観測網系統図 . Fig.2. System diagram of the seismic observation network in the Kanto-koshin'etsu area.

よって地震データのリアルタイム流通による有効利 用が可能になるとともに,特定の地域における目的 を絞った稠密観測研究を機動的に行うことが可能と なった.本センターは衛星通信テレメタリングシステ ム運用の全国センターの機能を果たしている.1999 年からは,地殻構造調査と自然地震稠密観測を総合 した大規模機動観測を北海道で実施している.本セ ンターは地震予知研究推進センターと協力してこの ような観測の中核的役割を果たしている.

海域地震観測研究分野

三陸沖の海底地震観測所三点と津波観測所二点を 光海底ケーブルでつないで地震・津波をリアルタイ ムに観測するほか自己浮上型海底地震計による機動 的な観測を併用して,歴史的に津波地震が発生して きた海陸境界域の詳細な地震活動とプレート間相互 作用の解明を東北大学と協力して進めている.伊豆 諸島,東海沖,三陸沖など日本周辺海域において短 周期や広帯域の高精度自己浮上型海底地震計を用い た機動的な海底観測を行い,地殻構造の不均質や地 殻活動を明らかにしようとしている.また,準リア ルタイムの海域観測を展望して衛星通信と水中音響 通信を利用するブイテレメータ海底観測システムを 開発した.平成12年の神津島・新島近海の群発地震 観測に使用してその有用性を示した.また,準定常 amount of earthquake waveform data. The data telemeter system has been also effectively utilized in mobile seismic observations. The Earthquake Observation Center is responsible for the cooperative researches using the satellite-telemeter system.

Earthquake swarms, having repeatedly occurred off the East coast of the Izu Peninsula, have been intensively studied to clarify the mechanisms using the dense network of land stations and the optic-cable linked ocean-bottom seismometer network system that was deployed in 1994.

The Earthquake Observation Center has been the responsible organization since 1999 for the extensive researches composed of the well-organized seismic refraction/reflection profiling and the seismic studies with an off-line dense array in Hokkaido area.

Marine Earthquake Research Group

Seismic activities and tsunami off Sanriku, Tohoku district, where tsunami earthquakes have historically and repetitively occurred, have been studied using the opticcable linked ocean-bottom seismic stations and tsunami stations and pop-up ocean-bottom seismometers. Moreover, seismic activities and geodynamics at the plate boundaries around Japan have been studied with 的な海域地震観測のために一年間以上連続観測の可 能な海底地震計を開発したほか,海底での地殻変動 観測装置の開発をすすめている.

地殼変動観測研究分野

南関東・東海・伊豆・南海の地域などにおいて地 殻の変動すなわち歪・傾斜などの連続観測を行うと ともに光波測量・GPS観測,地下水観測と合わせて 地震発生と地殻変動の関係や地殻のダイナミクスに 関する研究を行っている.主力装置としてボアホー ル地殻活動総合観測装置(歪水平3成分,傾斜2成 分,温度,加速度3成分,速度3成分,ジャイロ方 位計などから構成)を開発した.この装置は,これ まで3回の伊豆群発地震の前兆変動と最初の大きな 地震の前兆的異常変動および地震時の変動を記録し ており,深部ボアホールにおける総合観測の重要性 と威力を認識させた.最近,名古屋大学および東濃 地震科学研究所と共同で小口径(外径60mm)なが ら斜め2成分および鉛直成分を組み込んだ3次元歪 観測装置を開発し各地に設置した.地磁気の4成分 の観測も可能であり, 地震前兆検出の効率化と経費 節減を実現した.地震発生研究において応力の絶対 値の測定が重要であるが,深部ボアホールにおける オーバーコアリングによる応力測定を可能にするイ ンテリジェント回収型歪計を名古屋大学と共同で開 発し,深度500 mの応力測定に成功した.

強震動観測研究分野

地震は極めて広帯域の現象であり,単一の測定器 では現象の一部を理解出来るに過ぎない. 強震動観 測研究分野では,大地震の近傍で発生する強震動現 象を捉え,大地震の発生と破壊伝播の詳細を知り, さらに強震動に与える地下構造・表層構造の影響を 定量評価するための強震計による観測とその記録の 解析に中心課題を置いている.現時点での強震計の 守備範囲は最強の地震動(重力加速度の2倍程度を 想定)からほぼ有感となる地震動(重力加速度の千 分の一程度)である.観測の対象は,M8クラスの地 震の発生が予想されている駿河湾地域,地震活動の 活発な伊豆半島地域および表層構造が複雑な足柄平 野などである.足柄平野では表層地質の影響を定量 評価するために地盤上での高密度アレイ観測を実施 しており,その他の地域では露岩上での観測に特徴 を持っている.観測記録は基本的に学術研究の目的 に使用されるが,強震動情報は発災直後の応急復旧 に極めて重要であり,現在,一般公衆回線を用いた 準リアルタイム波形伝送を実現し, 強震動情報を即 時に自治体・関連機関等へ伝達するシステムの開発 に取り組んでいる.これらの研究は地震火山災害部 門と密接に協力して進めている.

using a pop-up ocean-bottom seismometer array.

For the long-term seismic observations, the highquality pop-up ocean-bottom seismometers with the life of >1-year continuous recording have been developed. For the marine quasi-real-time observations, the telemeter buoy system utilizing the satellite- and acoustic-communication links has been developed, which were temporarily deployed off Kozu-shima, Izuislands, Tokyo in 2000 for observing the earthquake swarms associated with the magma activities of the Miyake-jima eruptions.

The ocean-bottom instruments measuring crustal movements such as strain and tilts have been developed and installed in the Nokogiriyama examination wells for marine crustal movements observation tools.

Crustal Movements Research Group

Crustal dynamics and relationship between crustal movements and earthquake occurrence have been investigated by using data obtained from observation stations monitoring continuous crustal movements, and EDM and GPS array stations, together with groundwater measurements. Multi-component borehole observation instruments have been developed and enabled us to record six components of strain, two components of tilt, temperature, and three components of seismic waves. They are equipped with a newly developed gyro for positioning the instruments when installed in deep boreholes. They have been deployed at areas where earthquake swarms occur and next destructive earthquakes may occur in the future as Kanto-Tokai and Nankai areas, being installed in deep boreholes at depths from 150 m to 800 m.

Strong Motion Research Group

Major objectives are: (1) to understand the generation and the propagation of strong ground motions from large earthquakes through strong motion observations at rock sites surrounding Suruga Bay where a large earthquake of M8 is anticipated and Izu Peninsula regions, and (2) to evaluate the effects of surface geology on strong motions using the array observation data at Ashigara valley. A quasi real-time information system for strong ground motions is under development. This system will focus on dispatching additional data that will allow a local government or other organization to respond quickly. The group collaborates with the Division of Disaster Mitigation Science.



図3.関東・東海地方における強震動観測網 地質図は地質調査所による). Fig.3. Strong motion observation network of the Earthquake Observation Center in the Kanto-Tokai area plotted on the geological map by the Geological Survey of Japan.

Ashigara Valley Strong Motion Instrument Array



図4.足柄平野におけるアレイ強震動観測. Fig.4. Array strong motion observation in Ashigara valley.

筑波地震観測所

Tsukuba Seismological Observatory

大正10年震災予防調査会により設立され,その後 昭和2年地震研究所に所管替えとなり現在に至って いる,地震研究所で最も古い観測所である.観測施 設は東京の北東約70kmにある筑波山の中腹の花崗 岩層上にあり,関東地方で最も地震活動の活発な地 域の一つに位置している.

和歌山地震観測所

Wakayama Seismological Observatory

昭和3年,今村明恒博士が来るべき南海道大地震 に供えて紀伊半島および四国地方の地殻活動を観測 する目的で設立した南海地動研究所をその前身とす る.太平洋戦争のため観測を一時中断したが,地震 研究所が昭和27年に観測を再開し,昭和39年和歌山 微小地震観測所として正式に発足した.昭和53年度 に全観測点のテレメータ化と処理システムの導入が



図5.ローカルな地震観測網の例(和歌山地震観測所). Fig.5. Local seismic observation network in the Kii peninsula operated by the Wakayama Seismological Observatory.

行なわれ同時に局舎を移転し,南海地域における地 震観測の中心としての機能が整えられた.平成6年 6月,地震研究所の改組に伴い和歌山地震観測所と なった.

広島地震観測所

Hiroshima Seismological Observatory

昭和38年米国沿岸測地局より国際標準地震計を設 置するよう依頼があり学術会議はこれを受け入れる よう勧告した.地震研究所はこの勧告に基づいて昭 和40年度に白木微小地震観測所を新設した.現在は, 広島を中心として四国や九州にも観測点を設置し, 瀬戸内海西部地域の地震活動の観測研究を目的とし ている.平成6年6月,地震研究所の改組に伴い広 島地震観測所となった.

堂平地震観測所

Dodaira Seismological Observatory

局地,近地,遠地の大小の地震について広い周期 範囲の地震波を観測する近代的な総合地震観測所と して昭和39年度に堂平微小地震観測所が設置された. 秩父堂平山に短周期地震計の群列観測網を持つとと もに関東地方に衛星観測点をもって,無線テレメー 夕観測を始めた.平成6年6月,地震研究所の改組 に伴い堂平地震観測所となり,関東甲信越地震観測 網の一翼を担っている.

信越地震観測所

Shin-etsu Seismological Observatory

北信微小地震地殻変動観測所(昭和42年度設置) と柏崎微小地震観測所(昭和43年度設置)の両観測 所を統合し昭和60年度に信越地震観測所となった. 新潟県南西部,長野県北部の特定観測地域を含む中 部日本に地震観測網を展開するとともに,日本海東 縁部の地震活動の観測研究にも寄与する.平成6年 6月,地震研究所の改組に伴い信越地震観測所となった.地震研究所本所と専用回線で結ばれ,関東甲 信越地震観測網として波形データが統合されている.

油壺地殻変動観測所

Aburatsubo Geophysical Observatory

戦後の昭和22年理学部の臨海実験所構内の地下壕 (元の特殊潜行挺の発進地)を利用して地殻変動連続 観測の研究が開始された.これが油壺観測所の始ま りである.昭和24年9月より観測が始められ,昭和 52年2月に現在の庁舎および観測坑が完成した.三 浦半島南端近くの油壺地殻変動観測所は東方20 km の房総半島の鋸山に設置されている鋸山地殻変動観 測所との相互の変動を比較することにより,地震に 関連した異常地殻変動の検知能力を向上させている.

鋸山地殻変動観測所

Nokogiriyama Geophysical Observatory

昭和34年1月より現観測所の約1 km北にある観測 坑において観測を開始し,30年以上の観測を継続し た.1年間の並行観測の後,平成5年10月から現在 地の観測所に移転した.油壺地殻変動観測所との傾 斜データの比較解析により20m/年で東から西へ移動 する超低速の地殻変動が初めて見いだされている.標 準的な地殻変動観測所における観測計器,水管傾斜 計・水晶管伸縮計のほかに強震計・重力計・水晶振



- 図6.三宅島・神津島近海の地震の詳細な震源分布. 海底地震計のデータを利用して震源再決定した. 深さ7km以深では厚さ約2kmの薄い板状の分布に なっている.
- Fig.6. Hypocentral distributions between the Miyakejima Island and the Kozu-shima Island. The hypocenters are the relocated ones using the station corrections determined by the ocean bottom seismometer observations. The deeper distributions (>7 km) of the hypocenters look like almost-vertically standing thin-plates of the width of about 2 km.

動式応力計・STS地震計やボアホール多成分歪計な どの観測を行っており,また,海岸には検潮所が設 置され,地球物理総合観測所としての観測を進めて いる.平成8年に海底掘削孔と同孔径の試験観測井 を設け,海底地殻変動観測手法の開発を進めている.

弥彦地殻変動観測所

Yahiko Geophysical Observatory

前身となる間瀬観測所が昭和27年に設置され,水 管傾斜計が新潟地震の数年前から異常傾斜を記録し ていたことは注目すべきことである.日本海沿岸の 地震は太平洋側に発生するプレートの沈み込みに伴 う巨大地震とは異なる.このことを考慮して昭和39 年に発生した新潟地震(M=7.5)後の昭和40年に地 震予知計画の一環として弥彦地殻変動観測所が設置 された.

富士川地殻変動観測所

Fujigawa Geophysical Observatory

富士川地殻変動観測所は,西南日本から延びる南 海トラフが深く駿河湾内に入り込み上陸する地点に 位置し,プレートの異常運動から東海地震に関連し た変動を検知する目的で昭和44年地震予知計画の一 環として設置された.地殻変動連続観測の他に5ヶ 所の観測点の微小地震の観測を行っている.

室戸地殻変動観測所

Muroto Geophysical Observatory

四国の室戸岬最南端に平成7年度完成した全長150 mの横坑の観測点である.本州最南端にある和歌山 県の潮岬観測点における250mのボアホールの3成分 歪・2成分傾斜などの観測との比較により,21世紀 に再び発生すると考えられる南海道大地震に関連す る現象を観測するために設置された.



- 図7. 鋸山地殻変動観測所, 観測坑内の水管傾斜計・伸 縮計(中央), 観測坑入口(左上), 観測坑内分岐 点(右下).
- Fig.7. Nokogiriyama Geophysical Observatory: Watertube tiltmeter and extensometer (center), the inside view of the observation vault (right lower), and the entrance of the observation vault (left upper).

8-7. 地震予知情報センター

地震予知情報センターは,全国地震予知研究情報 ネットワークの全国センターとしての任を負い,全 国規模で得られた地震予知観測データの収集,整理, 提供を行うとともに,地震に関する情報流通基盤の 整備を推進している.

また地震や津波の発生メカニズムの研究,国内外 の地震データを用いたリアルタイム地震学の研究, インターネットを用いた地震情報提供システムの研 究,首都圏の強震計データを使った地盤特性,地震 防災の研究など,自然地震学から情報科学までの幅 広い研究活動ならびに全国共同研究を行っている.

<<全国地震予知研究情報ネットワーク>>

国立大学観測網地震カタログ(JUNEC)

全国の国立大学により運営されてきた地震予知観 測情報ネットワークの観測網で得られた再検測地震 データを統合処理し、「国立大学観測網地震カタロ

8-7. Earthquake Information Center (EIC)

Earthquake Information Center (EIC) has a central role of Japan University Network for the Earthquake Prediction Program, making archives of all seismic data observed in Japan. EIC also creates a database and develops software to analyze the database.

To utilize this database, EIC coordinates various collaborative projects among domestic and international researchers, concerning the source process of earthquakes and tsunamis, real-time seismology, and the communication system for earthquake information.

<<Earthquake Information Network>>

Japan University Network Earthquake Catalog (JUNEC)

The data obtained from the observation networks of the earthquake prediction information have been combined for alignment by the newly inaugurated Japan University

JUNEC 1985/07-1996/12



グ(通称JUNEC)」を作成し,公開している.1999 年からは,作成したデータをCD-ROM化し,研究 者から申請があった場合に提供を行っている(図1).

全国地震データ流通ネットワーク

本センターでは,1980年頃から全国の大学地震観 測データの流通システムを開発し提供してきた. 1980年代は,アナログ専用回線を用いて全国ネット ワークを構築し,隣接大学間の波形データの交換, 自動処理システムの開発の推進と自動震源情報の本 センターへの収集などを行っていた.1993年には, インターネット技術を用いて64Kbpsのデジタル専 用回線を用いて全国ネットワークを再構築し,全国 の研究者と標準地震波形データ転送方式の開発,そ れによる近接の大学間の波形データ交換,気象庁各 管区とその隣接大学との波形データ交換,各大学に おける高感度地震波形データ利用システムの開発と 公開,新J-array地震波形データベースと利用シス テムの開発と公開など数々の成果を上げた(図2). 1996年には、衛星通信技術を用いた全国地震データ 流通ネットワーク(衛星テレメータ)に移行し,全 国の観測点の波形データが,全国のどこの大学でも 利用できるという画期的な地震データ流通ネットワ ークシステムが構築され運用されている.各大学の 高感度地震波形データベース,および,本センター の新J-array地震波形データベース (http://jarray. eri.u-tokyo.ac.jp)も,衛星テレメータ化によりデー タベースの内容がより一層充実された.

並列計算機(http://wwweic.eri.u-tokyo.ac.jp/ computer/)

本センターでは,共同利用研究所の計算機センタ ーとして地震や火山の研究のための全国共同利用計 算機を導入している.1999年3月には,64台の CPUからなる並列計算機SGI Origin 2000システム が導入された.このシステムになって処理能力が大 幅に向上したことにより,従来では困難であった中 規模から大規模のシミュレーション計算が可能にな っている.大規模計算の処理件数や利用者は徐々に 増加し,月間のCPU稼働率は,導入当初30~40%前 後であったものが,2年目にして80~90%と処理能 力の限界まで日常的に利用されている(図3).地 震予知計画の建議でも,地殻活動予測のための「地 殻活動シミュレーション手法」の研究が推進されて いることなどから,全国の共同利用研究者による計 算需要は今後も増え続けると予想される.すでに処 理能力の限界まで利用されていることから,早急に 処理能力の大幅増強を実施する必要がある.



- 図 2 . J-array で得られた1999年台湾地震の広帯域地震 波形.
- Fig.2. J-array broadband waveform data of the 1999 Taiwan earthquake.

Network Earthquake catalogue (JUNEC). The data are made available by CD-ROM since 1999 (Fig.1).

Communication Network of Seismic Data (http: //jarray.eri.u-tokyo.ac.jp/)

EIC has been engaged in developing access systems for a waveform database to provide every researcher with the seismic waveform database via the Internet. Using this system, data gathered by the center are publicized as new J-array seismic waveform data, and are available via the WWW (Fig. 2).

Taking account of the fact that a satellite telemetry system started operation to make data available to every researcher, all of the new J-array waveform data have been compiled in EIC since March 1998.

Parallel computer (http://wwweic.eri.u-tokyo.ac. jp/computer/)

Parallel computer SGI Origin 2000 System that consists of 64 CPU's was introduced in March 1999. The capacity is drastically improved by this system, and it is possible to calculate the large-scale simulation. Now the CPU working rate in the monthly is daily utilized to the limit to the capacity with 80-90% (Fig. 3). It is required urgently to increase the capacity.



図3.並列計算機利用状況.

Fig.3. Change in number of users of the parallel computer.

EICニュースレター (http://wwweic.eri.u-tokyo. ac.jp/NEWSLETTER/)

当センター施設利用者への情報提供や連絡用として,1997年12月より『EICニュースレター』発行している.およそ2ヶ月に1回のペースで,2001年1月に第20号を発行した.内容は,ソフト・データベースなどの利用資源に関する情報,センターの利用状況,センタースタッフによる地震学情報,センターからの連絡事項などである.

<<リアルタイム地震学研究>>

準リアルタイムに集められる地震データから詳細 な震源情報を早期に決定し,震源と強震動について の理解を深めるとともに,地震津波災害の軽減に役 立てる研究を進めている.グローバルな地震をも対 象とし,主要な地震については特集HPの立ち上げ と連動し,迅速に情報提供をしている.

特集HPによる大地震,火山活動解析情報公開

世界で起こった大地震や被害地震,あるいは日本 の火山噴火が起きた場合に,それらの地震・火山活 動に対する解析結果や情報などを特集HPとして世 界に発信している(図4).海半球観測研究センタ ーと共同で開発した表面波を使った自動CMT解 (ERI AutoCMT解)システムでの解析結果(http: //www.eri.u-tokyo.ac.jp/http/AUTO_CMT/Jauto_ cmt.html)やEIC地震学ノートなどもリンクしてい る.三宅島噴火では地震研での各分野の成果を公開 するとともに,所内の調査観測活動連絡の役割も果 たした.

EIC地震学ノート (http://wwweic.eri.u-tokyo. ac.jp/EIC/EIC_News/)

M7以上の大きい地震,あるいは,大きくなくて も重要と思われる地震,興味ある地震について,震 源の破壊過程を遠地実体波を用いて解析し,「EIC 地震学ノート」として,Web上で公開している.

EIC newsletter (http://wwweic.eri.u-tokyo.ac.jp/ NEWSLETTER/)

To support smooth notification of the users of the center, the EIC newsletter has been published almost once per two months since December 1997. Edition No.20 was issued in January 2001. The edition contains information concerning usable resources such as software and database, users' activity, and seismological information.

<< Real-time Seismology >>

Quick information about earthquake source and strong ground motion is obtained by analyzing quasi real-time seismic data, which can support a prompt emergency response to mitigate earthquake hazards.

Special Home Page for large earthquakes

For large and damage earthquakes or volcanic eruption, our analytical results have been published on Special HP (Fig. 4). CMT solutions ("ERI Auto CMT solutions") by automatically using waveform data from IRIS-DMC are also published on Special HP.

EIC Seismological Note (http://wwweic.eri.utokyo.ac.jp/EIC/EIC_News/)

For interesting earthquakes such as those with the magnitude greater than seven or those believed to be important regardless of their magnitude, the rupture process of the earthquake source is analyzed using teleseismic body waves. The results are edited for publication with the title "EIC Seismological Note".



- 図4.特集HP (2000年11月16日パプアニューギニアの 地震).
- Fig.4. Special Event Page (Nov.16, 2000 Papua New Guinea Earthquake).



図 5 . 強震動ネット波形例 . Fig.5. Seismic Kanto Strong Motion Network..

首都圏強震計ネットワーク

2000年より地方自治体等の協力を得て,阪神大震 災以降地方自治体等によって首都圏に設置された強 震計・震度計の波形データを収集するシステムを構 築し,広域かつ高密度の『首都圏強震計ネットワー ク』を立ち上げた.対象となる強震計・震度計観測 点は450点にのぼる(図5).

<<地震データベース>>

地震研煤書き地震記象データベース化

地震研究所には,1890年代からの本郷における煤 書式の地震記録,約20万枚が保存されている.これ らの記象のマイクロフィルム化およびデータベース 化を行っている.これまで1899年から1934年までの 記録(約15万枚)がマイクロフィルム化された.ま たこれらの記象のデータベース検索システムも構築 している(図6).

WWSSN地震記録と地震観測報告書

WWSSNの記録が,1963年から1978年までは 35mmフィルム,1978年から1988年まではマイクロ フィッシュの形で保存されているほか,カナダの地 震記録フィルム(1981~1989年)などが保存されて いる.また,ISSやISCの地震カタログ,USGSの各 種地震報告のほか,トルコ,フィリピン,中国など 諸外国の観測報告が多数ある.また,日本のものと しては,明治22年以降の地震報告などが保存されて いる.これらは本センターで管理し,ユーザーへの 提供を行っている.

- 図6.1930年北伊豆地震の記録 東大地震学教室2号B (NS成分).
- Fig.6. Northern Izu Earthquake of Nov. 26,1930 recorded at Hongo, Tokyo.

Seismic Kanto Strong Motion Network

After the 1995 Kobe Earthquake, local governments installed strong motion seismometers and seismic intensity meters in metropolitan area. EIC constructed the system "Seismic Kanto Strong Motion Network" which collects these strong motion waveform data by getting cooperation with local governments. The network covers a wide area (the Kanto area) with high density (450 observation stations) (Fig. 5).

<<Old Seismographs and Seismological Bulletins>>

EIC preserves many historical seismograms recorded at Hongo, Tokyo, from 1899 to 1942. The preserved seismograms reach the 200,000 sheets. The seismograms were copied on microfilms. Database retrieval system of these seismograms has also been constructed. EIC also preserves records of the World-Wide Standardized Seismograph Network (WWSSN) from 1978 to 1988 in the form of 35mm films and microfiches. In addition, many old seismological bulletins such as the International Seismological Center and other foreign observatories, are maintained by the Earthquake Information Center and the Earthquake Prediction Research Center.



8-8.火山噴火予知研究推進センター

本センターでは,火山やその深部で進行する現象 の素過程や基本原理を解き明かし,火山噴火予知の 基礎を築くことを目標として,各種の観測や調査, 理論や数値シミュレーション,流体実験など多様な 方法を用いて,火山の形成過程,噴火の発生機構, マグマの動態,マグマの移動や蓄積と関連した物 理・化学現象などの諸研究を幅広く推進している.

センターに附属する常設的な施設として,浅間山, 霧島山,伊豆大島に火山観測所があり(別項参照), 富士山(図1),草津白根山(図2),三宅島に常設 観測網をもつ.これらの火山では,地震動(全火山), 地殼変動(浅間山,霧島山,伊豆大島,富士山,三 宅島),電磁気(霧島山,伊豆大島,三宅島)など のデータが常時得られる.常時観測に加えて,研究 テーマや火山の活動度に応じて,地震,地殻変動, 重力,地磁気,地熱などの臨時観測や火山噴出物な どの調査を随時行っている.特に,2000年に噴火活 動を開始した有珠山と三宅島においてはさまざまな 観測研究を実施している(7-2,7-3を参照).また, 火山噴火予知計画の重要な基礎研究課題である火山 体構造探査および特定火山での集中観測等の共同観 測研究を推進している(6-8を参照).これらの観測 データは,火山現象に関する所内外の研究に基礎デ ータを提供するとともに,火山噴火予知連絡会など で各火山の活動を評価をする際に活用されている. 地震,地殻変動などの物理観測は,主に,現在の火 山の状態や,現在地下で進行中の現象を解明するこ とに役立つ.もっと長期にわたる噴火の歴史や火山 の形成過程を解き明かすのは,過去の噴出物の調査 である.活動期や休止期を含む火山の一生を理解し, 噴火を長期的に予測する基礎を築くために,本セン ターでも地質学的な調査を重視している.

さらに,噴火の前兆現象,噴火機構,火山体の構



図1.富士山の常設的な観測点と震源分布.黒丸は低周 波地震.

Fig.1. Permanent stations and hypocenter distribution at Fuji volcano. Solid circles show hypocenters of low-frequency earthquakes.

8-8. Volcano Research Center

Our Research Center is promoting a wide range of scientific research, with a view to elucidating the elementary processes and fundamental principles of various phenomena going on in and beneath volcanoes, and thereby forming a basis for the prediction of volcanic eruptions. Our research subjects include the formation processes of volcanoes, eruption generation mechanisms, motion of magma, and physico-chemical phenomena related to magma migration and accumulation, while our approaches range from measurements and surveys, through theoretical and numerical simulations, to fluid experiments.

Volcano observatories at Asama, Kirishima and Izu-Oshima are permanent facilities attached to our Research Center, while we dispose of permanent measurement networks at Fuji, Kusatsu-Shirane and Miyakejima. At these volcanoes, data on seismic motion (at all volcanoes), ground deformation (at Asama, Kirishima, Izu-Oshima, Fuji and Miyakejima) and electromagnetism (at Kirishima, Izu-Oshima and Miyakejima) are registered on a permanent basis. In addition to permanent measurements, we carry out special sessions of seismic, ground deformation, gravity, geomagnetic and geothermal measurements and volcanic ejecta surveys, according to our research subjects and the level of volcanic activity. For the recent eruptions of Usu and Miyakejima volcanoes in 2000, see 7-2 Eruption of Usu volcano, and 7-3 Eruption of Miyakejima volcano. We are also promoting joint observational research including volcanic structure explorations and intensive observations at selected volcanoes, which are defined as key subjects for basic research in the National Program for the Prediction of Volcanic Eruptions. Data from these



- 図2.草津白根山の常設的な観測点と震源分布.白丸は 地震,それ以外は火山性微動.
- Fig.2. Permanent stations and hypocenter distribution at Kusatsu-Shirane volcano. Open circles represent hypocenters for earthquakes while others for volcanic tremor.



図3.マグマ噴出に伴う周期的な地殻変動の観測(上)と理論(下).

Fig.3. Observed (above) and theoretical (below) deformations associated with cyclic magma effusions.

造,噴火活動史の解明などの突破口を開くことをめ ざして,伊豆大島火山のカルデラ内に総合観測井を 掘削し(5-2を参照),雲仙火山における科学掘削国 際共同研究などを推進している.

また,国内外の噴火情報や意見の交換を目的として,全国の火山研究者を対象にしたメーリングリスト「funka」を運営し,火山センターのホームページの中では「日本の火山噴火の速報」を英文で掲載している.このWebサイトは米国スミソニアン自然史博物館が運営する世界的な噴火情報「Global Volcanism Network」にとっても,日本の火山噴火に関する重要な情報源となっている.

マグマがどのような機構で噴出し,噴火を起こす かについて,各種の理論的な研究もなされる.マグ マの噴出は,時に極めて周期的で,規則的な地殻の 膨張や収縮を伴う(図3上).このような変動は, マグマだまりの圧力の増減に対応して,マグマの出 口が開閉することで説明がつく(図3下).その詳し いメカニズムが解明されれば,噴火の発生時期を予 測する理論的な手がかりになる.

地球の更に深部で、どのようなマグマが形成され るかを知ることも重要である.マグマはマントル対 流の上昇流の中で生まれ,岩石の間を移動しながら, その組成を変えていく.理論的な計算によると,マ グマが岩石の間を上下に移動する場合と,水平に移 動する場合で,マグマの組成変化の様式が異なる (図4).海洋底の海嶺で採取される玄武岩の組成の 多様性は,この理論によって説明することができる.

図4.マグマの上昇過程における組成変化の計算結果と,海 嶺玄武岩の組成の実測値.

Fig.4. Chemical composition change of the mid-ocean ridge basalt compared with the theoretical result due to magma migration.

observations are providing basic data for volcanological research in and out of the Earthquake Research Institute (ERI), and they are also made full use of in the evaluation of individual volcanoes by the Coordinating Committee for the Prediction of Volcanic Eruptions (CCPVE) and other organs.

To achieve further progress on several problems in the basic research on the volcanic activity and eruption prediction, we have drilled an 1km-deep observation well within the caldera of Izu-Oshima volcano (see, 5-2

Researches to Predict Volcano Eruptions), and have been promoting the international scientific drilling project at Unzen volcano.

We also operate, with a view to exchanging opinions and information on eruptions home and abroad, an electronic mailing list "funka" consisting of volcanologists all over the nation, and we publish a prompt report "Current Volcanic Eruptions in Japan" in English in our official homepage. This Web site is providing valuable information on Japan's volcanic eruptions for the worldwide eruption database "Global Volcanism Network" operated by the U.S. National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.

Progress was also made in the theoretical study on the mechanisms governing magma generation and ascent as well as volcanic eruptions. We proposed a model of magma plumbing mechanism, comprising an elastically responding magma chamber and a vent opening and closing with viscosity, to account for ground deformation data obtained during periodic recurrence of eruptions (Fig.3). A basic theoretical framework was also formed on the influence which relative motion of magma within rock may have on its own chemical composition (Fig.4).



浅間火山観測所

Asama Volcano Observatory

浅間山は,爆発的な噴火をするわが国の代表的な 火山である.天仁(1108年)と天明(1783年)の噴 火では,大量の火山灰とスコリアを成層圏にあげ, 山腹に火砕流を出して,広い範囲に多大の被害を生 んだ.噴火活動が活発なことから,古くから火山観 測の対象となってきた.地震研究所の付属施設とし て,浅間火山観測所が蜂の茶屋に設立されたのは, 1933年のことである.観測所の初期の成果としては, 火山性地震を波形や震源から分類し,それを噴火予 知に応用しようとした研究が有名である.

浅間山の活動は,1960年代以降は相対的に静穏な 状態にあるが,その間にも1973年にマグマが直接関 与する噴火が起き,高く上がった噴煙は関東地方の 各県に降灰をもたらした(図5).火山噴火予知計 画によって,1980年代に観測体制が整備されると, 火山性地震の震源の決定精度が上がり,波形の研究 も進んだ.図6に,現在の常設的な地震観測点の配 置と,典型的な震源分布を示す.山頂火口の真下に は,地震の頻度が火山の活動度に応じて大きく変動 することから,マグマの通り道にあたるものと考え られる.地震観測以外に,地殻変動の観測も定常的 に行われている.最近十数年間にわたって北東山腹 で繰り返された水準測量によると,山頂方向は沈降 を続けている.



図 6 . 浅間山の地震観測点と典型的な震源の分布 . Fig.6. Permanent stations and typical hypocenter distribution at Asama volcano.

小諸火山化学研究施設 Komoro Observatory of Volcano-Chemistry

浅間山の山麓には,地球化学,地質学,岩石学の 立場から火山を研究する目的で,1955年に小諸火山 化学研究施設が設立され,地下水の水位,水質,溶 存成分の測定が行われてきた.最近は,浅間火山観 測所と一体化して,浅間山の火山活動を総合的に研 究する一翼を担っている.



図 5 . 浅間山1973年の噴火 . Fig.5. The 1973 eruption of Asama volcano.

霧島火山観測所

Kirishima Volcano Observatory

霧島山は,鹿児島と宮崎の県境に位置する二十数 個の火山群から成り,最近数百年間は,新燃岳と御 鉢で大小の噴火を繰り返している.火山群の北には, 加久藤カルデラが隣接する.1959年に新燃岳で噴火 が起き,1961年に加久藤カルデラで群発地震が発生 したのを契機に,昭和38年にえびの高原に霧島火山 観測所が設置された.それ以降顕著な噴火活動は起 きていないが,1968年えびの群発地震を始めとして, 新燃岳や霧島山の周辺などで,群発地震がくり返さ れた.観測所では,群発地震の研究を通じて,この 地域の置かれている広域応力場の特徴が研究されて きた.また,硫黄山周辺の地熱地帯などで,地熱調 査や電磁気学的な構造探査を行い,火山と熱水活動 の関係について研究が進められた.

1991年には,新燃岳の火口内で微噴火が発生した (図7).これは,噴火としては小規模な水蒸気爆発



図7.1991年に霧島山新燃岳で発生した微噴火. Fig.7. A small eruption in 1991 at Shinmoe-dake, Kirishima volcano.

であったが,噴火に対応して火口周辺で多項目の観 測が展開された.その結果,様々な観測項目に,火 山の活動度を反映した微小な変化が見いだされた (図8).噴火予知計画による火山体内部の研究が始 まり,平成6年度および8年度には,全国の研究者が 共同で行う構造探査のテストフィールド火山として, 霧島山が選ばれた.構造の研究を軸に,火山の内部 で進行する諸現象の解明が進められようとしている.

伊豆大島火山観測所

Izu-Oshima Volcano Observatory

伊豆大島は,フィリピン海プレートの沈み込み境 界に近く,その境界の南東方向の延長上では,太平 洋,フィリピン海,ユーラシアの3プレートが,世 界でも珍しい海溝三重点として会合する.伊豆大島 火山は,粘性が低く磁性鉱物を豊富に含む玄武岩質 溶岩を噴出する.歴史的には大きな噴火を平均百数 十年おきに繰り返し,中央火山丘の三原山は,安永 の大噴火(1777-1792)でできたとされている.

伊豆大島火山観測所は,第3次火山噴火予知計画 によって,地磁気,津波の両観測所を統合する形で, 昭和59年度に発足した.火山とその環境の特徴を考 慮して,観測所では次のようなテーマを中心に研究 が進められている.(1)種々の火山現象の解明と噴 火予知への応用,(2)火山と周辺の地下構造の探査, (3)火山活動とテクトニクスの関連.

1986年には,山頂火口から溶岩が流出し,さらに カルデラ内外で割れ目噴火が発生した(図9).こ の噴火に際して,全国の研究者の協力による総合的 な観測が実施され,翌年の小噴火も含めて,噴火の 前兆現象やマグマの活動に関する高精度なデータが 大量に得られた.その後も地震,地殻変動,潮位, 電磁気等の観測が全島で強化されている.この観測 網を用いた波形のトモグラフィーによって,伊豆大 島地下の地震波散乱強度分布が得られた(図10). 深さ5kmおよび8-10km付近の強い散乱は,マグマ の存在を示唆するものである.



- 図8.霧島山新燃岳の地下浅部の温度上昇を示すと考え られる地磁気の変化.
- Fig.8. Geomagnetic changes at Shinmoe-dake, Kirishima volcano, showing underground temperature elevation.



図9.伊豆大島火山1986年11月21日の割れ目噴火. Fig.9. Fissure eruption on November 21, 1986 at Izu-Oshima volcano.



Hypocenter Map APR. 1,1985 0: 0 - DEC.31,1993 23:59

- 図10.伊豆大島カルデラ中央部の東西断面で見た地震波 散乱強度の分布.
- Fig.10. Distribution of seismic-wave scattering intensity in the east-west cross-section across the central caldera area of Izu-Oshima volcano.

8-9.海半球観測研究センター

海半球観測研究センターは平成9年4月に発足した ばかりの,地震研究所でもっとも新しい組織である. ここでは,これまでのポセイドン計画の地震観測ネ ットワークを発展的に継承し,地震学に加えて地球 電磁気学や測地・地殻変動などの分野の総合的地球 規模観測ネットワークを太平洋地域に展開して,国 内外の研究者と共同して観測研究を実施する.

近年,地球活動の認識があらたまりつつある.す なわち,地球のさまざまな活動は局所的に閉じたも のではなく,地球内部と大気・海洋さらには地球外 天体までもが密接に相互作用を及ぼしあっているこ とが明らかになってきた.全地球規模のマントル対 流が,日本列島の地震や火山の活動を引き起こし, 地球環境変動にも影響を与える、このような新しい 地球認識の潮流に対応し,地球上に起こる自然現象 を真に理解するためには,一地域・一分野にとらわ れない,地球全体を見渡す観測研究が必須であるこ とは,多くの研究者の意見の一致するところである. そして,地球全体を見回したとき,地球表面の70% を覆う海洋底は大陸地殻の複雑さにじゃまされずに 地球内部を覗くための窓ととらえることができる. しかしながら,同時に海洋地域は陸域に比べるとあ らゆる地球観測にとっての観測空白域になっており, 特に最大の面積を占める太平洋の観測空白域の存在 が新しい地球観の創造に最大の障害となっているこ とがわかる.日本は太平洋を取り囲む環太平洋地域 に位置し,太平洋広域観測の前線基地としてネット ワークの拠点となり,海半球観測を行うための絶好 の場所にある.このような観点から平成8年度に5 ヵ年計画で「海半球ネットワーク」プロジェクトが スタートした.当センターは,本学大学院理学系研 究科および海洋研究所の協力を得て,太平洋を中心 とする地域(海半球)に地球規模の地球物理観測網 を構築・維持し,そのデータを国際的に交換するこ とにより, 地震・火山・地磁気などさまざまな地学 現象の根源であるマントルとコアの運動とその原動 力を解明するため,関連観測研究の中心拠点として 設置された.

センターには大きく分けて4つの役割がある.ま ず,海半球ネットワークの地球観測を構築して観測 を実行する役割がある.長期的な観測ネットワーク は,地震観測・測地観測(重力・GPSなど)・電磁 気観測という3本柱で構成される.海半球観測の多 くは太平洋に点々と存在する海洋島において行うが, それぞれの観測点の設置・整備や観測の維持は全国 の研究者との協力によってなされる.さらに長期的 な観測に加えて,必要に応じて陸域や海域において 機動的なアレー観測等を実施する.第二に,さまざ まな地球観測をこれまでにない精度・感度で行うた めに,従来の装置を使用するだけでなく,独自の観 測装置や周辺機器の開発を行う役割がある.特に

8-9. Ocean Hemisphere Research Center

The Ocean Hemisphere Research Center (OHRC) is the newest component of the Earthquake Research Institute. This center carries out a five-year project "Ocean Hemisphere Network" to develop and operate a global multidisciplinary network in the Pacific hemisphere consisting of seismic, geoelectromagnetic, and geodetic observations. Research on the Earth's interior is intensively carried out using the observation network, not only by the staff of this center but also scientists from other institutes and departments both of University of Tokyo and of other Universities. This center also serves as a data center that distributes data in the international science community and makes as complete a database as possible through data exchanges with other geophysical networks.

In the recent years, the dynamic nature of the Earth's interior has been recognized as a result of various interactions. It is necessary to have an observation network of a global scale in order to fully understand physical phenomena on and within the Earth. From this viewpoint, ocean, which covers about 70% of the Earth's surface, can be regarded as a window to look into the Earth's interior without disturbance from complicated geological noises of the continental crust. At the same time, oceans, especially the Pacific, which is the largest on the globe, prevents us from building geophysical observation stations. In fact there have been few attempts to construct a geophysical network in the Pacific due to various difficulties. In the "Ocean Hemisphere Network", great efforts will be made to build a wellspread seismic, geomagnetic and geodetic networks in the Pacific to investigate the structure and the dynamics of the mantle and the core, and to reveal the physics of the Earth's activities.

There are four major activities of this center.

 Observation and maintenance of the seismic, geomagnetic and geodetic networks,

Because most long-term observation stations are built on islands in the Pacific, their maintenance require collaboration between institutions. A temporal array study, either on land or on the ocean bottom, will be done to support network observations.

(2) Development of new instruments and sensors.

It is obvious that stations on islands are not sufficient to build a network with the ideal configuration. Longterm sea floor stations for seismic and magnetic measurements are going to be developed to overcome this problem. A borehole seismic sensor will be developed to make a high-quality seismic observations 「海半球」のネットワークには海底における長期観 測は不可欠の要素であり,長期型海底地震計・電磁 力計や長期型海底孔内地震計など,これまでにない 性能の装置を開発する必要がある.次に,観測デー タの解析を行い地球内部の構造やダイナミクスの研 究を行う.さまざまな観測データを総合的に用いる ことにより,地球活動の真の解明を目指す.最後に データセンターとしての役割をあげることができる. 観測データが内外のできるだけ多くの研究者に利用 されるべく円滑なデータ流通をはかるとともに,国 際的なデータ交換の窓口となり国際貢献を果たす必 要がある. on the sea floor.

(3) Data analysis and study on the structure and dynamics of the Earth's interior,

(4) Data distribution and exchange,

The data center is committed to distributing data to as many scientists as possible, not only in Japan but also in other countries, to make a sufficient contribution to the international scientific community.

Present Status of the OHP Network (December, 2000)



- 図1.(上)海半球地震観測ネットワーク.赤丸(陸上)および青丸(海底)が海半球の観測点で,赤四角および青三 角は他のプロジェクト等による観測点.(中)海半球電磁気観測ネットワーク.赤丸(陸上)および青丸(海底) が地磁気観測,青三角は現在観測中の地磁気観測所.米国と共同で海底ケープルによる電位差観測も行う.(下) 海半球測地観測ネットワーク.GPS観測(赤丸)および超伝導重力観測(赤四角).青三角は,他のプロジェク トなどによるGPS観測点.
- Fig.1 (Top) Ocean hemisphere seismic observation network. (Middle) Ocean hemisphere geomagnetic and geoelectric observation network. (Bottom) Ocean hemisphere geodetic observation network.

Station	Location	Code	Lat	Lon	Туре	Remarks	Operation
Baguio	Philippines	BAG	16.4	120.6	VBB,24-bit		1998/3-
Inuyama	Japan	INU	35.3	137.0	VBB,24-bit	GEOSCOPE/OHP	1998-
Ishigaki	Japan	ISG	24.4	124.2	VBB,24-bit		1995/3-
Jayapura	Indonesia	JAY	-2.5	140.7	VBB,24-bit		1997/12-
Kamenskoe	Russia	KMS	62.5	166.2	VBB,24-bit		1995/9-1996/2
Minamitorishima	Japan	MCSJ	24.3	154.0	BB,16-bit	JMA/OHP	1996/12-
Chichijima	Japan	OGS	27.1	142.2	VBB,24-bit		1992/7-
Palau	Palau	PALU	7.3	134.5	VBB,24-bit		1996/4-1997/5
Ponpei	Micronesia	PATS	6.8	158.3	VBB,24-bit		1995/6-
Pohan	Korea	PHN	36.0	129.4	VBB,22-bit		1991/3-1996/8
Port Moresby	Papua New Guinea	PMG	-9.4	147.1	VBB,24-bit	IRIS/OHP	1993/9-
Parapat	Indonesia	PSI	2.7	98.9	VBB,24-bit		1993/3-
Syowa Station	Antarctica	SYO	-69.0	39.6	VBB,24-bit		1990/1-
Tagaytai	Philippines	TGY	14.1	120.9	VBB,24-bit		1992/2-1995/5
Taejon	Korea	TJN	36.4	127.4	VBB,22-bit	Event only	1997/12-
Tsukuba	Japan	TSK	36.2	140.1	VBB,22-bit		1989/10-

表1 OHP地震観測点リスト (2000年3月現在)

表2 西太平洋GPS観測網

Site name	Country	Lat	Lon	Operation
Ishigaki	Japan	24.4	124.2	1995/11-
Taejeon	Korea	36.4	127.4	1995/4-
Marcus	Japan	24.3	154.0	1995/7-
Manila	Philippines	14.6	121.0	1995/8-
Chuuk	Micronesia	7.4	151.9	1995/11-
Vladivostok	Russia	43.2	131.9	1996/2-
Palau	Palau	7.3	134.5	1996/5-
Okha	Russia	53.6	142.1	1995/7-
Yuzhno-Sakhalinsk	Russia	47.0	142.2	1995/7-
Port Moresby	Papua New Guinea	-9.4	147.2	1996/4-
Jayapura	Indonesia	-2.5	140.7	1997/3-
Khabarovsk	Russia	48.5	135.1	1997/3-
Kota Kinabalu	Malaysia	6.0	116.1	1997/11-
Uglegorsk	Russia	49.1	142.0	1997/4-
Kamenskoe	Russia	62.5	166.1	1996/10-
Kluch	Russia	56.3	160.9	1996/8-
Essa	Russia	55.9	158.7	1996/8-
Kortberg	Russia	56.3	162.7	1996/8-
Tigili	Russia	57.8	158.6	1997/8-
Komandorskiye Island	Russia	55.2	165.8	1997/8-
Petropavlovsk-Kamchatkiy	Russia	53.1	158.6	1996/8-
Khabarovsk	Russia	48.2	135.1	1996/4-

表3 OHP超伝導重力計観測点

Site name	Country	Lat	Lon	Instrument	Operation
Syowa Base	Antarctica	-69.0	39.5	SG016	1993/3-
Canberra	Australia	-35.5	149.0	CT031	1997/1-
Bandung	Indonesia	-6.9	107.5	SG008	1997/12-
Spitzbergen	Norway	78.9	11.9	CT031	1999/9-

表4 OHP電磁気観測点

Station Name	Code	Geographic Lat, Lon	Geomagnetic Lat, Lon	Associ. Inst.	Observ. Period
Ponape	PON	7.00, 158.33	-0.24, -131.26	PATS	1997/3-
Kiritimati	KTM	2.05, -157.50	2.66, -87.05	NASDA	1997/8-
Huancayo	HUA	-12.06, -75.20	-1.07, -4.20	IGP	1997/7-
Changchun	CHC	43.91, 125.30	33.26, -166.09	SBC,China	1998/7-
Tonga	TNG	-21.10, -175.10	-23.40, -99.77	MLSNR,Tonga	1999/9-
Marcus	MRQ	24.18, 153.58	16.12, -138.29	JMA	planned
Majuro	MJR	7.10, 171.20	1.87, -118.66	-	planned
Biak	BAK	-1.20, -122.20	5.68, -166.60	-	plaaned

表5 海底ケーブルによる電位差観測網

区間	記録装置	電極位置(1) 緯度, 経度	電極位置(2) 緯度, 経度	給電	観測期間
グアム - 二宮	グアム	13.6, 144.9	35.3, 139.3	あり	1991/12-
グアム - フィリピン	グアム	13.6, 144.9	15.8, 121.6	なし	1993/9-
グアム - ミッドウエイ	グアム	13.6, 144.9	28.2, -17.4	なし	1995/3-
グアム - 沖縄	沖縄	26.1, 127.8	13.8, 143.9	あり	1996/3-
直江津 - ナホトカ	ナホトカ	42.8, 132.8	37.7, 138.0	なし	1996/4-
沖縄 - 二宮	沖縄	26.1, 127.8	35.3, 139.3	当面なし	1997/2-
天草 - 上海	天草	32.5, 130.1	30.2, 128.2	当面なし	1998/11-

表6 OHP海底孔内地震観測点

観測点	海域	緯度	経度	水深	設 置
JT-1	日本海溝・地震活発域	39.18	143.33	2700m	1999/11
JT-2	日本海溝・地震非活発域	38.75	143.35	2123m	1999/11
WP-1	フィリピン海・西フィリピン海盆	19.30	135.10	5640m	2001/4(掘削),7(設置)
WP-2	北西太平洋海盆	41.08	159.96	5548m	2000/7

表7 OHP機動的海底広帯域地震観測点

観測点	緯度	経度	水深	観測期間
NWPAC1	41.12	159.93	5599m	1999/8-2000/5
SRK1	38.75	143.33	2180m	1999/9-1999/10
NWPAC2	41.12	159.93	5589m	2000/5-2000/10

8-10.八ヶ岳地球電磁気観測所

当観測所は,1970年に地震予知計画の一環として 「八ヶ岳地磁気観測所」として設置され,東海・甲 信越地方の地磁気観測の基準観測所として役割を果 たしてきた.近年の地震予知研究では,地磁気観測 に限らず地電位差や電気抵抗などの諸観測・研究の 重要性も増してきたことから,1994年に名称を「八 ヶ岳地球電磁気観測所」と改称した.観測は,ノイ ズの影響を避けるため観測所庁舎から約5km離れた 八ヶ岳山麓 (138 27 E, 36 04 N, 標高1,170m) で 行っている.主要観測設備は,プロトン磁力計(通 常型およびオーバーハウザー型,各精度1nT・感度 0.1nT), フラックスゲート型磁力計2台(3成分精 度1nT・感度0.1nT), 高感度3成分フラックスゲー ト型磁力計(感度0.01nT)絶対観測用磁気セオドラ イト(角度精度0.1分),地電位差計(2成分,分解 能各10mV)などとなっている.データは観測所庁 舎までリアルタイムで伝送し収録している.全磁力 観測データは,地震予知計画による全磁力永年変化 精密観測の中部日本を代表するデータとして地震予 知連絡会に報告されている.

当観測所の役割として,基準観測所としての観測 のほかに,地殻活動に関連した電磁気現象の研究を 行うことがあげられる.そのために1980年以降は, 地震予知計画により伊豆・東海地方において地磁気 全磁力・地磁気地電位差・電気抵抗変化の連続観測 などを行っている.また,全国の研究者と共同して 実施するネットワークMT観測や地殻比抵抗構造精 密探査などの共同観測においても,基準点として当 観測所の果たす役割は大きい.

8-10. Yatsugatake Geo-Electromagnetic Observatory

This is the former Yatsugatake Geomagnetic Observatory, which had been a standard magnetic observatory in the central part of Japan since 1970. The observatory changed its name to the Geo-Electromagnetic Observatory in 1994, recognizing the great importance of electric measurements, as well as magnetic ones, in earthquake prediction research. Accurate observations of electric and magnetic fields are taken continuously at the eastern foot of Mt. Yatsugatake in Nagano Prefecture. The observatory acts as a reference station for various kinds of electromagnetic research in Japan. Meanwhile, magnetic and electric field variations are continuously monitored at a number of satellite stations in the Tokai and Izu regions to study crustal activities.

- 図1.八ヶ岳地球電磁気観測所(YAT)の担当する 東海・伊豆地域の連続観測点、富士宮篠坂 (SHN)・俵峰(TAW)・春野(HRN)・相良 (SAG)・奥野(OKN).
- Fig.1. Satellite electric and magnetic stations (SHN, Fujimiya-Shinosaka; TAW, Tawaramine; HRN, Haruno; SAG, Sagara) and a resistivity station (OKN, Okuno) in Tokai and Izu regions.



8-11. 江ノ島津波観測所

内湾の影響を受けない,津波の良い記録を得ると いう目的で,宮城県女川町の沖合い14キロにうかぶ, 三陸地方唯一の湾外有人島である宮城江ノ島でブイ 式長波計による定常的津波観測が初めて試みられた のは,昭和16年であった.この観測施設は翌17年の 台風で倒壊したが,昭和29年に津波観測が再開され, 31年には「地震研川型津波計」による観測が始め られた.昭和41年に恒久的な鉄筋の建物を整備して, 水温観測のほか風力,気圧など気象観測をも含めた 総合的な観測所となった.チリ津波・三陸地方を襲 った大小の津波の観測が行われたほか,津波計の改 良研究が進められ,昭和50年代の終わりには,「地 震研∨型津波計」が作り出された.また,空気室を 備えた海底放置型の津波計が製作され,核実験のさ い生じた小津波の観測等が行われた.昭和60年から, 半年ほどの長期観測に耐える海底放置型津波計が製 作され,これによる津波観測が試みられるようにな った.昭和63年から地震観測が始められている.近 年はGeO-TOC観測に供される地震計,電磁気計, 深海津波計などのセンサーの試験観測が,当観測所 から2kmにわたって海底ケーブルを敷設して行わ れている.

三陸海岸は,明治29年(1896),昭和8年(1933) の2度の大津波に襲われ,それぞれ約22,000人,約 3,000人の死者,行方不明者を出した.平成2年から, 津波の第1波の初動をいち早く捕らえ,適切な避難 の誘導が行えるように,津波に襲われた歴史経験の ある沿岸の市町村役場や消防署に設置して,海面水 位の変動を常時監視するシステムの開発を始めた. 岩手県田老町,普代村,気仙沼市などと協力して, これら各地に津波早期検知装置が設置され,津波の 早期検知技術の開発を進めている(図2).



図1.海底津波計の投入作業. Fig.1. Testing of sea bottom tide gauge.

8-11. Enoshima Tsunami Observatory

To obtain good tsunami records without coastal noise, Miyagi-Enoshima Island, 14 kilometers off the Sanriku coast, Onagawa town, Miyagi Prefecture, about 60 km north east of Sendai, was selected as a tsunami observation point in 1941. In 1966, a building with a tide gauge well was established, and various oceanographical and meteorological observations were started. Several types of tide gauges were designed, improved, and tested. Finally, the "ERI-V type sensor" was invented in 1974, with which micro-tsunamis generated by nuclear explosions were observed. Tests of sea bottom tide gauges began in 1985.

The Sanriku coast was hit by two huge tsunamis in 1896 and in 1933, which killed 22,000 and 3,000 persons, respectively. A tsunami detection network was planned as a joint project with municipalities on the Sanriku coast in 1992. At the beginning of February 1995, the first tsunami detection system using an ultrasonic type tide gauge was installed in Fudai village, Iwate prefecture. Up to February 1997, tsunami detection systems employing the same type of sensor were equipped at eight municipalities, including Miyako city, where the sensor is set up at Chikei fishing port, 2 km SW from the Cape of Todo, the most easterly point of Honshu.



- 図2. 普代村設置の超音波式津波常時監視システム.
- Fig.2. The tsunami detection system installed in Fudai village.

8-12.図書室

地震研究所図書室は地震,地球惑星物理,地質, 火山,地震工学の分野を中心に,これらに関する数 学,物理学,工学などの広範囲にわたる資料を所蔵 している.2000年4月1日現在のおもな資料は以下 のようなものである.

単行書:和書 18,224冊 洋書 29,107冊

- 雑 誌:和雑誌 855種 洋雑誌 815種
- 地図類:地質図(地質調査所等),地形図(国土地 理院),海の基本図(海上保安庁),土地分類 基本調査(地方自治体),その他約20,000点
- 別刷コレクション:主として坪井忠二収集 約 10,000点
- 16mm映画フイルム・ビデオ:大正3年の桜島噴火, 関東大震災,松代地震,日本海中部地震, サンフランシスコ大地震などのもの約50点
- 和古書類: 瓦版, 江戸時代や明治時代の刊本, 筆写 本等 約600点
- 写 真:関東大震災,新潟地震,1906年カリフォル ニア地震等の記録 約300点

ホームページでは,利用案内とともに定期的に新着 図書を紹介し,図書室所蔵の和古書・瓦版・鯰絵の 目録と画像データを「和古書類目録」として提供し ている.また,「地震研究所彙報」を(年4冊発行)の 編集事務および彙報と国内・外の他機関と交換業務 を行っている.

利用時間

月曜日~金曜日 9:00-17:00(12:00-13:00を除く)

ホームページ

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/~http/TOSHO/lib.html



8-12. Library

The ERI library has the collection of publications listed below and supports research in all fields of seismology, physics of earth and planets, geology, volcanology, and earthquake engineering. The collection includes additional fields of mathematics, physics and engineering. As of April 1, 2000 Library possesses;

- Books: 18,224 Japanese volumes and 29,107 foreign ones,
- Scientific magazines: 855 Japanese serial titles and 815 foreign ones,
- Maps: Geological, topographic and fundamental bathymetric maps around Japan. Fundamental land utility maps of Japan and others. Total of about 20,000 sheets,
- Tsuboi collection: 10,000 reprints of Prof. Chuji Tsuboi.
- 16 mm films, videos: 50 titles,
- Archives (Including old Japanese drawings like Namazu-e and Kawaraban): 600 titles,
- Photographs (Kanto earthquake, Niigata earthquake, 1906 California earthquake): 300 photos.

Please use our Web homepage, which has user's guide to the ERI library and information of newly accepted books regulary.

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/~http/TOSHO/lib-e.html

We have also published "Bulletin of Earthquake Research Institute" quarterly since 1926, and distribute it to other libraries of a great number of institutes in Japan and overseas.

Open hours

Monday ~ Friday 9:00am-5:00pm (except 12:00am-1:00pm)



8-13. 技術開発室

技術開発室には,木工・金属工作関連と電子回路 関連のグループがあります.主な仕事は以下のもの があります.

- 1.ユーザーが利用するための工作機械や電子計測 器の維持・保守.
- 2. ネジ・抵抗などのユーザーにとって共通的な部 品の常備.
- 3.金工・木工に関する依頼工作.
- 4.技術的なコンサルティング.
- 5.工作講習会や電子回路講習会の主催.
- 6.他部門との共同または,部門独自の機器開発研究.

東京大学地震研究所(以下,地震研)では,地震 計の所内横断プロジェクトで代表される機器開発が 盛んに行われている.この機器開発に対応する高度 な技術を持つこととユーザーの利便性を向上させる ために,最新の工作機械や電子計測器の整備にも努 めている.以下にその例として,現状で維持・整備 している機器を示す.

- 工作機械関連:マシニングセンタ1台,旋盤4台 (マグネスケール付き2台),フライス盤4台 (マグネスケール付き1台),帯鋸盤3台(イン バータ制御のもの1台),シャーリングマシー ン1台,汎用ボール盤5台,ディジタルボール 盤1台,小型放電穴加工機1台,可搬型ガス溶 接機1台,自動巻線機1台,高精度はかり1台.
- 電子回路関連:オシロスコープ6台,ファンクションジェネレータ5台,ディジタルマルチメータ6台,直流電源5台,精密電圧発生装置1台,信号発生器2台,周波数カウンタ1台,FFTアナライザ1台,精密LCRメータ1台,ガウスメータ2台,NC基板加工機1台,レーザー干渉計による変位校正システム1式,光パワーメータ1台,GP-IBデータ収集ユニット1台.

導入されたマシングセンタと工作講習会の写真を下 に示す.



写真1.マシニングセンタ"ひとつぼ君". Photo 1. Machining Center "HITOTUBO-KUN".

8-13. Laboratory for Technical Support and Development (LTSD)

LTSD comprises mechanical machining group, woodworking group, and electronics group. The main tasks are as follows.

1. Maintenance of machine tools and electronic apparatus in the workshop for users.

2. Keeping standard parts such as screws and resistors for users.

3. Manufacturing parts to order from users.

4. Technical consultation with users.

5. Hosting short training courses on using machine tools and designing and building electronic circuits.

6. Development of observational and experimental apparatus with other divisions and / or by ourselves.

The developments of observational and experimental instruments such as seismometers are now proceeding as an inter division and center research project at ERI. To play vital roles in these developments and to improve services for users, the following machine tools and electrical equipment are maintained.

- Machine tools: one machining center, four lathes (with two digital scales), four milling machines (with one digital scale), three band saws (with one inverter control), one shearing machine, five drill presses, one digital drillpress, one portable welder, one compact electro-discharge machine tool, one automatic coil-winding machine, one high-precision weight scale.
- **Electronic equipment:** six oscilloscopes, five function generators, six digital multi-meters, five dc power supplies, one standard dc power supply, two signal generators, one frequency counter, one FFT analyzer, one LCR meter, two magnetic fluxmeters, one NC milling machine for circuit boards, one laser interferometer system for displacement calibration, one optical power meter, one GP-IB data processing unit.

The machining center and a scene from the short training courses for using machine tools are shown in the photographs below.



写真2. 工作機械講習会. Photo 2. A scene from the short training courses for using machine tools.

9. 教育活動 Educational Activities

年度 Academic Year	大学院生 MC+DC	学振特別研究員 JSPS-PD	外国人研究員 FR/RS	大学院研究生 RS	本所研究生 ERI-RS	受託研究員等
1998年度	89	9	12	2	6	1
1999年度	84	9	20	2	9	3
2000年度	93	14	12	0	3	0

Table. Number of Graduate Students

本学理学系,工学系大学院おける教育:

地震研究所は,本学理学系研究科の地球惑星科学 専攻,及び工学系研究科の社会基盤工学専攻,建築 学専攻からの大学院生・研究生を受け入れており, 本研究所の教官はこれらのいずれかの専攻の教官と して,多くの講義や研究指導などを通じて大学院教 育に深く関与している.またそれぞれの研究科大学 院研究生に相当するものとして,地震研究所として の研究生を受け入れており,地震研究所研究生とし て各研究科の大学院生及び研究生と同様の教育・研 究を行っている.その他,学術振興会特別研究員, COE研究員,外国人研究生・研究員,受託研究生 などを受け入れている.



図1.大学院授業風景:「地球観測実習」での学生の発表. Fig.1. Classroom scene: a student is making a report after a field observation.

教養学部前期課程(駒場)における教育:

教養学部前期課程の1,2年生に対して駒場で開 講される「全学自由研究ゼミナール」については, 高校卒業程度の知識を有した学生に対して,地震学 や火山学に対する興味をおこさせ,その内容を紹介 する絶好の機会であることから,これらの分野に対 する基礎的な教育の一環としてとらえている.1999 年度からは,地磁気観測,地震計,GPS,などの野 外観測を,数日間フィールド(草津白根山,大島) に出て行う形式の全学ゼミナールを実施している. また総合科目の講義枠が宇宙地球科学から提供され たのを受けて,2000年度から2名の教官が一つの授

Education of graduate students:

The Earthquake Research Institute (ERI) accepts graduate students and research students of the Graduate School of Sciences (Earth & Planetary Science) and the Graduate School of Engineering (Civil Engineering and Architecture). Professors and associate professors of our institute belong to one of the above graduate schools and undertake teaching and supervisions of graduate and research students. ERI also accepts research students of its own, similarly to those belonging to the graduate schools, and conducts teaching of them. Besides them, ERI accepts JSPS (Japan Society for Promotion of Sciences) special researchers, COE researchers, foreign research students and researchers, and research students from private or governmental institutions.

Education at College of Arts and Sciences of University of Tokyo:

A "free seminar" is given to students of College of Arts and Sciences at the Komaba campus by professors of various disciplines. ERI faculty members have been participating in this seminar, and giving lectures. From 1999, we started a new type of free seminar, which will be conducted in the field away from Tokyo, where students can practice geophysical and geological observations in electrical conductivity measurement, seismometry, GPS, and so on. In addition, from 2000 we have started an introductory course in the solid earth science at Komaba campus, which is conducted by a few professors.

"Danwakai", Friday Seminar:

ERI holds "Danwakai", a monthly meeting where its members present their most recent academic and technical achievements, on the last Friday of every month. Danwakai is open to the public, with its program announced via e-mail, fax, and surface mail in advance. On Fridays (except when Danwakai is held), ERI holds a weekly "Friday Seminar" where researchers are invited from outside ERI to give lectures on up-to-date 業を担当する講義 (「地震・火山とプレートテクト ニクス」) を行っている.

地震研究所談話会・金曜セミナー:

地震研究所では毎月1回,「談話会」という名称 で公開の研究発表会を行っている.また談話会の行 われない金曜日には,所内外の最先端の研究者を招 いてセミナーが開かれている(「金曜セミナー」). その他,随時,所を訪れた研究者によるコロキウム も行われている. academic topics. In addition, visiting scientists sometimes give "colloquium" when possible.





- 図2.教養学部前期課程・全学自由研究ゼミナール「地震と火山の観測入門」での観測風景(大島).(左)赤外映像に よる火口温度測定,(右上)筆島,(右下)火山地質の説明風景.
- Fig.2. Field trip in Oshima for undergraduate students of College of Arts and Sciences.

10. 広報活動・他 Open House, Open Lectures and Bulletins

公 開 講 義

1991年の雲仙普賢岳で発生した火砕流や1995年1 月に発生した兵庫県南部地震では多くの尊い命が失 われ,我が国は地震や火山噴火の脅威に常にさらさ れてことをあらためて認識させられた.地震研究所 では,地震や火山の基礎研究,地震予知・噴火予知 研究や災害防止に関する研究を直接的に社会に伝達 することも重要な責務であると考え,1992年より一 般公開とともに,社会人を対象とした公開講義を始 めた.下表に示すように,公開講義は2000年で9回 目になる.

公開講義・一般公開の案内は都下23区の広報紙, 商業紙の読者欄で宣伝するとともに,学内の広報誌 や全国の大学の地球科学系学科にお願いして掲示し ていただいたポスター等で宣伝している.更に,東 京及び隣接県の高校や都道府県庁の防災関係課へは 一般公開と公開講義案内のダイレクトメールも出し ている.これらによって,例年多くの方面の方々か ら多くの聴講希望が集まる.

毎回幅広い年齢層の方々に聴講していただいてい る.最も多いのは40歳代で社会的に多忙な年代なが らわざわざ聴講していただいたことを講師をはじめ 所員一同大変喜んでいる.また,10歳代の若い学 生・生徒の聴講も目立ち,将来当研究所で研究を推 進する人材が聴講者から生まれる可能性も大いにあ ることを大変喜ばしく思う.受講者の大半は東京と その隣接の千葉,埼玉,神奈川県在住者であるが, 県庁や市役所の防災関係者を中心に近畿,中国,九 州地方などの遠方からの聴講もあった.公務員,教 員,会社員,主婦,学生・生徒等様々な分野の方々

Open Lectures held by ERI

The pyroclastic flow at Mt. Unzen in 1991 and the Hyogo-ken Nanbu earthquake in 1995 remind the Japanese people that there have been many natural disasters caused by large earthquakes and volcanic eruptions. In 1992, the ERI began "Open lectures" as well as "Open house", for public people who are interested in on seismology, volcanology and Earth science. The open lectures are held once a year, and the ninth one was held on July 27, 2000. The program of the lecture is advertised through newspapers, posters, web-site and direct mail to public offices, organizations concerned and high schools.

Every time, audience of more than several hundreds attend the open lecture not only from Tokyo and its neighboring prefectures (Chiba, Kanagawa, and Saitama), but also from prefectures of Kinki and Kyushu areas. The ages of participants varies from 10's through 80's, mostly in 40's. Occupations of the participants are students in college, high school or junior high school, teachers, especially in earth science, public servants and researchers, for example in charge of disaster prevention, and others. We hope that some of the student audience will be interested and join in the field of research activities in our Institute.

Most of the audience was satisfied with the open lecture, although some requested that the contents of the lecture be more detailed and more systematic. We are going to make efforts to improve the contents of the open lectures.

8月1年日	二一一、进环	合担	亚堆本粉	四/出口	二一一、进环	合担	亚堆本粉
用惟口	テーマ・調師	云场	又神白奴	用惟口	テーマ・調師	云场	又讲有奴
第 1 回 1992年 12月3日	「地震・火山と共に生きるために」 阿部勝征…地震を知る 井田喜明…火山を知る 太田 裕…防災の工夫	地 震 研究所 第 1 会議室	138	第 5 回 1996年 7月26日	「地震と火山 - 地球を知ることからはじめ よう」 瀬野徹三…プレートテクトニクスと日本列 島付近の地震 南 忠夫…建造物の地震被害と耐震対策	文京区 シビック ホール	290
第 2 回 1993年 7月27日	「地球を測る」 木下 肇…海に出て地球を眺める 村田一郎…地球を測る 吉井敏剋…日本列島の地下を探る 深尾良夫…地震の波から	地 震 研究所 第 1 会議室	138	第 6 回 1997年 7月25日	「ふれてみよう 地球科学の最前線」 笠原順三…深海底6000mにおける地震の観 測 山下輝夫…地震はどのようにしておきてい るのだろうか	安田講堂	700
第 3 回 1994年	「地震・火山 - どこまでわかった、何が分 からない」 溝上 恵東海・南関東地域の地震 - 注目される異常活動とプレート運動 大中康誉地震はどのように発生するか	安田講堂	456	第 7 回 1998年 7月30日	「地球の声を聴こう!」 大久保修平地震・火山噴火研究のための 測地学の道具箱 菊地正幸大地震の起こり方とその予測可 能性「兵庫県南部地震に学ぶ」	安田講堂	457
7月29日	- 実験による支配法則の探求 藤井敏嗣…マグマを知る - より確実な噴火予知へのキーワード			第 8 回 1999年 8月2日	「地球を斬る!」 平田 直活断層の深部構造と内部構造の 発生 渡辺秀文マグマの動きと噴火の予測	安田講堂	730
第 4 回 1995年 8月25日	「兵庫県南部地震に学ぶ」 島崎邦彦内陸地震と活断層 嶋本利彦断層と地震被害 東原紘道都市直下地震 - リスクの評価と 対策	文京区 シビック ホール	228	第 9 回 2000年 7月27日	「読みとろう地球の鼓動」 兼岡一郎…"同位体"で地球を見ると? - 構造と進化 都司嘉宣…元禄16年(1703)の関東震災	安田講堂	329
に受講されている.

2000年は7月27日に東京大学安田講堂で約330名 の受講者が参加して行われた.聴講後のアンケー ト結果によると、「講義を聴いて良かった」、「来年 も聴講したい」との多くの好意的な意見の一方で、 「もっとわかりやすく」、「焦点を絞った話を聞きた い」等の内容の充実を望む声もあり、こうした一 般の方々からの期待に今後とも応えていく事が必 要であろう.



写真1.特別企画によるモデル実験. Photo 1. A cooperative program of staff and students for model experiments.

般公開

東京大学地震研究所では,学生や市民の方を対象 に研究活動の公表の場として「一般公開」を実施し ている.平成12年度の「一般公開」は第9回にあた リ,「読みとろう 地球の鼓動」を共通テーマとし て7月27日・28日の2日間開催された.計測や実験 に関する最新の成果を中心として,各部門・センタ ーの研究活動の紹介が行われた.参加者は約500人 と例年より少なかったが,各階に設けられた展示会 場は活発な質疑応答がかわされた.

展示の中では,例年のように,学生と教官の共同 で行った特別企画によるさまざまな実験や有珠・三 宅の活動が注目を浴びたようである.幅広い年齢層 の参加者から,面白い,わかりやすい,という感想 を受けていた.また,今年度より,ほぼ全ての展示 内容の概要や詳細のホームページが作成され,地震 研ホームページに一般公開の特設リンクが設けられ た.ホームページをより充実させる機会,という一 般公開の新しい役割も期待されている.

Open House

The Earthquake Research Institute holds an "Open House" every year. This is for the public announcement of various activities in all fields of earthquake researches that have been carried out in the institute. The 9-th Open House was held July 27-28th, with the main theme of "Read Beats of the Earth." About five hundred people visited the institute and exchange questions-and answers with staff and students of ERI. A number of visitors also indicated their special interest in volcanic eruptions and seismic activities of Mt. Usu and Miyake Island occurring in 2000. The cooperative program of staff and students for model experiments attracted visitors of all generations. Their scientific interest was also stimulated by other events. The programs and displays used in "Open House" are put on the web site of the institute. The "Open House" is contributing to upgrading the contents of the web site.

出版物 Bulletins and Reports

東京大学地震研究所彙報(季刊)	創刊	1926年,	最新号	第75号第	[2冊 2000年
東京大学地震研究所彙報別冊(不定期刊)	創刊	1934年,	最新号	第8号	1992年
東京大学地震研究所研究速報(不定期刊)	創刊	1943年,	最新号	第14号	1974年
地震研究所広報(3カ月に1回程度)	創刊	1992年,	最新号	第32号	2001年3月
地震研究所年報	創刊	1993年,	最新号	第8号	2001年4月
東京大学地震研究所技術報告	創刊	1996年,	最新号	第6号	2000年

11. 共同利用と文部省科学研究費研究一覧 Lists of Cooperative Researches and Researches Supported by Scientific Grant-in-Aid from the Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Monbusho)

平成12年度共同利用一覧 List of Cooperative Researches in 2000

客員教官 Visiting Professors (共同利用)

				-									
	氏	名		所属・職名		担当	教官		研究課題				
松	澤		暢	東北大学大学院理	$\overline{\Psi}$	田		直	新しい地震予知研究計画の企画とその推進				
				学研究科・助教授									
趙		大	鵬	愛媛大学理学部・	纐	纈	_	起	Determination of detained 3-D P and S velocity and				
				助教授					Poisson's ratio structure under Japan Islands and its				
									implications for seismic and volcanic dynamics				
白	崎	勇	—	株式会社国際海洋	笠	原	順	Ξ	海底ケーブルの科学的利用に伴うエンジニアリ				
				エンジニアリング・					ングの研究				
				代表取締役社長									
高			原	中国国家地震局分析	森	田	裕	—	中国大陸直下のマントル構造に関する研究				
(G	GAO Yuan))	予報中心・助教授									
鄭		斬	華	中国国家地震局分	森	田	裕	—	東アジア地域のマントルのアン・アイソトロピ				
(Z	HEN	G Si-l	nua)	析予報中心・教授					ー構造に関する研究				

特定共同研究 (A)

Joint Researches of Universities and Institutes for Predictions of Earthquakes and Volcanic Eruptions (地震予知,火山噴火予知計画等のプロジェクトへの,全国の研究者の参加支援)

	代表者名			所属機関		担当	教官		プロジェクト名			
笠	原	順	Ξ	地震研	签	原	順	Ξ	日本列島周辺海域における海・陸プレート境界域に			
									おける研究観測			
歌	田	久	司	地震研	歌	田	久	司	ネットワークMT観測			
歌	田	久	司	地震研	歌	田	久	司	地殻比抵抗構造精密探查			
島	崎	邦	彦	地震研	島	崎	邦	彦	古地震			
佐	藤	比到	己志	地震研	佐	藤	比到	己志	反射法地震探査による活断層の地下構造			
金	沢	敏	彦	地震研	金	沢	敏	彦	海底地殻変動観測手法の開発			
佃		爲	成	地震研	佃		爲	成	内陸直下地震の予知			
笠	原	順	Ξ	地震研	笠	原	順	Ξ	海底ケーブルネットワークによる広域海底・海洋物			
									理的研究			
笠	原		稔	北大理	笹	井	洋	—	短期的地震前兆の発現機構の研究			
加	藤	照	Ż	地震研	加	藤	照	之	GPSによる総合観測研究			
吉	井	敏	尅	地震研	吉	井	敏	尅	島弧地殻の変形過程に関する総合集中観測			
加	藤	照	Ż	地震研	加	藤	照	之	地殻活動予測シミュレーション			
井	田	喜	明	地震研	鍵	Щ	恒	臣	火山体構造探査			
井	田	喜	明	地震研	渡	辺	秀	文	特定火山集中総合観測			
菊	地	正	幸	地震研	菊	地	正	幸	震源過程と強震動生成メカニズムの解明			

特定共同研究 (B)

Joint Researches of Universities and Institutes for Developing Studies

(全	国的	な規	模のク	゙ループが実施する	, 地	也震子	知・	噴火子	5知計画等の事業費に基づかない萌芽的研究プロジェ
ク	-)								
吉	畄	直	人	横浜市立大理	大	中	康	譽	地震サイクルと大地震の準備過程に関する総合的研究
中	田	節	也	地震研	中	田	節	也	高噴火ポテンシャル火山における噴火の規模・様式
									に関する研究

	代表	者名		所属機関		担当	教官		プロジェクト名
瀬	Ш	鬫	朗	東海大海洋研 究所	大久	久保	修	Ŧ	航空重力測定法の開発と僻地における重力測定
堀	内	茂	木	防災科学技術 研究所	鷹	野		澄	地震波形データの準リアルタイム解析システムの研 究
鈴	木	貞	臣	九州大理	深	尾	良	夫	九州・琉球背弧の深部構造とテクトニクスの研究
中	西	—	郎	京都大院理	菊	地	ΤĒ	幸	すすから光へ:古い地震気象へのディジタル化と解析
小	菅	ΤĒ	裕	弘前大理工	Щ	下	輝	夫	短波長不均質構造と高周波地震波の輻射特性
藤	井	直	Ż	名古屋大理	大约	く保	修	平	差分干渉SARによる地殻変動測定の高精度定量化

一般共同研究

Joint Researches by Small Groups

(所内外の研究者からなる少人数のグループで協力して進める共同研究) 佐野 修 山口大工 深尾良夫 神奈川県油壷における弾性波速度変化と比抵抗

Έ	ΞJ'			ШЦЛТ	/木	厇		ス	仲示川宗冲亜にのける泮住収还反反化と比加加
					歌	田	久	司	変化の比較観測研究(Ⅱ)
柳	谷		俊	京大防災研	歌	田	久	司	比抵抗の平面内3方向成分の高感度測定法の確立と
									それをつかった岩盤応力状態のモニタリング
新	ΤĒ	裕	尚	東京経済大経営	中	井	俊	—	西南日本・中期中新世の珪長質火成活動の成因
金	田	義	行	海洋科学技術	$\overline{\Psi}$	田		直	東北・北海道東部日本海溝海陸部における地下構造
				センター					の研究
鍵		裕	Ż	東大大理	藤	井	敏	嗣	含水マントル構成物質が高圧下で形成する水素結合
					安	田		敦	の分光学的研究
Щ	下		茂	岡山大固体地球	藤	井	敏	嗣	含水珪酸塩メルトの高温「その場」赤外光吸収特性の
				研究センター					決定
小	山	順	_	北大大理	大	く保	修	平	絶対重力・GPS連続観測による実時間プレート運動
									の検出
小	野	重	明	東大物性研	藤	井	敏	嗣	下部マントル中の化学組成に起因する層構造の解明
Щ	本	圭	吾	京大防災研	大	く保	修	平	絶対重力測定による桜島の火山活動に伴う山体内部
									の密度変化の検出
神	田		径	京大防災研	鍵	Щ	恒	臣	南九州の活火山の浅部熱水系と活動度との関連性に
									関する比較観測
佐	野	有	司	広島大理	兼	畄	—	郎	火成岩のIn situ Rb-Sr年代測定
藤		浩	明	富山大理	歌	田	久	司	3次元不均質球内の電磁誘導問題を解く
亀		伸	樹	九州大大理	Щ	下	輝	夫	地震の動的破壊の開始から停止まで - 破壊基準によ
									る違い -
石	原		靖	横浜市立大理	菊	地	ΤĒ	幸	自然地震の波形記録を活用した平野部地下構造の解析
湯	元	清	文	九州大大理	歌	田	久	司	地磁気変化観測と海底ケーブル誘導電圧との比較解
+=			-		<u> </u>	-		÷L	
加	滕		1	筑波大地球科	女	Ш		扖	局圧Fe系メルトの粘性測定実験
+-+	L		圡	子永	ŤÞ	-	5	百日	ᅇᅇᄨᆋᄺᇔᇔᅋᄯᅸᅶᇫᄻᇎᇫᆂᇥᇫᆂᆕᄟᇢᅘ
个∖」	上 ++		早后	一回山人環境理上	出	オー		时	GPS応力場逆解析手法の快証のためのモナル実験
回回	∱\] π.<	<u>ح</u>	具	向 扣 入埋 故計数理研究系	郁	口	希	旦	紀伊干島沿岸の湖沿の湖底堆積物中の洋波很砂の快面 「エムのエデルナロンセルは物料電送動教授化学の新 によって、
厇	ΉΣ	民	E	統計数埋研先所	頶	Ш		54	EIASセナルを用いた相対的地震活動前標110項目動
· ㅋ	m			我回上了	府王	ᄪᢦ			快山のにののアルコリスム開発
価	田 ++	7 %	旳	 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	鳫 217	野	吉	凉	流生ハースト通信による離局からのナーダ転达
四 /+	们	℃		北入入理	卻	可	新	旦 一	波局入局1/41年頃次C洋波-初証による古乂青の快祉 海底地電社を用いた二時油にわける白然地電活動の
迕	膝	小门	央	丅杗八哶	立	尿	順	=	
清	水		洋	広島大理	中	井	俊	_	岩石・鉱物の微小領域 in-situ 微量元素分析方法の確立

研究集会

Scientific Meetings

(全	全国の研究者が地震・火山関連分野のテーマについて集中的に討議する研究会)												
	代表	者名		所属機関		担当	教官		研究集会名称				
藤	井	直	Ż	名大大理	菊	地	ΤĒ	幸	地震予知研究の戦略				
井	田	喜	明	地震研	井	田	喜	明	爆発的噴火の素過程:理学と工学の接点				
伊	藤	谷	生	千葉大理	岩嶋	奇貴吉	哉・存	を藤	最新の地震探査・観測から見た島弧衝突のテクトニ				
					比吾	志・	・平日	百百	クス - 北海道中軸帯・伊豆・台湾を例して				
福	田	洋	—	京大大理	大ク	く保	修	平	衛星重力ミッションについての研究集会				
木	股	文	昭	名大大理	渡	辺	秀	文	噴火時期を迎える三宅島 - なすべき課題 -				
小盾	室口	剛	博	東大新領域	深	尾	良	夫	惑星物質の非平衡現象とパターン形成				
須	藤	靖	明	京大大理	鍵	Щ	恒	臣	九州の活火山における火山研究の到達点と今後の課題				
								- 雲仙・阿蘇・九重・霧島・南西島弧の噴火機構と					
									地下構造 -				
吉	井	敏	尅	地震研	吉	井	敏	尅	石淵爆破から50年:日本の地殻構造研究				
					岩	崎	貴	哉					
田	中	良	和	京大大理	笹	井	洋	_	伊豆半島における地殻活動電磁気学				
井	上		徹	愛媛大理	藤	井	敏	嗣	21世紀の地球惑星物質科学				
安	井	真	也	日大理	中	田	節	也	安山岩質マグマの爆発的噴火を中心とした火山の噴				
									火様式と噴火機構に関する研究				
Щ	本	昌	宏	東大大数理	桧	Щ	澄	子	地球物理学における逆問題 - 数学と地震学とのイ				
									ンターセクションを求めて -				

平成12年度科学研究費補助金一覧 List of Researches Supported by*ientific Grant-in-aid in 2000

研究種目	審査区分	研	究代	表者	名	研究課題					
特別研究促進費		平	田		直	地震・火山噴火予知研究成果の防災対策への活用方策に関する					
						調査研究					
特別研究促進費		金	金沢敏彦		彦	三宅島・神津島・新島近海群発地震活動に関する調査研究					
特定領域(B)		壁谷	字澤	寿	海	性能基盤型設計法の開発					
地域連携		加	藤	照	Ż	GPS津波計測システムを用いた津波防災システムの構築					
基盤(A)	一般	Л	勝		均	阿蘇山の火口直下に存在する圧力源の実体と噴火活動における					
						役割の解明					
基盤(A)	一般	島	崎	邦	彦	繰り返し注水実験による野島断層の強度回復の検出及び誘発地					
						震発生メカニズムの解明					
基盤(A)	一般	佐	藤	比吾	志	地殻構造探査にもとづく東北日本の地殻変形・改変過程の研究					
基盤(A)	展開	加	藤	照	Ż	RTK-GPSを用いた津波検知システムの開発					
基盤(A)	一般	中	田	節	也	火山噴火に伴うマグマの挙動に関する岩石学的研究					
基盤(A)	一般	壁衫	泽	寿	海	普及型地震計による構造物の耐震性能検証手法に関する研究					
基盤 (A)	展開	武	尾		実	光計測技術を用いた高性能回転地震計の試作					
基盤(A)	海外	$\overline{\Psi}$	田		直	台湾における衝突型プレート境界大地震の研究					
基盤(B)	一般	深	尾	良	夫	水中音波・水中多重反射波のアレー観測に基づく海底地殻活動					
						のモニタリング					
基盤(B)	一般	大久	ス保	修	$\overline{\Psi}$	人工衛生海面高度計と合成開口レーダーの統合運用による、新					
						しい巨大地震像の構築					
基盤(B)	一般	纐	纈	—	起	群発地震地域の稠密強震観測による詳細震源過程と強震動生成					
						機構の研究					
基盤(B)	一般	加	藤	照	Ż	GPS総合処理によるアジア~太平洋のテクトニクスの研究					
基盤(B)	一般	東	原	紘	道	コヒーレントな弾性波トモグラフィ装置の波形精度の飛躍的な					
						向上に向けた開発研究					

研究種目	審査区分	研	究代	表者	名	研究課題	
基盤 (B)	一般	堀		宗	朗	GPSデータの逆解析による広域応力分布・構成則の推定	
基盤 (B)	国際	菊	地	ΤĒ	幸	地震源と強震動の即時評価システムの開発	
基盤(B)	国際	I	藤	—	嘉	複数の国際テストサイトにおける地震動への局地的影響評価	
基盤(B)	一般	兼	畄	—	郎	希ガス同位体比、Ar-Ar 年代測定に基づく地殻・マントルでの	
						物質循環・進化の研究	
基盤(B)	一般	藤	井	敏	嗣	玄武岩マグマの脱ガスと結晶作用に関する研究	
基盤(B)	展開	歌	田	久	司	群列時間領域電磁法による火山体内部の状態監視システム	
						(ACTIVE)の開発	
基盤(B)	展開	堀		宗	朗	活断層挙動予測のための数値シミュレーション手法の開発	
基盤(B)	展開	東	原	紘	道	コヒーレント弾性波トモグラフィ装置(ACROSS)のフィール	
						ド展開	
基盤(B)	展開	Ш	勝		均	地震波動場のモニタリングによるリアルタイム地震解析システム	
基盤(B)	海外	歌	田	久	司	アジア大陸東縁部の上部マントル電気伝導度構造の研究	
基盤(C)	一般	都	司	嘉	宣	水底・海辺堆積物に見られる地震および津波痕跡の研究	
基盤(C)	一般	大	竹	雄	次	平行磁場と永久磁石による無定位回転振り子と、磁気バネを使	
						った地動検出器の開発	
基盤(C)	一般	歌	田	久	司	地球電場に関する基礎研究	
基盤(C)	一般	武	尾		実	小地震の断層面積の決定と地震相似則の検討	
基盤(C)	一般	Щ	下	輝	夫	断層帯内の流体移動と地震発生の動的相互作用の数値シミュレ	
						ーションによる研究	
基盤(C)	一般	井	田	喜	明	火口近傍における広帯域地震観測に基づく火山性地震・微動の	
						発生機構の研究	
基盤(C)	一般	Щ	中	佳	子	過去100年間の大地震の震源過程解析と全国アスペリティマッ	
						プの作成	
基盤(C)	一般	宮	武		隆	断層近傍強震動による家屋・墓石等の転倒の数値シミュレーシ	
						ョンと被害地震への応用	
萌芽的		深	尾	良	夫	直交光路レーザー干渉計による地球自由振動帯域のせん断歪直	
						接測定	
奨励(A)		篠	原	雅	尚	海底地震計を用いた微小地震観測による南海トラフ地震発生域	
						の研究	
奨励(A)		境		有	紀	地震動の単純化により震源から構造物に至る要因を考慮した地	
						震動を簡便に評価する方法	
奨励(A)		井	出		哲	不均質断層モデルを用いた地震破壊の複雑さの系統的研究	
奨励(A)		鶴	畄		弘	地震カタログを用いたデータマイニングの研究	
奨励(A)		古	村	孝	志	地殻・上部マントルの不均質性と異常震域生成メカニズムの数	
						値シミュレーション研究	
奨励(A)		竹	内		希	広帯域波形インバージョンによる3次元地震波速度構造及び減	
						衰構造の同時推定	
研究成果	データベース	菊	地	ΤĒ	幸	古地震気象マイクロフィルム	

○創成的基礎研究費

新プロ 深尾良夫 海半球ネットワーク:地球内部を覗く新しい目

〇特別研究員奨励費

研	究代	表者	名	研究課題								
中	村	洋	光	1Hz以上の短周期地震動を用いた詳細な震源過程の解明								
小	Щ	崇	夫	グローバル観測による地球核起源の電磁場変動の研究								
西	尾	嘉	朗	多元素同位体を用いたマントルの地球化学的不均質の成因の解明								
羽	生		毅	固体元素組成、揮発性成分組成に基づいた、マグマの進化プロセスに関する研究								
Щ	村	恵	子	岩石の比抵抗の研究								

研	究代	表者	名	研究課題
市	村		強	都市全域対象の超高分解能・階層型強振動シミュレーターの開発
市	来	雅	啓	東シナ海背弧拡大域の電気伝動度構造に関する研究
吉	田	昌	樹	数値シミュレーションを用いた地球マントル対流と表層運動のダイナミクスの解明
Ξ	部	賢	治	マントル物質の融解関係の精密決定とその地球分化への応用
八	木	勇	治	沈み込み帯における不均一応力蓄積過程と大地震の震源過程との関係の解明
小	林	励	司	太平洋上の観測点における表面波のポーラリゼーション異常
加	藤	照	Ż	最小二乗予測法を用いた日本列島の地殻変動の研究
(El-	Fiky	/, G. 3	S.)	
大ク	、保	修	平	GPS/SARの統合処理による地震発生領域のひずみ場の推定
(Re	ddy,	C. D).)	
笹	井	洋	—	日本列島中央部での応力場変動による地磁気変化の検出
(Ko	stro	v, N.	P.)	
深	尾	良	夫	ロシア極東、カムチャッカ地域の地震テクトニクスの研究
(Ma	artce	hnk	ov, A.)	
中	井	俊	—	珪酸塩岩石中の親銅元素・白金族元素の分析法の開発
(Sa	hoo,	Υ.)		

<u></u>	5成1	2年月	度受評	托研究一覧 List of Research Cooperation	between Univers	ities and Ind	ustry in 2000
石	开究作	代表者	¥	受託研究題目	委託者	研究期間	受入金額(円)
卜	部		卓	東京都伊豆諸島火山観測データによる地	東京都総務局	12.4.1 -	19,059,600
				殻活動に関する研究		13.3.31	
東	原	紘	道	大地震の即時情報システム支援データベ	理化学研究所	12.6.16 -	11,185,000
				ースの開発研究		13.3.31	
古	村	孝	志	3 次元地震波動伝播の統合的並列シミュ	(財)高度情報科	12.7.25 -	1,296,000
				レーションに関する研究	学技術研究機構	13.3.31	
佐	藤	比	己志	フィリピン海プレート周辺地域における	(財)地震予知総	12.8.3 -	3,121,000
				地震断層に関する調査研究「地震断層の	合研究振興会	13.3.31	
				不均質構造の推定」			
中	田	節	也	火道内マグマ脱ガス及び固結機構の解明	工業技術院地質	12.10.13 -	4,295,000
				「元素分布の解析」	調査所	13.3.31	
飯	高	ß	逢・	西太平洋沈みこみ帯構造の解明による	工業技術院地質	12.10.13 -	1,190,000
Щ	中	佳	子	「スーパーコールドプルーム」の研究	調査所	13.3.31	
佐	藤	比翻	己志	制御震源を用いた深部構造調査	工業技術院地質	12.10.13 -	315,000
					調査所	13.3.31	
鍵	Щ	恒	臣	電磁気探査に基づく火山体構造解析	気象研究所	12.8.24 -	10,235,000
						13.3.30	
壁谷	学澤	寿	海	鉄筋コンクリート架構の損傷評価	建築研究所	12.9.1 -	9,467,000
						13.3.21	
鷹	野		澄	国際地震波形データ流通システムの開発	防災科学技術研	12.10.26 -	3,679,000
				と運用	究所	13.3.23	
加	藤	照	之	「GPS気象学:GPS水蒸気情報システムの	気象庁	12.10.16 -	3,274,000
				構築と気象学・測地学・水文学への応用		13.3.30	
				に関する研究」のうち中国大陸における			
				GPS可降水量の評価			
纐	纈	—	起	GPS等による地殻変動観測	防災科学技術研	12.10.1 -	7,560,000
					究所	13.3.23	
平	田		直	中周期海底地震計等による地震観測	防災科学技術研	12.10.1 -	18,182,000
					究所	13.3.23	

研究代表者			Í	受託研究題目	委託者	研究期間	受入金額(円)
篠	原	雅	尚	応力源等の総合解析	防災科学技術研	12.10.26 -	3,642,000
					究所	13.3.23	
宮	武		隆	動力学モデルとモデル実験による地表	面 土木研究所	12.12.4 -	7,623,000
				における断層変位の発生特性と予測手	法	13.3.28	
				に関する研究			
				合計			104,123,600

国際交流 List of International Scientific Cooperation

〇国際学術交流協定

- ・ウッズホール海洋研究所(米国ボストン)との学術交流協定 共同研究:海底ケーブルの利用による地球科学的研究(笠原順三・歌田久司)
- ・パリ地球物理研究所(仏国パリ)との学術交流協定 共同研究:地球内部の希ガス同位対比に関する研究(兼岡一郎) 電磁気的手法による地震・火山噴火予知研究(笹井洋一)
- ・ロンドンユニバーシティカレッジ数理物理学部(英国ロンドン)との学術交流協定 共同研究:地震発生場環境条件下におけるせん断破壊過程を支配する構成則の確立(大中康譽)
- ・中国地震局地質調査所(中国北京)との学術交流協定 共同研究:中国東北部の地下構造・ダイナミクスの研究(歌田久司)
- ・ロシア科学アカデミーウラル支所地球物理研究所(ロシアエカチェリンブルグ)との学術交流協定 共同研究:日本列島中央部での応力場変動による地磁気変化の検出(笹井洋一)

〇日米科学協力事業(平成12年度)

- ・ロングバレー・カルデラの電磁気共同観測 笹井洋一・Malcolm JOHNSTON(米国地質調査所研究員)
- ・最新の深部地震探査に基づく日本島弧の地殻構造・地震活動・テクトニクスの研究 平田 直・Larry BROWN (コーネル大学大陸地殻研究所教授)
- ・太平洋地域のマントル電気伝導度構造の研究 歌田久司・Alan CHAVE(ウッズホール海洋研究所主任研究官)

○海半球観測研究センターによる太平洋地域における観測事業(代表 深尾良夫)

○国際シンポジウム(地震研究所主催)

- ・雲仙シンポジウム:防災10年火山の科学掘削(平成9年5月26~29日)
- ・海半球計画:地球内部を覗く新しい目(平成9年11月4~7日)
- ・GPS国際シンポジウム~地球科学への応用~(平成11年10月18~22日)
- ・海半球計画: OHP/ION合同シンポジウム(平成13年1月21~27日)



GO: Geophysical Observatory, O: Observatory, SO: Seismological Observatory, VO: Volcano Observatory, VCO: Volcano-Chemical Observatory

予 算 Yearly Budget

(単位:千円)

項目/年度	人件費	物件費	計	科学研究費	奨学寄付金
平成9年度	1,456,232	1,594,977	3,051,209	466,693	15,013
平成10年度	1,391,369	1,822,833	3,214,202	430,274	14,802
平成11年度	1,360,526	1,771,546	3,132,072	447,283	17,986

定員 Number of Regular Staffs

職名	予算定員	現員
教授	27人	23人
助教授	26人	21人
助手	37人	34人
事務官・技官	53人	54人
合 計	143人	132人

(平成13年4月1日現在)

13.本所平面図 Floor Plan of ERI



海半球観測研究センター 衛星テレメタリングシステム 副中継局 ちんしん



地下鉄 千代田線「根津」下車徒歩10分 地下鉄 南北線「東大前」下車徒歩5分

Subway about 10 minutes walk from Nezu Stn., Chiyoda line, and about 5 minutes walk from Todai-mae Stn., Nanboku line.

東京大学地震研究所

〒113-0032 東京都文京区弥生1丁目1番1号 電話(03)5841-5666 FAX(03)3816-1159・5689-4467 庶務掛

Earthquake Research Institute, University of Tokyo

Yayoi 1-1-1, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032, JAPAN Tel +81-3-5841-5666 Fax +81-3-3816-1159, +81-3-5689-4467



北西太平洋の深海底(水深5548m)に設置された,海半球ネットワークの孔内地震観測点(WP-2). 海洋科学技術センターの無人潜水艇「かいこう」による映像. An ocean bottom borehole seismic observatory of the OHP network in the deep sea basin of the northwestern Pacific. This picture was taken by a ROV, KAIKO in Jamstec.

平成13年4月発行

編集発行: 東京大学地震研究所 広報委員会委員長岩崎貴哉・要覧編集担当塩原肇 東京都文京区弥生1丁目1番1号 電話(03)5841-5666

印刷所:株式会社 三協社 東京都中野区中央4丁目8番9号 電話(03)3383-7281

